

K2A-32

Z32-B88

星の金

号月一



第 八 卷
第 一 号

国立国会

8. 3. 26

図書館

Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

世界少年少女偉人傳大系 (1) 大木雄三先生著・裝幀寺内萬治郎畫伯
挿畫柳田謙吉畫伯

ジヤンヌダルク

四六判箱入美本
内容一八〇頁
挿畫三色版外數頁
定價金九拾錢
送料六錢

馬上にフランス國旗をかざして「進め！」と叫ぶ聲が聞えては來ませんか。ジヤンヌ・ダルクの名を聞いただけで、必ず皆さんの耳に此の可憐な少女の叫び聲が響く事と思ひます。

今から四百年程前、丁度ヨロツバは、麻の如く亂れてをりました。フランスはイギリスと戦つてをりました。しかも、戦ひ利あらず、首都のパリは敵軍に包圍されて、フランスは今にも滅亡しようとしてゐました。その時、忽然として母國を救ふ爲めに、奮ひ起つたのは田舎娘のジヤンヌ・ダルクでありました。彼女の女がどんな働きをしたか、皆さん御存知であります。

本書はジヤンヌ・ダルクがまだ田舎の一少女として暮してゐた當時からはじまつて、最後に敵軍にとらへられて火あぶりの刑に處せられ、平然として天使の如く死んで行くまでの、尊い、勇しい彼女の一生を書いたものでありますから、是非御一讀下さい。

町坂動郷本京東
社星の金
番六九五九五京東替振

國王伽お

オハナシ

四六倍判假裝全五冊 定價各一圓
紙數各冊八十頁 送料各八錢

巖谷小波 著
巖谷小波 著
岡野榮、小林鏡吉、杉浦非水 畫

日本一の畫噺

袖珍假裝全三十五冊 定價各二十五錢
紙數各冊三十餘頁 送料各四錢

巖谷小波 著
太田三郎、岡野榮、細木原靜岐 畫

オトギウタ

四六倍判假裝全三冊 定價各八十錢
紙數各冊三十餘頁 送料各六錢

(書圖傳通定認書部文)

お話し——それはお子さんたちの成長に伴ふ止みがたい教養の表現です。筋のたつたお話はお子さんたちにどれ程大きな糧となるか量り知れないもの、あることは否めない事實です。鹿島先生のお話は直ちにお子さんたちの心に強く入つてゆくことを信じます。

お子さんたちの一番のお友達はお伽噺と動物の世界です。その抱く想像力は到底大人の及ばぬ夢の國の美しい宮殿です。小波先生はお子さんたちのお相手として少しも不遜のない物語りを綺麗な繪に添へて書いて下さつたのがこれです。

見るものも聞くものも、お子さんたちにとつて、それはすべて遊びです。遊びを感ぜるとき誰しもきつと唱はずには居られないでしょう。これは美しい繪と一緒にみえと讀いてくる小波先生のお伽噺、さあ皆して唱ひませう。唱ひませう。

通橋本日京東
社會式株善丸
ルど丸・田三・田神京東
札債福横 名京神大
興産四濟 古京都戸阪

西洋美術史

埃及から
現代まで

相良徳三著

定価二、〇〇
送料、二二

・ギリシヤの神話

中島孤島著

定価二、五〇
送料、二二

日本の風俗史

祖先の
生活

上里朝秀著

定価二、〇〇
送料、二二

最新刊

日本人は、日本の藝術に關してあまり雑然とした知識をのみ有してゐます。著者はその明快な筆致を以て、世界に誇るべき過去數世紀の日本文化の精華を彷彿たらしめ、兒童の藝術心を呼び醒まさうとしてゐます。

日本美術史

(飛鳥時代より明治時代まで)

文學士 相良徳三著

三四六判上製
二二〇頁

定価二圓四十錢
送料(書留)十二錢

電話三六六五 東京 振替 三二四一 院書ァデイ 區込生市京京 四一可伏山 兌發

山田耕作作曲

ホーム・ソングス

著者の序より:—

私は母なる人、姉なる人に切に希ひます。多くとはいひませんが、せめて夕顔のあと子らの眠りにつくまでの一時でも、充分です。どうか「よき歌」を唱和してください。それは、單に子らによき眠りを與へ、子らの胸に美の種子をおろし得るばかりでなく、生の疲に病み疲れた父の心を慰め、兄の胸をも慰すことになります。

この集はその實、私が聽むたものではなく、私の二人のこどもの選出したものであります。それ故に私は、この集を、幼い二人への愛を通して世の家庭に贈ります。もし幸ひにして、學校のつどひにこの歌曲のいくつかを役立てば私の喜は更に大きいものであります。

ホーム・ソングス 曲目

第一輯	第二輯	第三輯	第四輯	第五輯
ふ	え	紫雲英田	桔	葉
小鳥と牛鰻	光のお宮	よしきり	狸	橋
偉人の死	漁り火	愛の女神	かやの木山	音
春の磯邊	秋の夜	待ちぼうけ	地の母	さいち虫
母鳥小鳥	星	ハチカ	光もとめて	ちんころ小犬
春の歌	たきおもひ	やなぎのわた		賀

(第四、五輯は十二月初旬發刊)

定價 各輯 八十錢・三冊送料 十八錢

皆さまへ:—

ホーム・ソングスは各地の一流樂器店にて發賣してゐますが、もし品切れの場合は直接發行元イデア書院の方へ御注文下さいませ。直ぐに御返本申し上げます。

發行所 イデア書院 東京牛込區山伏町一四 振替 東京一五四二三

沖野岩三郎先生著・四六判箱入美本・三二〇頁
定價金壹圓八拾錢・送料六錢

日本の兒童と藝術教育

「エミール」のソツル
著名さべす比にル

著者沖野岩三郎先生が藝術と教育問題に就て如何に卓越せる見識を持つてゐるかは、何人も知つてゐる處です。本書は沖野先生の「童話論」ともいふべきもので、「兒童教育と童話」との關係に就てあらゆる方面から、著者獨特の研究と意見を述べたものであります。恐らく我が國の兒童教育問題で、これ程傾聴すべき名説は、他に求めることが出来ないと信じます。沖野先生自身も、本書一卷を以て世に問はうといふ大抱負のもとに發表されたものでありますから、眠れる我が國の教育界に一大警鐘となつて鳴り響くでせう。嘗てルツソーの「エミール」が、兒童教育問題の上に世界的反響を起して、當時の思想界に一大變化を來した如く、本書の一讀は必ずや讀者の思想を一變せしめずには措かぬでせう。教育家は勿論のこと、兒童藝術に携る何人も、是非一讀すべき名著であります。

町坂動郷本京東
社星の金
番六九五九五京東替振

足立朗々先生著 ◇ 高坂元三裝幀挿畫

世界名篇 選集第二編 こども忠臣藏

(三色版表紙箱入上等美本)

頁〇八一本文本
葉數十書挿
錢十九金價定
錢二十料送

かな手本忠臣藏と云へば、誰知らぬ者もない、赤穂四十七義士の仇討を、芝居に仕組んだものであります。何百年の昔から、芝居の中でも、これほど世の中に知られてゐるものはありません。しかしこれは、芝居として面白く見せるものから、作者の都合で年代を替へたり、人物の名を替へたりしてあります。それだけに、見ては面白いが、仇討の筋を見せるだけで、史實と遠ざかつてゐる。に、その時代の有様が、現はれてゐない憾みがありますのは、仕方ありません。この「こども忠臣藏」は、史實を元として、その事件の起りから、仇討の終りまでを物語り風に書き、それに義士達の艱難辛苦をする、苦心、忠節を、著者獨特の筆で、寫し出されてゐます。讀んでは、芝居以上に面白く、それに當時の有様が見えて、それで教訓になる、珍らしい本です。どなたも是非一度は讀んで、ほんたうの、四十七義士の仇討は、どんなものか見ていたゞきたいものです。

世界名篇
選集第二編
こども忠臣藏 (近刊)
定價金九十錢
送料十二錢

番一〇七一六京東替振
番七四六七草淺話電
社蘭金
外市京東
八二込駒上鴨集



挿	寶の山探險雙六	寺内萬治郎
ホワイ	ト・ハウス物語	寺内萬治郎
三人の	片輪が大蛇を退治した話	宮島資夫
讀者	だより	宮島資夫
文	風通	宮島資夫
金	札の鶴	三島霜川
家	鴨の駄け足	野口雨情
春	浅い頃	水谷まさる
石	屋	野口雨情
五	百七號室	三井信衛
鬼	は内福は外	西川喜平
母	親のうそ	小寺融吉
ば	の花	若山牧水選



夜	十字の出来事	島田新一
尾	なし鼠の話	野口雨情選
籠	の鳥	野口雨情選
日	蝕の日	田山花袋
飛	行しそこれたお爺さん	小川水村
あ	無情	久米舩一
硯	箱と時計	沖野岩三郎
愛	犬物語	小島政二郎
同	作	本居長世
ね	こくサイ	野口雨情
風	揚	寺内萬治郎
楽	しい	寺内萬治郎
春	表紙・石版	寺内萬治郎
リ	ンコン	岡本歸一
勝	て	岡本歸一





風

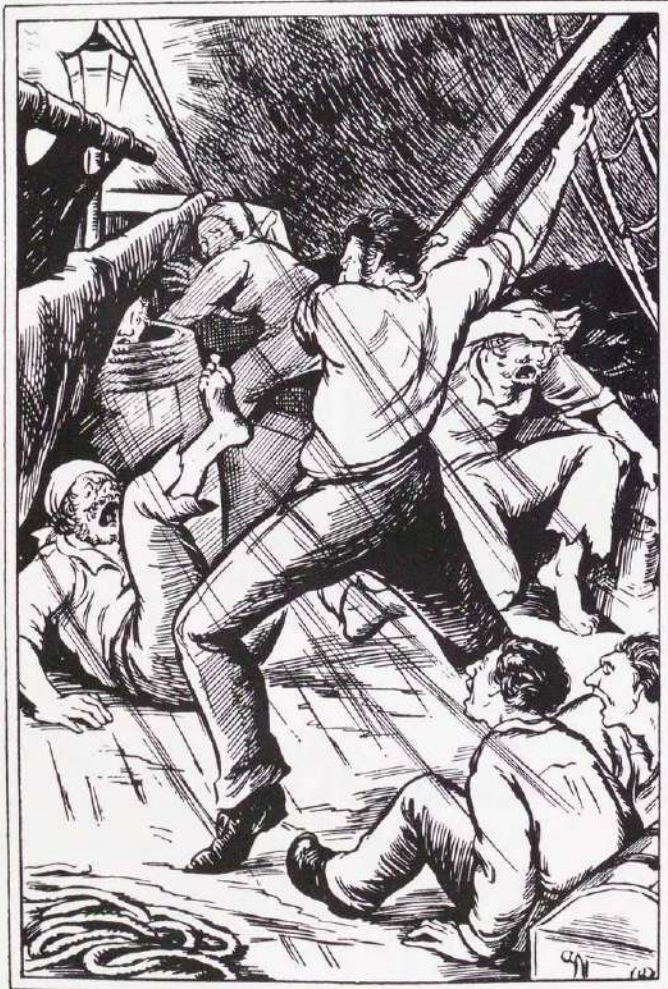
揚

げ

(金の星書局)

岡本歸一畫

!!! て勝。よ ンルコンリ



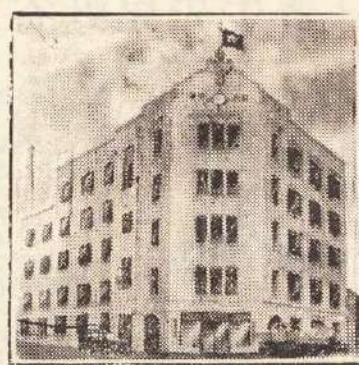
(。いさ下覽御を「語物スウハ・トイフホ」)

畫 郎 治 萬 内 寺

交 蘭 社

いちねん 一年の計は元旦にあり!!

立身成功の基礎をつくり將來大人物たらしめる諸君は
今スグ大日本國民中學會入會を斷行せよ。



新築完成れる大日本國民中學會

- 本會の十大特長
- 一、創立が古い
 - 二、内容が新しい
 - 三、基礎が固い
 - 四、教授法が巧い
 - 五、學制が正しい
 - 六、講師が偉い
 - 七、指導が良し
 - 八、會費が安い
 - 九、卒業が早い
 - 十、成功が確実

獨學で立派に中學卒業の學力が得られる。
創立は日本で一番古く
内容は日本で一番新しい
則正中學講義錄
講義錄見本つき規則書ハガキで
申込み次第無代進呈。
東京駿河臺
大日本國民中學會
電話 一〇七〇
振替東京四二〇〇番

沖野岩三郎先生作

裝幀・挿畫・岡本歸一畫伯 落谷虹兒畫伯

父戀し

四六判箱入美本
内容二四〇頁
口繪挿畫澤山
定價金壹圓
送料六錢

父様の船は歸らず
今日もまた
濱邊に出たが
何としよう
風和いで
たゞ恨めしい
海の色よ
何故答へない
この聲に

上に掲げた詩は「父戀し」の愛讀者の一人が著者に寄せたものでありますが、本書から受ける印象は、恐らく此の詩の中に現はされてゐませう。
「父戀し」は沖野先生の一大傑作であります。出版以來非常な好評を受け短い月の間に遂に第十版を發行した程澤山の愛讀者がありました。漁村に育つた少年と少女を主人公にした悲しい作らも雄々しい物語りです。そこらにありふれた唯悲しい涙をしばらせるやうな低級な作とは違つて、沖野先生の傑作として許されるだけの、誰が讀んでも深い感動を受けずにはゐられない程力のこもつた傑作です。行方不明の父を、母と共に尋ねて、遂に満洲の空でめぐり遇ふまでの一大長篇であります。この作などは、少年少女時代の愛讀書として、終生忘れ得ないものとして残る可きものです。

沖野岩三郎先生著

森の祈り

『父戀し』と共に大好評を受けてゐる物語りです。戦世に残るべき傑作です。

▽定價壹圓八拾錢
▽送料六錢

東京 本郷 金星社 電話 振替東京四二〇〇番
東京 本郷 金星社 電話 振替東京四二〇〇番

金社の星編 世界少年少女著名大系

四六判箱入類本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第一編

ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程渾身込められた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。

第二編

ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極まりない物語です。

第三編

ドン・キホーテ

イスパニヤの有名な物語。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

第四編

コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戦つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極まりない運命を書いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

第五編

大人國小人國めぐり
ガリバー旅行記

ガリバーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽をやリ、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさん／＼な目にあひ、漸く驚にさらはれて、本國に歸つて來るまで實に面白い物語りです。

金社の星編 世界少年少女著名大系

四六判箱入類本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第六編

ロビン・フッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは伯爵であつたロビン・フッドが悪い男のために國を奪れて遂に義賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王を救ふ義を起したり、悪い僧正をやつたり、そして最後に義殺されるまでの變化の多い物語りです。

第七編

アラビヤンナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を興へてゐるかかわかります。アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

第八編

ギリシヤ神話
オデッセー物語

ギリシヤの詩聖ホメーロスの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戰爭に逃々海を越えて出征した勇士オデッセーが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編

シェークスピア物語

有名なシェークスピアの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。『テンペスト』『御意のよ』『ベニスの商人』『かみ／＼女驢し』『真夏の夜の夢』『冬の夜ばなし』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

第十編

グリム童話

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な傳説研究家グリム兄弟の作つたもので、各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかし、グリムの童話は今ではドイツ一國のものでなく、少年少女の珍寶として尊ばれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められてゐる作はグリムの數多くの作の内、最も有名な面白いものばかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

星の金 社
編 界世少年少女名著大系

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編一十第

入 繪
イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまでに、随分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

編二十第

神 日 本
古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出来た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからすつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

編三十第

新 子 供
約 キリリスト傳
物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本である。この尊い人の一生を子供のために書いたものは他にない。本書はわが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

編四十第

西 遊
記

支那から印度へ、はる／＼お經を取りにわつた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々の魔物に出遇ひ奇々怪々の物語。一度讀み出したら本を置けない世界的の名作。この本を讀まない者は不幸である。

編五十第

ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心に、ローマ歴史を書いたもので、すから、面白い一大英雄傳です。ローマを最初に開いたロミウラスとレマスの不思議な物語りから、シーザーや、ハンニバルなどの大英雄の合戦の話など、順々にあらはれ息もつけぬ面白い物語りです。

星の金 社
編 界世少年少女名著大系

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編六十第

こ じ ょ
約 も
聖書物語

『バイブル物語』とも呼ばれ、歐米各國の少年少女が、幾度となく繰返し讀む程有名なお話です。日本の『古事記』のやうなお話で、ユダヤの國の昔にいつた、神様と人間との不思議な物語りです。『新約物語』と一しよに讀んだら、聖書のことかわかつて面白味深いでせう。

編七十第

奴 隸
トム物語

白人種のために大猫同様にあつかはれてゐた奴隸の涙の物語りです。傳人リシヤが現れるまで、米國のあらはれた奴隸たちの生活を書いたもので、最初の一頁から最後の頁まで涙なしに讀めぬ本です。偉大、崇高な氣持だが、この本によつてどんなに變はれることとせう。

編八十第

ギリシヤ英雄物語

日本にはじめて紹介されたギリシヤ英雄の物語りで、原著は有名な英國文豪キングズレーです。傳説に従つて書かれたものだけに、その面白さは格別です。どの勇士のお話も、實に面白くて、胸をおどらせるものばかりです。かういふ面白い話を知らずに済ませるのは残念です。

編九十第

アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならないほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

編十二第

小 公
子

幼くして父を失ひ、神の如く氣高き母を持つた小公子の運命を書いた物語りです。世界的に有名な家庭小説にして我が國にも早くから知られてなりました。少年少女のために紹介されたのは本書が最初です。原作はバーネット女史の作で、全篇清い愛と涙と敬訓に満ちたされてなります。

『狼少年』は日本圖書館協會より、過去一ケ年間に少年少女から愛讀された良書の中で、最もよい本の一つとして名譽ある推薦書に挙げられました。本書が如何に面白くて良い本であるか、これを以ても知られます。

英國文豪 キツプリング原著・小島政二郎先生譯・寺内萬治郎畫伯裝幀

狼少年

四六判箱入頗美本
内容三一二頁
挿畫三色版外澤山
定價壹圓九拾錢
送料六錢

- 【次目】
- | | |
|-----------|--------------|
| 第一 狼少年 | 三 水牛の突厥 |
| 二 大虎あらはる | 四 大虎退治 |
| 三 狼に助けられる | 五 ブルデオとの決闘 |
| 四 熊と豹の親切 | 六 シニヤーカーンの生皮 |
| 五 赤い花 | 第三 狼の町 |
| 六 狼會議 | 一 狼の同情 |
| 第一 虎！虎！ | 二 喜の使 |
| 二 モーグリ人間の | 三 大蛇の加勢 |
| 三 世界に歸る | 四 狼の町へ着く |
| 四 鐵砲の名手 | 五 大戦争はじまる |

本書は印度の大自然の中で狼に育てられた不思議な少年の物語りであつて、その内容の面白さは目次を見ただけでもわかります。全く雄大な物語りであつて、世界の少年文學を通じてこれ程立派な作はないといはれてゐます。譯者小島先生は、是非日本の少年少女諸君に、こんな面白い、大きな創作のある事を知らせたいといふ熱心な希望から紹介されたものであつて、日比谷圖書館で少年少女諸君から最も多く讀まれたといふのも無理ならぬ事でありまゝ。是非御一讀下さい。

東京 本郷 動坂 町
金星社
東京 東替 五九九六番

日本圖書館協會推薦。若溪會推薦。『家なき娘』は少年少女の愛讀書として最も良い本であるといふ名譽を、日本の讀書界に權威ある二つの會から與へられました。圖書館や學校は勿論、各家庭に是非お備へ下さい。

マローロ 井信衛 作
三井信衛 譯

家なき娘

四六判クロース製箱入美本・本文三六〇頁・定價壹圓九拾錢・送料六錢

『家なき子』の主人公少年ルミが、浮世の荒波にもまれて、あらゆる艱難をするやうに、『家なき娘』の主人公公バリンヌも、また、悲しい人生の旅を続けなければなりません。旅の間に父と母を失ひ、愛する驢馬と共にまだ見ぬ祖父を尋ねて行く家なき娘の物語りは、全く涙無しには讀めないであります。

こんなにいい作をまだ讀まぬ人があつたら、それこそ本當に不幸といふべきです。新年の爐邊で讀みになつたら、どんなにか興味深い事でせう。御一讀をおすすめてします。

電話 小石川 三八七番
電報 東京 五九六番

東京 本郷 町
金星社

日本童謡作曲界を代表するものとして大好評を受けてゐます。童謡音楽愛好者は是非お供へ下さい。

一輯二輯	各定價金六拾錢
三輯以下	各定價金八拾錢
送料	各金六錢

本居長世作曲・野口雨情作謠

(目 曲)
人買船、青い目の人形、九
官鳥、日傘、歸る燕、十五
夜お月さん

本居長世作曲・野口雨情作謠

(目 曲)
一つお星さん、七つの子、
鮎と雀、鶏さん、象の鼻、
四丁目の犬

本居長世作曲・野口雨情作謠

(目 曲)
青い空、燕、雨夜の傘、で
んく蟲、雀の酒盛り、呼
子鳥

本居長世作曲・野口雨情作謠

(目 曲)
赤い靴、山彦、三日月さん、
姥捨山、朝鮮飴屋、眠り龜
の子

小松耕輔作曲・野口雨情作謠

(目 曲)
夢とり、おしやれ椿、つば
子、十と七つ、雲雀の水汲、
雀の機織り

本居長世作曲・野口雨情作謠

（目 曲）
道 子守唄、櫻と小鳥、乙姫
ん、霜柱、葱坊主、薺の下

木居長世作曲・野口雨情作謠

(目 曲)
お人形さんの夢、釣鐘草、
啼いた啼いた雉子、芒の穂、
お馬のお耳、草遊び、霜柱

小松耕輔作曲・達崎龍作謠

(目 曲)
べんく鳥、螢のお使、仔
牛、赤い小馬車、紅殻蜻蛉
さみだれ

中山晋平作曲・野口雨情作謠

(目 曲)
あの町この町、木の葉のお
舟、高野山、鼠のおばさん、
狸ばやし、雀をどり

本居長世作曲・野口雨情作謠

(目 曲)
長柄の橋、柱ぐさり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳飴、石山寺の秋の月

東 京 本 郷
 動 坂 町
 金 星 社
 振替 東京 五九五 番
 電話 小石川 三八七 番
 大 賣 捌
 東 京 市 外
 下 墨 四 八
 白 眉 社
 振替 東京 五四五 番
 電話 五九八 番

東 京 本 郷 金 星 社 振 替 五 九 五 六 番
勤 坂 町 石 川 小 話 電 九 八 七 番

東 京 市 外 大 賣 捌 社 振 替 五 四 五 番
下 目 黒 四 六 八 番



(通巻第七拾四號)

家なき子

エクトル・マロー原著 装幀—挿畫
三宅 房子 譯 寺内萬治郎畫伯
クロース表紙箱入美本・定價金壹圓八拾錢
内容 二七〇頁・送料金 六 錢
主人公の少年ルミは、名家の生れ乍ら不思議な運命に弄れ、捨て子としてバリーの大通りで拾われます。そして流れ／＼で旅役者に賣られ、旅から旅をさすひ歩く一生を書いた真に人生の哀れを覺える名篇であります。

青眼の人形

野口雨情先生著 装幀 路谷 虹兒畫伯
挿畫 寺内萬治郎畫伯
紺表紙箱入美本・定價金壹圓八拾錢
内容 二三〇頁・送料 六 錢
雨情先生の童話集で目下發行中のものは、本書があるばかりです。先生の最も圓熟せる時代の傑作ばかりを集めた本書こそ、童話研究家の座右に無くてならぬ名著であります。遂に第六版を發行するに至りました。

電話 小石川三五七八番
電報 東京五九六九番

東京 本町 金 星 社

ねこねこサイサイ

作曲 本居長世

作謠 野口雨情



ねこくサイく

野口雨情

ねこくサイく

ねこサイく

日ぐれにや雀は

ごこで啼く

日ぐれにやお藪の中で啼く

ねこくサイく

ねこサイく



夜あけにや雀は

ごこで啼く

夜あけにやお藪の中で啼く

ねこくサイく

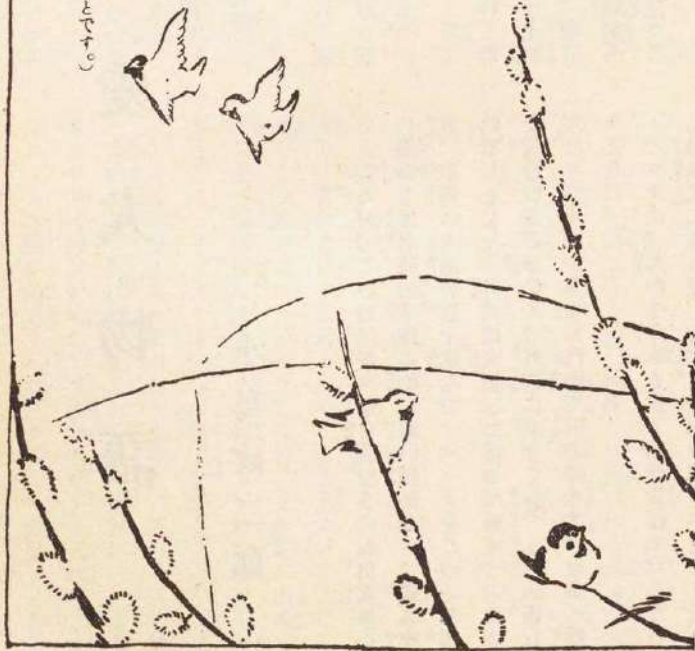
ねこサイく

河原のお家へ

いつ歸る

雀の啼くごきわしや歸る

(註 ねてくサイくは、ねこやなぎのことです。)





愛犬物語

小島政二郎

バックは日當りのいゝ、廣いお屋敷に飼はれてゐました。毛の房々とした大きな犬で、重さが十七貫もあつて、見るからいゝ骨組をしてゐました。利口で強いものですから、御主人からも坊ちゃん達からも可愛がられ、大事にされて、仕合せな日を送つてゐました。

ところが、このお屋敷へ毎日のやうにお出入りをしてゐる植木屋の手傳の中に悪い奴がゐて、或る夕方、家族の人達の目を盗んで、バックをこつそり連れ出しました。外には犬買ひが待つてゐて、バックを買ひ取るが早い、汽車に乘せて桑港へ連れて行き、そこからまた汽船で雪の降るアラスカへ送りました。

バックは、人から人へと賣りわたされて、しまひに橋曳犬にされました。買つたのは、ペロルと云ふ

人と、フランスアと云ふ二人でした。

南國生れのバックは、まづ寒いのに驚きました。雪と云ふものを初めて見ました。その上、文明國から、雪の大平野の真中に連れて來られたのですから、今までとは生活がすべて違つてゐました。旨いものを食べて、起きたい時に起き、寝たい時に寝、ふざけたい時にふざけるなんと云ふことは、とても望めませんでした。朝から晩まで橋を曳きづめに曳かなければならぬのでした。少し怠けたり云ふ事を聞かなかつたりしようものなら、すぐ棍棒が飛んで來ました。

それはかりでなく、仲間の犬がまたみんな野蠻で、しじゅう喧嘩ばかりしてゐました。しかも、どれもこれも狼のうに恐ろしい犬ばかりでしたから、バックは絶えず油断なく身構へをしてゐなければならませんでした。

あなた方は、犬にいろいろ種類のあることを御存

じでせう。例へば、ブルドッグとか、セッターとか、ボインターとか、土佐犬とか、秋田犬とか云ふやうに。それと同じやうに、橋曳きに使はれる犬は、大抵ハズキー種と云つて、狼に近い山犬でした。ですから、喧嘩のやり方も激しくて、バックはまだこんな恐ろしい噛み合ひを見たことがありませんでした。

或時、それは材木屋の傍に、天幕を張つて休んでゐる時のことでした。バックと同じやうに、普通の犬で、名をカレーと云ふのが、ごく人のいゝ犬で、誰とでも遊びたがつてゐましたが、その時、山犬の中でも一番癡猛なスピッツの奴へふざけかゝつて行きました。スピッツと云ふのは、大ききから云へば、カレーの半分もありませんでした。それでも丁度一人前の狼位はありましたらう。此奴が、いきなりカレーに飛びかゝつて、牙をザクリと入れて、またヒラリと跳び退きました。カレーの顔は、それで

もう目から顎まで引き裂かれてゐました。

一噛み噛んで跳び退く、これが狼流の喧嘩の仕方です。狼流と云へば、喧嘩をしてゐる二人を取り巻いて、外の連中は舌舐めすりをしながら見物してゐる、これも狼流です。なぜ舌舐めすりなんかするのか御存じですか。狼の友食ひと云つて、どつちか負けて死ねば、生きてゐた間は友達であつたらうが何だらうが一向遠慮なく、ムシャ／＼食べてしまひます。つまり喧嘩をしてゐる以上、どつちかが倒れるに違ひない、それを待ち兼ねて、舌舐めすりをしてゐるのです。

さて、カレーは敵に突つかうつて行きました。ところが、またしてもスピッツは一噛み噛んで跳び退きました。カレーが苛だつてもう一度突つかうつて行つた時、相手は胸を突き出して受けたかと思ふと、カレーの體はコロリと雪の上へ轉がされてゐました。と、忽ち、待ちかまへてゐた山犬共が、牙を鳴

らして一時に攻め寄せました。カレーの體は、二三十匹の山犬の下に隠れて見えなくなつてしまひました。

若しこの時、フランツアが棍棒を揮つて山犬の中に飛び込んで行かなかつたら、カレーは食はれてしまつたに違ひありません。

見ると、スピッツは眞赤な舌を出して笑つてゐました。バックは、あんまり事が突然なのと、あんまりむごたらしいのに呆れ返つてしまひました。が、このことが、バックにはいゝ教訓になりました。

「一度負けたら最後だぞ。よし、どんなことがあつても俺は負けてはならない。」バックは覺悟を極めました。

スピッツの方を見ると、まだ舌を出して笑つてゐました。バックは憎くつてくたまりませんでした。

二



翌る朝早くから、六匹の犬達は、馬車を曳く馬のやうに、三匹づゝ二列に革帶で櫓へ縛り附けられて、谷の向側の森まで行つて、薪を積んで歸つて来る仕事を幾度もくく繰り返させられました。

バックは右側の二番目にゐましたが、一番先頭がスピッツ、これは櫓犬の中で一番いい位置で、その次にいいのが櫓のすぐ近くの犬でした。つまり、バックが力を惜しんで遅れたりすると、うしろから尻尾を噛んで叱りつけるのでした。またバックが進み過ぎれば、前にゐるスピッツが唸つて警告を發しました。何のことはない、馴れた犬の間に挿まれて、彼は櫓の曳き方を教はつてゐるのでした。しかし、一度行つて歸つて来るまでに、バックはすっかり骨を呑み込んで、『ホウ』でとまつて、『シユツ』で進んで、曲り角では幅廣く引つ張ることなどを知りました。

『バックの奴上手に曳くぢやないか。俺はあんな覺

えのいゝ奴を見たことがない。』フランシアがペロルに云つた位でした。

その日の午後、また二匹ふえました。ビリーとジョーと云ふ兄弟で、やはり山犬でしたが、兄のビリーの方は、人がよくつて氣が弱かつたものですから、忽ちスピッツにいちめられました。しかし、弟のジョーの方は、我儘で強くつて、スピッツが向つて行つても、少しも恐れずに足を踏み締め、首筋の毛を逆立て、耳をうしろに逸らし、唸り続け、目を耀して立ち向つたので、流石のスピッツも放れてしまひました。

夕方になると、ペロルがまた一匹どこからか連れて來ました。これは年寄の山犬で、顔に幾つも暗味の傷痕があつて、しかも目は一つつぶれて一眼しかありませんでしたが、いかにも強さうに光つてゐました。

二人は、この犬のことを、

さうになりました。

外の犬はどうしたのか一匹も姿を見せませんでした。悲しく疲れて雪の上を歩き廻つてゐるうちに、彼の前足が、ズブリと雪の中へ落ち込みました。見ると、あの人のいゝビリーが、雪を掻き退けて地面に穴を掘つて、その中へチャンマリとこままつてゐるのでした。

バックは早速真似て、穴を掘りました。その中へ暫く小さくなつてはひつてゐると、體の温もりが暖く一杯に籠つて、すぐに眠ることが出來ました。

ところが、一夜のうちにまた雪が降り積つて、いつの間にか彼の體を隠してしまひました。ですから、翌る朝、バックが雪の下から跳ね出したのを見た時、フランシアは、

『どうだい、見ろよ、ペロル。バックの奴全く覺えが早いぢやないか。』

ペロルは政府から大いなる手紙を預つて、雪の大平

『ソル。ソル。』と呼んでゐましたが、ソルと云ふのは、何でも『腹立ち』と云ふ意味ださうです。このソルが、悠々とみんなの間に進み出た時には、さしものスピッツも手出しが出來ませんでした。

ところが、ソルには一つの癖があつて、潰れた目の方へ近寄られるのが大嫌ひでした。バックが知らずにそつち側に立つと、突然ガブリ噛みつかれて、肩のあたりを縦に二寸五分程引き裂かれました。それ以來、バックは注意して二度と同じ過を繰り返さないやうにしました。

その晩、彼は寢る所に困りました。天幕の中へノソノはひつて行くと、

『こん畜生。』とペロルとフランシアとに、嘔鳴りつけられたので、驚いて外へ飛び出しました。いゝ鹽梅に、雪は降り止んでゐましたけれど、風は寒く、殊に肩の傷はしん／＼と浸みるやうに痛み續けました。雪の上に寝ると、五分もすると體が凍えて死に

野を越えて一刻も早く向うへ届けなければならぬ役目があつたので、どうかして、犬を得たいと望んでゐました。さう云ふ矢先に、バツクのやうな利口な犬を手に入れることの出来たのを喜びました。



犬はすべてゞ九匹になりました。ペロルとフランシアとは、朝早くから犬に革帶を付けて、一列に横に繋いで出發しました。いよくこれから寒い北の地方へ進むのでした。先頭はスピッツ、一番最後はデブ、その前がバツク、バツクの前がソルと云つた順序でした。その日は氷河を越え、峠を越えて十四里進んで、湖の縁へ夜營をしました。翌る日も、雪の上を十四里進みました。バツクは、橋を曳くのはそんなに厭ではありませんでした。朝から夕方まで働きつめに働いたので、お腹が減つてたまりませんでした。一日の食事と云へば、僅かに干鯉を一斤半しか貰へませんでしたから、外の犬と違つて體の大きなバツクには、とても足りませんでした。ところが、或日バイクと云ふ犬が、ペロルのあちらを向いた暇に、素早く鹽豚の一切れを盗んだのをバツクは見ました。翌る日、彼はすぐにその通りの真似をやつて、しかも大きな同じ切れを撈つて逃げ



ました。——かうして、日當りのいゝお屋敷で育てられた上品なところは、日を追うてなくなつて行きました。上品になど構へてゐたら、こゝでは生きて

行くことが出来なかつたでせう。

その代り、どんなまづい物でも、どんな消化の悪い物でも、平氣で食べられるやうになりました。それがみんな血になり、筋肉になりして、彼の體は今や鐵のやうに強くなりました。見る早さも嗅ぐ力も鋭くなりましたが、殊に危険の近づいた時など、彼の耳は實に早くそれを聞き分けました。また空氣を嗅いだばかりで、あらかじめ風の方向を知る法をも彼は知つてゐました。そよりと風のないのに、木や土手の蔭に穴を掘つてゐるのを不思議だと思つてゐると、夜中あたりから大風の吹き出した例は幾度あつたか分らない位でした。そんな時、バツクは木や土手に風を避けて貰つて、穴の中で温々と眠つてゐました。かうして、バツクは人の家に飼はれた犬らしいところが段々なくなつて、山犬に近くなりました。一噛み噛んではヒラリと跳び退く狼流の戦法をも彼はいつか學んでしまつてゐました。



硯箱と時計

一〇

沖野岩三郎

石之助が机にむかつて、算術を考へてゐますと、隣の金太夫さんが来て、
「佐太夫さん。石さんはよく勉強するネ。きつと硯箱になりますよ。」と言ひました。すると佐太夫は、「いゝえ。石之助はとて硯箱にはなれせんよ。硯箱になるのは、あんたの所の茂丸さんですよ。」と申しました。

ふすまのこちらで、お父さまと金太夫さんの會話をきいてゐた石之助は、變なことをいふものだからと思ひました。
しばらくして、金太夫さんが歸つたので、石之助はすぐ、お父さまの所へ行つて、
「お父さま。茂丸さんか、僕か、どつちかが硯箱になるつて、何の事です？」ときいてみました。
石之助があまり不思議さうな顔をしてゐるので、お父さまは膝をたいて笑ひながら、

「狸が茶釜になつた話はあるが、人間が硯箱になつた話は、きいたことがない。なるほど私たちの言葉のつかひ方が悪かつた。硯箱になるのは、茂丸さんか、お前か、どつちだらうと言つたのは、かういふわけだ。」と云つて、お父さまは硯箱になる話を説明しました。

「石之助、お前はこゝの殿様のお名前を知つてゐるだらう。」

「知つてゐます。山野紀伊の守でせう。」

「さうだ。元は三萬八千石の殿様で、今は子爵様だ。」

東京にゐらつしやる。」

「馬術の上手な殿様でせう。」

「其の大殿様はお亡くなりになつて、今は若殿様が子爵家をお嗣ぎになつてゐられる。山野紀伊の守様が東京へお引越になられてから、もう五十七年になる。其間に一度も此町へお歸りにならないので、此町の達はだん／＼と殿様の事を忘れてしまひさう

だ。昨年若殿様が御病氣なされた時、誰ひとりお見舞の手紙を差上げたものもなかつた。それは町の人にも都合だが、殿様にも欠點がある。五十七年間、一度も御自分の領地であつた、此町へお出でにならなかつたのが悪い。そこで、殿様と此町の人たちとの關係を深くするために、今年から此町の學校を卒業する優等生に、殿様から御褒美を下さることになつたのだ。中學校と實業學校との優等生には鐵側時計、女學校の優等生には銀側時計、小學校の優等生には硯箱を下さるんだ。御定紋付の硯箱を……」

お父さまがそれだけ言つた時、石之助は、

「わかつた、わかつた。僕、其の硯箱をほしいなア。」と云ひました。

「うん、はしからう。私もお前が其の硯箱をもらつてくれ、ばい。」と思つてゐる。ところで今、六年生の一番は茂丸さんだといふぢやないか。茂丸さんは、あれは煙草屋の子で、士族ぢやないんだ。折

角殿様からの下されものだ。出来ることなら、昔の家来であつた士族が貰ひたいもんだ。こゝは代々足輕で十石二人ふちを頂だいてゐたんだ。お前が其の硯箱をもらつてくれたなら、殿様もさぞお喜び下さるだらう。」

お父さまの佐太夫は、さういつて涙ぐんでゐました。

「お父さま大丈夫

だ。僕、きつと

其の硯箱をも

らつてみせ

る！」

石之

助は



元氣に、握拳で膝をたゝきながら言ひました。「さうか。其の覺悟はいゝ。お前は茂丸さんに勝つ見込があるか。」

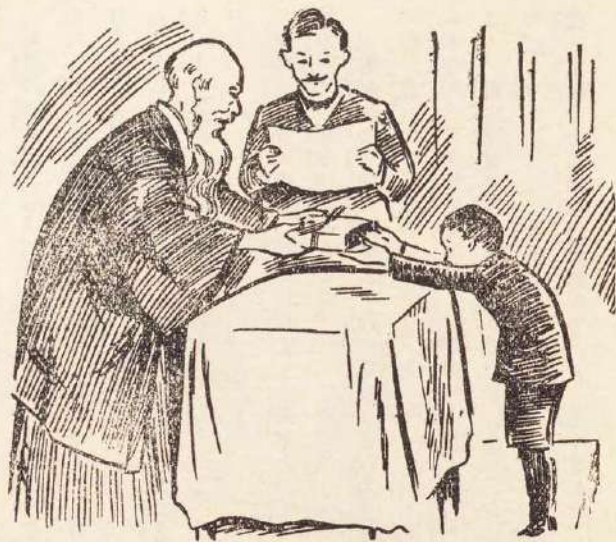
お父さまは、ほろりと涙を落しました。

「あります。僕きつと一番になつてみせます。」

石之助は自信のあるやうに言ひました。

その翌る日から、石之助は寝ても覺めても硯箱のことを忘れませんでした。どうしても殿様から硯箱を頂戴しなければならぬと思つて、必死に勉強しました。

一月二月がすぎ、三月が來ました。卒業試験が近づいてきました。石之助の眼の前には殿様の定紋のついた硯箱が、ちらついて見えます。けれども正直に言ふなら、算術は茂丸の方がよく出來ます。習字も茂丸の方が上手です。同じ満點であつても茂丸の方が、解き方が上手であり、書き方が美しいので、同點ではあるが茂丸が一番になるのです。だから何



とかして茂丸を二番にする方法はないものかと考へてばかりゐます。

茂丸は石之助よりも身體が弱いので、あまり必死になつて勉強はいたしません。お父さまの金太夫さんが、いろ／＼と硯箱のことを言ひますが、茂丸は唯にこ／＼笑つてゐて、そんなものをほしいとも何とも云ひません。金太夫さんは、茂丸には勇氣がなくていけない、やつぱり平民の子は駄目だと云つて、憤慨してゐました。

いよいよ卒業試験が始まりました。ところが二日目の算術と綴方との試験の日、茂丸は風邪をひいて、ひどく熱を出したので、學校を休みました。

石之助は試験がすむと、おうちへ飛んで歸りました。そして、

「お父さま、大丈夫硯箱が頂だいできますよ！」と申しました。

「大丈夫か。」と佐太夫は叫びました。

「大丈夫です。今日は茂丸さんが試験を休んだので、點數は平常點でつける……さうすると、きつと僕が

一番になる！」

石之助は手をたいて、座敷中をはねまはりました。お父さんの佐太夫も喜びました。

お隣の金太夫さんは、たうとう硯箱は石之助のものと云つて、ほろ／＼涙をこぼしてゐました。けれども茂丸は、

「なあに、落第しつこはないよ。」と云つて、おふんの上で童話の雑誌を読んでゐました。

卒業式の日が来ました。いろいろの式があつて、賞品授與の順序になりました。

山野紀伊の守様の御家老を勤めてゐたといふ、髯の白い老人が、殿様の代理で、

「本年から卒業生の優等生に、舊藩公山野子爵閣下より、御定紋付の御硯箱を下さるることになりました。」と申しました。その時石之助の眼の前には、殿様の定紋である桔梗の金箔がきら／＼光りました。



一四

「粉白石之助……」と呼ばれた時、石之助は夢のやうに思ひました。きつと自分に呉れるとは思つてゐたが、いよ／＼名を呼ばれてみると、其の喜びは口にも筆にも現はせないほど大きなものでした。

式が終つて、おうちへ歸りますと、佐太夫は早速その硯箱を佛壇の前に供へて、

「お父さま。お母アさま。おちいさま。おばあさま。喜んで下さい。今度作の石之助は殿様から御定紋付の硯箱を頂戴いたしました。どうぞ石之助をほめてやつて下さい。」と申しました。おッ母さんも、佛壇の前ではろ／＼と、嬉し涙を流してゐました。

三月の終に、石之助も茂丸も中學校の入學試験をうけました。成績発表は、石之助が一番で、茂丸が三番でした。それを見た金太夫さんは、口の中で、「中學校の鐵側時計も、石之助さんのものだわい。」とつぶやきました。佐太夫は、

「今度も石之助が鐵側時計になるぞ。」と間違つた文法で言ひました。

中學の一年から二年になる時、石之助が一番で、茂丸が五番でした。

三年になつた時、石之助が一番で、茂丸が七番でした。

四年になつた時、石之助が一番で、茂丸が九番でした。

いよ／＼卒業の時が来ました。卒業式には縣知事が来ました。髯の白い家老さんも来ました。そして殿様の定紋を刻みつけた鐵側時計は石之助に下さいました。

町の小さい新聞には、大きな活字で、石之助のことを、ほめて／＼書いてありました。

茂丸は十番で卒業しました。身體が弱くて時々休んだからでした。

中學の卒業は六十五人でした。其中で二十人は自分のうちで、百姓や商賈をすることになりました。五人は巡査になりました。十人は小學校の先生になりました。三十人はそれ／＼専門學校や高等學校に入學することになりました。

石之助も茂丸も東京で高等學校の入學試験を受けるために、郷里を出立しました。

佐太夫は、石之助が出立する前の晩、石之助を自分の室へ呼んで、

『小學校も中學校も、ずつと一番で通して来たんだから、よもや落第する氣づかひはなからうが、落第しては殿様へ申しわけがない。きつと及第しておくれ。』と申しました。石之助は、

『多分、大丈夫だらうと思ひます。』と答へました。

『試験がすんで、及第とわかつたなら、直ぐ田端の御殿へお伺ひして、殿様にお禮を申し上げるんだよ。』
佐太夫は武士のやうな口調で申しました。

ならんぞ、膝行を。』

『いつかう？ それはどんなことですか？』

『膝行とは、膝であるくんだ。私が教へてあげる。』

佐太夫は次の室へ出て行つて、兩手を疊について、ひざであるいて敷居のところまで、進んで來ました。そして、

『わかつたか、膝行とはかうするんだ。』と云つて、

石之助にも二三度、いつかうのおけいこをさせました。

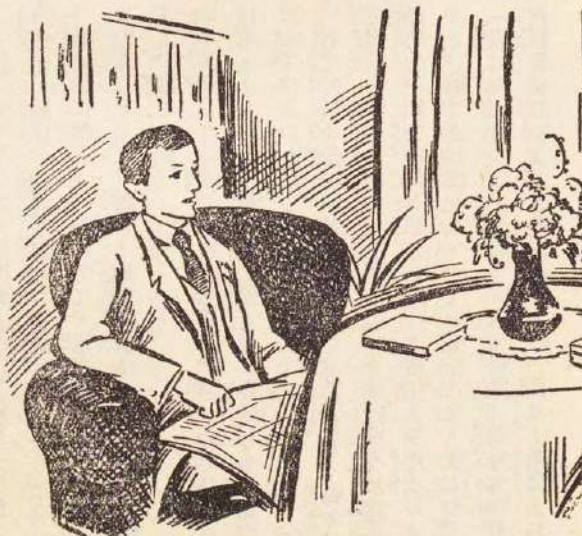
石之助も茂丸も無事に高等學校へ入學出來ました。しかし成績は茂丸が一番で、石之助が五番でした。

『何でもいゝ入學出來たのだから。』と思つて、石之助は田端の山野子爵家を訪ねました。

表玄關から取次を頼みますと、三太夫が出て來て、住所姓名を尋ねた上、

『殿さまは會つて下さるでせうか。』
石之助は何だか、おつかないやうな氣がいたしました。しかし、會つて下されば名譽だとも思ひました。

『藩士だもの、會つて下さるにきまつてゐる。しかし身分は足輕十石二人ふちだから、膝行しなければ



『舊藩時代の御身分は？』と問ひました。そこで石之助は、

『足輕十石二人ふちでございました。』と答へまし

た。それをきいた三太夫は、

「さうですか。では表玄關ではありません。あちらの小玄關からお入り下さい。」と申しました。

石之助は變だなアと思ひ乍ら、小玄關へ行つてみますと、戸袋の横に、「五十石以下はこの玄關より」と書いてありました。

しばらくすると、短い袴をはいた書生さんが出て来て、

「殿様はこちらの應接室にお待ちです。」と言ひました。

石之助は袴の裾の塵を拂つて、埃まみれな足袋を脱いで、玄關へ上りました。書生さんがドアをあけてくれました。見れば應接室の奥に色の蒼白い青年が、椅子にかけてゐます。

「どうぞ、こちらへ。」と書生さんは申しました。

石之助は兩手を疊について、膝行を始めました。そしてやつとドアの所まで、ゐざつて行きますと、

今まで俯向いて新聞を読んでゐた蒼白い青年は、石之助の方を見て、

「おい／＼、膝行なんて、そんなことは老人のすることだ。さつさと入つて来たまへ。」と申しました。青年が、殿様の山野子爵だつたのです。

石之助は顔をまつかにして、應接室へ入つて行きました。そして、硯箱と鐵側時計とお禮を申しますと、殿さまは、

「不思議だね。僕はそんなものを、君にあげた覚えはありませんよ。第一僕と君とは、今はじめて會つたのではないか。」と申しました。

石之助は小學校卒業の優等生が、五年前から毎年、定紋付の硯箱を頂いてゐることに、中學の卒業優等生が鐵側時計を頂いてゐることを申し上げますと、殿さまは腹をかゝえてお笑ひになりました。

「僕は知らないよ。僕はそんなものを、君達にあげた覚えはないよ。多分家令どもが、段々と舊藩士に

忘れられるのを苦しく思つて、そんな事をしはじめたのだらう。へーん、さうかなあ。僕の名前で硯箱

だの鐵側時計だのを……じやうだんぢやない、僕は學習院の中學部で二度も落第したんだぜ。たうとう高等部に入學出来ないで、かうして毎日、ぶら／＼遊んでばかりゐるんだよ。世間には僕のやうなものから賞品をもらつて喜んでゐる奴があるのかい。」

殿様は書生さんのやうに、ぞんざいな言葉をつかつて、また大きな聲で笑ひました。

石之助はびつくりして、ぼんやりしてゐました。すると殿様は、

「おい、誰だつたつね、さう／＼紛白石之助君。君は今まで僕を君よりえらい人間だと思つてゐたんだらうネ。昔は殿様と足輕だが、今は中學の落第生と高等學校の學生さんだよ。君の方が僕より二倍も三倍もえらいんだぞ。」と申しました。

石之助はます／＼びつくりするばかりでした。殿

様は又た申しました。

「君。僕のやうな低能なものから、硯箱だの時計だのを貰つて喜んでゐるやうでは駄目だぜ。學問を勉強しなくてはならないよ。本當の學問を……」

其のとき石之助は、この落第生の殿様を、本當にえらい人だと思ひました。

それから石之助は、勉強の目的を變へました。今までのやうに、褒美をもらつたり、一番になつたりするための勉強ではなく、自分の志したお醫者になるための學問を、必死に勉強しました。

大學を出る時、茂丸は理科の一番でした。石之助は醫科の一番でした。

落第生の殿さまは、其頃もう身體が達者になつて、北海道で牧畜をして大成功してゐました。「殿様の牛乳配達」といふ記事が、日本中の新聞にのつたのは、二人が大學を卒業した年の夏頃でした。

(をばり)



あゝ無情

久米 舩一

一、不思議な旅人

佛蘭西の片田舎に、ディニユと云ふ小さな町がありました。この町の中央に、周囲を花壇で囲まれた、美しい噴水が立つて居ります。

今、この噴水から落ちて来る水が、兩手で掬つて、おいしそうに飲んでゐる一人の男が、あります。年齢は四十七八でせう。肩幅の廣い、たくましい體つきですが、その服装と云つたら、何んと云ふにめさでせう。黄いシミの附いた麻のシャツ、膝がはみ出した

てゐるズボン、そして足には、鉄を打つた重い兵隊靴を穿いて居ります。今まで遠い道を歩いて来たと思へ、靴も袖も、白く埃にまみれてゐます。

やがて男は、水を飲み終つて立上りました。鼻の高い、険しい顔つきです。日に焼けた顔には、これまでの艱難を思はせるやうな、幾重もの深い皺が刻まれてゐます。

男は、汗を拭つて歩きだしました。通りすがりの人々は、みんな立止つて、恐ろしうにこの男の後姿を眺めました。中には、ヒソヒソと囁き合つてゐる者もありま

す。併し、男は、そんな事はちつとも構はず、眞直ぐ前を歩いて、兵隊のやうな足どりで歩いて行きました。

噴水から二丁程の處に、シヤカン・ラバールと云ふ、大きな旅館がありました。旅館と云つても田舎の事ですから、一寸見た所、居酒屋だか何んだか分らないやうな、薄ぎたない、ガランとした所でした。

男は、この店先へ進入つて行きました。主人らしい、デブプリと肥つた男が、白い前掛けをかけて、爐の前で料理をこしらへてゐました。

「ごめん下さい。」男は帽子を取つて、丁寧に云ひました。

「夕食と、泊りを御願ひしたいんですが、如何でせうか?」

主人は顔を上げて、デブプリと男の顔を見ました。併し、何んとも云ひませんでした。

「いかにせう、泊めて戴きませうか?」

「お金へあればね……」主人は、不覺想に答へました。すると男は黙つて、ポケットから大きな皮の財布を取り出して、卓の上に載せました。ズシリと重い音がしました。

「よろしい。お泊りなさい。」主人は云ひました。男はホツと安心したらしく、財布をしまつて、火の沸く椅子に腰かけました。その椅子は、金くたびれ切つてゐると云ふ風でした。右手で頬杖をついてゐる男の顔は、爐の火が赤々と照しました。

主人は料理の手を休めずに、注意深い眼を男の後姿に注いで居りました。そして、どこか疑はしい處があると思つたのでせう。新聞紙の片断を引き裂いて、鉛筆で何か手早く書留めました。それから召使の少年を呼んで、その書つけた市役所へ持つて行

かせました。男の身元調査をする爲です。

「夕飯はまだですか。」男は待ち切れなくなつたやうに、顔を上上げて訊きました。

「はい、只今……もう直ぐでございます。」

主人は口先でだけかう云つて、出来上つた料理を男の所へ運ばうとはしませんでした。

そこへ先刻の少年が歸つて来ました。主人は少年の手から、紙片を取つて讀みました。それには男の素性が、詳しく書かれてありました。主人は料理をやめて、前かけで手を拭きながら、男の傍へ近寄つて行きました。

「お前さん、直ぐ此處から出て行つて下さい。」

男はそれを聞いて、突然立上りました。そして、その鋭い眼で、ちいッとする主人の顔を見つめて居りましたが、やがて靜かに云ひました。

「ふむ、出て行くと云ふなら、出ても行きませうが、併しその前に、何故泊めて貰へないのか、その點を聞かして貰ひませう。」

「よろしい。その點を云つて上げる。うちに、今、空いた室がないのです。」

「室が無ければ、厩で寝山です。」

「厩には、馬がぎつしり這入つてゐます。」

「ちや、物置だ。誰なんかにいらぬ。第一來ればよろしい。」

「お氣の毒だが、物置には酒樽が天井まで積んであるんだ。風一匹だつて這入れやしな

い。」主人は憎々さうに、かう云ひました。

男はそれを聞いて、又靜かに腰かけに腰をかけて云ひました。

「さうですか。ちや泊めて貰ひません。その代り、直ぐ夕飯出して下さい。私は今朝早くツローンを出發して、十二里の道を休みなしに歩いて來たのです。」

「お生憎だが、うちには今、何んにも食物がないんだ。」

男はそれを聞いて、唇をたて、笑ひ出しました。

「食物がない? はい、戯言云つちやいけません。あそこに湯氣をたてゐるのは、ありや食物ぢやないんですか?」

「先約があるんだ。二十人分、ちやんと前金で仕拂つてあるんだ。」

「ちや、私も前金を出します。」男はかう云つて、又、例の皮財布を取り出さうとし



ました。併し主人は、手早くその財布を元の所へ押し込んで、

『さあ、い。そんな物はしまつとけ。俺は君から、そんな物は貰ひたくないんだ。今直ぐ、此處から出て行つて貰ふたいんだ。』

『なんだ？』

『おい、此處は宿屋ぢやないか。そして、俺は金を持つた立派なお客様ぢやないか。それに……』

『うるさいッ！』主人は破れるやうな聲で、男の云ふ事を打消してしまひました。

『つべこべ云ふな。おい、浮浪人！俺は貴様が、何んと言ふ名前か云つてやらうか。放免囚徒、ジャン・バルヂヤン——。貴様が今まで、どんな事をして来たか、みんな此處で喋べつてやらうか。……おい、なにもそんな感傷的な顔をしなくてもいい。俺は一體、親切な性なんだからな。手荒な事はしたくないんだ。さあ、袋を掲げ、ステッキを持って、直ぐ此處から出て行け。』

男は無言で立ち上りました。よれ／＼になつた帽子を冠り、大きな袋をかつぎ、右手には棒の木の杖を引摺つて、うなだれた儘、戸口へ出て行きました。

二、さすらい

戸口には先刻から、近所の子達が多勢集まつて、珍らしい童の串を覗き込んで居ました。そして、男が出て来たのを見ると、一せいの小石を投げつけました。

男は立止つて、杖をかまへながら、さつとあたりを見廻しました。その恐ろしい姿に、子供達に蜘蛛の子を散らすやうに、逃げて行つてしまひました。

日が暮れました。ディニーは山間の町なので、十月と云へば、もう身を切るやうな冷たいアルプス風が吹き荒みます。

街路樹の黄色い葉は、すっかり掃ひ落されて、カサコソと乾いた音をたて、地面の上を走り廻つて居ります。

街燈がサラ／＼と輝きだしました。

その下を例の不思議な男ジャンバルヂヤンは、ぢいッとうなだれて、何だ深く考へ込みながら歩いて行きました。どこへ行つても、誰一人として泊めてくれようとする者はありません。泊める處か、パン一切れだつて分けてくれる所が無かつたのでした。こ

の小さな町には、もうさつきり、ジャンバルヂヤンの噂が擴まつてゐるのです。――やど四日前に監獄から出て来た男。うっかり宿でも食さうものなら、どんな目に遭ふか分らない——と、人々は考へてゐました。

或る家の子供は、門口に立つてゐる彼に向つて、梨の心をぶつけました。また、或る家の主人は、ジャンバルヂヤンに鐵砲を差し向けて、

『さあ、出て行け。このやどなし奴、出ないと射つぞ！』と脅かしました。

ジャンバルヂヤンは、町はづれて、一ツの小さい、汚い小屋を見つけた。四方に板が張つてあつて、小さい入口が、たつた一ツしかありません。きつと道路工夫達が、ジャンバルヂヤンの道具類を入れて置く所なのでせう。

ジャンバルヂヤンは、此の中に泊ひこみました。中には、薪が澤山敷いてありました。彼は、薪の上に寝た身軀を投げだして、ほつと一息つきました。先づこれで、食物は無くとも、寝床だけは有りついた譯でした。丁度其時、外の方で、『ウー』と云ふ、

「ジャシバルデヤンは、口の方を見ました。と、どうでせう。闇の中に、恐ろしい番犬の顔が浮びだしてゐるではありませんか。ジャシバルデヤンが匍い込んだ家と云ふのは、犬小屋だつたのです。」

シャバルヂヤンは、樫の棒をかまへ、袋
を嚙として、犬を拒しながら、やつとの事
外へ出る事が出来た。可哀さうに、世界
中に誰一人として、彼の味方になつて呉れ
る人はありません。最後に匍ひ込んだ、汚い犬
小屋からも排出されてしまひました。

「俺は犬にも及ばないものか。ジャンバルズ
ヤンは、地面にぐつたりと蟲り込んだまゝ、
つづいて、
かう吐くきりしたかがありませんでした。
やがて彼は、又立上つて、力なく歩き
だしました。何處へと云ふ目算もありません
でした。ふと氣がつくと、何時いつか町な
を出してしまつて、寂さびしい
野原に來て居ゐました。
行手にはアルプス山並みが、深い夜霧に包
まれて、靜かに眠つて居ゐります。
星もない暗い晩でした。夜の冷氣が、ひし

もう彼は、晩の八時頃でした。ジャンバル
デヤンは、町の教會堂の所まで引歸して
來ると、もう疲れ切つて、一足も前へ進めな
くなつてしまひました。彼は教會堂の敷
石の上に、死んだやうになつて身を横へま
した。

「おや、貴方はそんな所で、何をしていまするのです。」

「何を？ 見たに分るぢやないか。」

「この屈座者め。」

してゐるので、思はすこゝな非道い事を云ひ

「まあ、そんな所に寝てゐられたら、お春中が痛いでせうのに。」
「ナニ、痛い所か。お前さん等の寝るやうなバネ付きの寝臺より、よつほどよい、氣持で

さ。豹「ひいやりと冷たくてネ……。」
「宿屋にいらしたらいい、でせうのに。貴方は、
ラペールの旅館屋にいらつしやいましたか。」
「行きましたとも。それから、もう一軒の宿
屋にも行つたんです。だが、何處でもお断
りさ。なうとうしまひに、犬の小屋へ行つた
所が、其處でも断はられちやつた。」

「貴方は、おんなの家を訪れてごらんになりまし
たか?」
女はかう云つて、かどなり會堂の傍にあ
る、ちよ小さな家を指し示した。平家蔵の家
で、窓からは闇かに灯の影が洩れてゐまし
た。

『行きましたとも。』ジャンバレザンは、
見もしないで答へました。

『いゝえ。貴方はまだあの家へはいらうしや
いません。あの家へ行つて、断はられるなん
て事は、決してありません。あれはモリエール

僧正の家です。ミリエル僧正は親切な方です。ミツと貴方な泊めて下さいますでせう。さア、直ぐお出でなさい。」

ミリエルと云ふのは、このデリーニの信仰の中へ、「聖者」と呼ばれてゐるほどの聖い人、就處な老人でしだ。大僧正と云ふ立派な役であるにも拘はらず、いつも粗末な着物か着、汚い家に住んで満足してゐるのでした。そして少しもお金があれば、貧しい人や、困つてゐる人に施してやるのでした。又面白い事には、この家の扉には、一ツも錠とか、鍵とか云ふものがなくて、這入りたいと思ふ人は、何時でも勝手に入つて來られるのでした。これは個々正しく「僧侶の家」として、聖者の家の戸とは、常に閉かたてゐなくてはならぬ。と云つて、扉の金具を、スツカリと取り除いてしまつたからでし

僧正の家（家）に云つては、バテイスデー
タと云ふ（そうぜう）妹（妹）に人よ、マダロー
ルと云ふ、齡とつた下女との二人切りでした。

てうとものひ　ゆうがたげじよ
 恰度其日の夕方、下女のマダロアールは、
 いちほ　かいもの　い　お　うはさ　き

市場へ買物に行つて、恐ろしい噂を聞いて來ました。と云ふのは、四五日前に獄禁を申込んだばかりの無根拠が、夕方から此の町に入込んで來たと云ふのです。さ、マグローアに例の無い屏が、心配で、僧正の所りません。家へ歸つて來ると直ぐ、僧正の所

へ行つて、是非、扉に錠をつけて呉れる
うにと、くりかへしく頼んだのでした。
「旦那様。どうかお願いします。今晩
一晩だけでも宜しいです。錠をつ
けて戴きたうございます。でないと、私
は申しあげられぬ。うーん、だんなさま

「今晩は顔で眠れません。その上、目も赤い。お食だらうが何んだらうが、誰れに向つてま直ぐ「さあ、お道入りなさい。」と仰しやるのですもの、困つてしまひます。」
 俗正「暖爐の傍に腰かけて、俯むきながら、つてそれを聞いてゐました。」

「ねえ、旦那様、これから誰れが参りましたか、先づ、どんな者がよく確かめて、それやうに屏を開けるやうにして下さいましね！」
「ちやうど其時、表の戸を誰れかが烈しく叩く音が聞えました。僧正は、ツと首を上げ

て、はつきりした口調くわうで云いひました。
はみ

「お道入りなさい。」
 扉が勢よく開かれて、
 なした大男が、ぬつと道入つて來ました。
 それは疑ひもなく、例の浮浪人でした。
 袋を擔ぎ、櫂の棒を持ち、足には兵隊靴
 を履いてゐました。

まア 何んと云ふ恐ろしい姿でせう。マ
 ヲロアールは、あつと云ふ聲も出す、其處に
 立嫁んでしまひました。パティステイマも、
 思はず後退りなしました。そして、ソツと兄
 の僧正の方を見ますと、僧正は何時に變らぬ

おたまたまお話を聞かして、何か物聞ひたげに、柔
しい眼の男の方へ向つてゐました。その落
ついた有様を見て、妹のバティステイヌ
も、ほつと安心する事が出来ました。
男は、すか／＼と暖爐の添へ寄つて來て
云ひました。

「聞いて下さい、皆さん! 私はジャンパ
ル・チャンと云ふ者です。悪役人です。四日
前に監獄を出て、今晚この町へ来ましたが、
離れも泊めてくれる者がありません。なにしろ、
こんな氣味の悪い恰好なしてゐますから

「……どうです、貴方の所で、泊めて呉れますか？」
 僧正は、それには答へずに、下女の方を向いて云ひました。
 『マクロアールや。直ぐ食事の用意をしておくれ。お客様がいらしたのだから。何か、御馳走があつたかい？』
 ジャンバルヂヤンは、吃驚したやうな顔をして、僧正の顔を見つめました。此處でもきつと斷はられるに違ひないと思つてゐたからでせう。

「え、なんですって？ ぢや、貴方は私を遣出さないんですか。私は悪役人です。囚人です。まア、これを一ツ見て下さい。」

ジャンバルヂヤンはかう云つて、ポケットから一枚の黄色い紙片を取り出しました。それには次のやうに書かれてありました。



ジャンバルヂヤン。放免囚徒。竊盜罪の爲に五年、四回脱獄を企てたるため十四ヶ年、都合十九箇年間、監獄に留まりたるものなり。至つて危險なる人物なり。注意すべし。

「どうです。面白いでせう。面白くありませんか。これが私の通行券です。この爲に私は、何處へ行つても追はられるんです。貴方も多分、さうなるんだらうと思ひますか……」
 僧正は、やはりそれには答へずに、下女の方を向いて云ひました。
 『マクロアールや。奥の寢室に、白い敷布を敷いておくれ。お客様がいらしたのだから。それから、あの、銀の燭臺があつたらう。あれに銀燭をつけておいで。それから、銀のお皿が六枚あつたらう。あれも皆んな持つておいで。』
 僧正は、果れてボカンとしてゐるジャンバルヂヤンの方を向いて、
 『貴方。もつと火の傍へいらして下さい。もう直ぐ食事の用意が出来ますから』と云ひました。

ジャンバルヂヤンは、漸く總ての事を了解することが出来た。

した。彼は狂気のやうになつて、僧正の前に膝まづき半ば叫びました。
 『お、で、貴方は私を泊めて下さると云ふんです。この私か！』
 彼はかう云つて、眼を輝かせて、僧正の顔を見上げました。僧正も顔に笑ひながら、ジャンバルヂヤンの肩に手をかけて、食卓に坐らせました。



うになつてゐました。二人がその寢室を通りぬける時、下女のマクロアールは、先づ使つた銀の皿を綺麗に拭いて、一枚々々戸棚にしまつてゐました。

その銀の皿は、僧正が叔母さんから遺品に貰つたもので、六枚で一組になつてゐました。分の厚い、ドツシと重みのある古銀で、少なくとも二百法の値打はありさうでした。
 何一つとして目ばしものない僧正の家で、この銀の皿と銀の燭臺ばかりは、あたりの様子に不似合な、贅澤なものでした。ジャンバルヂヤンは、通りすがりに、ナラリとそれを見て行きました。

四、銀の皿

やがて食事が運ばれました。ジャンバルヂヤンは、食ふやうに食べ始めました。幾ら食べても、足りませんでした。下女のマクロアールは、呆れたやうな顔しながら、あとからノとパンだの野菜だのを運んできました。僧正はジャンバルヂヤンと向ひ合せて腰かけて、自分もつゝ、まじく匙を取りながら、ジャンバルヂヤンの様子に満足さうに、そつと見やつてゐました。食事が済むと、ジャンバルヂヤンは、暖爐

のわくみと、お腹が一杯になつたので、眼を細くして、うつとりしてゐました。
 『大い眠くなつたやうですから、もう寝むことに致しませう。マクロアールや。寢室の用意は出来たかい？』
 『はい。奥の部屋に用意して置きました。』
 『では、貴方、こちらにいらして下さい。』
 僧正はかう云つて、燭臺を手に取つて先におくへやした。

（このジャンバルヂヤンと云ふのは、一體どういふ人なのでせうか。今晚、この家に泊つて、何か間違ひが出来はしないでせうか。）



飛行しそこねた爺さん

大戸 喜一郎

お爺さんは、不思議でたまりませんでした。だつてお婆さんが、夜空に弓のやうな月がのぼると、きまつて一晩ちう家をあけるのを知つたからです。けれどもお婆さんは、いつもお爺さんがぐつすり寝こ

んでしまつてから出かけて、まだ目をささないうちに、歸つてくるのでした。ですから、まだ一ども出かけるところも、かへつて來るところも、見たことがありません。まして、どこへ行くのやら、何を

しに行くのやら、少しもわかりませんでした。

たゞお爺さんは、お婆さんがまつさをな顔をして、いかにもつかれた様子で、一日ちうこつくり、こつくりぬむりをしてゐるので、

「はゝあ、昨晩行つたんだな。」

さう氣がつくだけでした。

まつたくお爺さんは、お婆さんのことが、不思議でたまりませんでした。

「もしや、魔法使ひではあるまいか。」

お爺さんは、さう思つてもみました。けれどもさう考へると、いよゝだまつてゐるわけには行きませんでした。そこで、ある日のこと、

「婆さんや、お前は魔法使ひではあるまいね。」

さう言つてたづねました。すると、どうでせう。

お婆さんは平氣な顔をして、

「えゝ、魔法使ひですよ。」

さう答へるではありませんか。お爺さんは背中に

冷たい水をかけられたやうに、ぞつとして、ふるへあがりました。

「けれども心配しなくてもいいのです。私は何にも悪いことをするのではありません。たゞ空を飛びまはつてあるだけです。もし誰にも言はなければ、こんど行つたとき、見て來たことをみんな話してあげませう。」

そこで、お爺さんは約束をしました。

再び、弓のやうな月が夜空にのぼりました。するとお婆さんはまた姿を消して、夜があけるまで歸つて來ませんでした。

あくる朝、お爺さんはさつそくたづねました。お婆さんは、上機嫌で、

「えゝ、話して上げませう。」

さう言つて語り出しました。

お婆さんたちは、みんなで五人、お山の一番大き

な楠の木の下に集まりました。そしてみんなは、毒うつぎの葉を握つて、楠の木の枝にまたがりました。するとその枝は、立派なお馬にかはつて、スウィツと空高くのぼつて行きました。そして矢のやうに、空中を飛行しはじめたのです。



お山も、川も、陸も、海も、どん／＼眼の下を飛びすぎて行きました。さうしてお婆さんたちは、人の住んでゐない不思議なお國につきました。そのお國では、サイダーやレモン水などが、自然に、岩の間からふきだしてゐるのです。お婆さんたちは、珍らしい角のコップで、すくつては飲み、すくつては飲み、お腹がはちきれほどのみしました。

やがて、小さい／＼小人が、手風琴をもつて、昔だらけの岩の穴から出て來ました。そしてしづかに、手風琴を鳴らしはじめました。その音といつたら、とても人間の世界では聞くことができない、澄みきつた、美しい、うつとりさせるやうな音でありました。川に住んでゐる魚も、睡つてゐた小鳥たちも、土の中にゐる土龍も、みんな出て來て、ちつとき、ほれました。お婆さんたちもたまらなくなつて、みんな踊りををどりはじめました。さうして疲れて、ぐた／＼になるまで踊りくるつたのでありました。

お爺さんはこの話を、だまつて聞いてをりました。

そして話がをはつたとき、はじめてかう言ひました。「だが、踊りををどつたからつて、いつたい何にな



るんだね。家にゐてぐつすりねむつた方が、ずっと氣持がいくちやないか。」

けれども、お婆さんは、につと笑つただけで何とも言ひませんでした。

次に弓なりの月が空にのぼつた晩、お婆さんはまた出かけて行きました。そしてそのあくる朝、またお話をしました。

こんどは、お婆さんたちは海に行つたのでした。みんなは帆立貝の舟にのつて、沖へ沖へと出て行きました。そして遠い北極の島へ着きました。そこで、こんどは目に見えない馬に乗つて、山だの、谷だの、氷河だのを越して、寒い／＼雪につゝまれた冬の國につききました。

その國で、百年に一どしかない大宴會が催されたのであります。世界ちうから、いろ／＼の魔法使ひが集つて來ました。お婆さんたちはその人たちといつしよに、おいしいご馳走をたべたり、唄をうたつ

たり、踊りををどつたりして、楽しく時間をすごしたのであります。けれどもお婆さん（はあば）の一番うれしかったのは、自由に空をとんで思ふところへ行ける魔法と、どんな嚴重な錠（じやう）でもすぐ開き、どんなにひどく縛られてもすぐぬけ出せる魔法を教つて来たことでした。

お婆さんはよつぱどうれしかつたと見えて、この事をくりかへし／＼話してきかせました。ところが、お爺（ぢい）さんはちつとも嬉（うれ）しさうな顔（かほ）をしないで、太い皺（しわ）を眉（まゆ）によせて言ひました。

「何だつてそんなに寒い國（くに）へなんか行くのさ。家にゐてあつ／＼かい布団（ふとん）に寝（ね）てゐる方が、よつぱど氣持（きもち）が／＼ちやないか。」

けれども、三どめにお婆さんが話をしたとき、お爺さんは今までとはうつて變つて、熱心（ねっしん）に／＼はれました。

こんどは、お婆さんたちは仲間の家に集つたので

「い。私（わ）も、ほんのちよんぴりでい／＼から、その珍らしいお酒（さけ）がのんでみたいんだよ。」

お爺さんはかう言つて、頼みました。けれどもお婆さんはき／＼ませんでした。

「い。え、そりやいけませんよ。もしこの言葉をみんなの人が知つてしまつたら、それこそ世の中（よ）がひつくりかへつてしまひます。みんながみんな、何にもお仕事をしないで、空（そら）を飛んで歩いては、他のためたものやおいしいものを取るやうになりますからね。だから辛抱（しんぱう）して下さい。いろ／＼のお話を聞くだけで、十分（じふ）ではありませんか。」

それでもお爺さんは思ひきれないで、せひ教へてくれと頼（たの）みました。けれどもお婆さんは、どうしても教へてくれませんでした。

お爺さんは仕方がないので、だまつてしまひました。けれども決して思ひきつたものではありません。また夜空（よぞら）に弓（ゆみ）なりの月（つき）がのぼると、お爺さんはこ

した。そして隣（とな）り國（くに）の王様（おさま）が、それはそれは珍らしいお酒（さけ）を持つてゐると聞いて、それを飲みに行かうと相談（さうだん）しました。みんなは冬の國（くに）で教つたとほり、さつそく曲（まが）り柄（え）の杖（つゑ）にまたがつて、魔法の言葉を口にしました。するとどうでせう。みんなのからだは煙（けむり）のやうに、スウーッとあがつて行つて、ちぎれ雲（うみ）のやうに空（そら）を飛んで、みる／＼お城（しろ）の酒庫（しゆく）の前（まえ）につきました。そこでまた冬の國（くに）で教つた魔法で、嚴重な錠（じやう）をあけて、中（なか）に入つて行きました。酒庫（しゆく）の中で、みんなはどんなにおいしいお酒（さけ）のんだこととせう。もう少（すこ）しで、一番鶏（いちばんどり）が鳴くまでに、お家（うち）へかへつて來（き）られなくなるところでした。

かう聞いたとき、お爺さんはまったく飛び上がつてうれしがりました。だつてお爺さんは、お酒（さけ）が大好き（だいずき）だつたからです。

「お、お前（まえ）さんはほんとにいろんな事（こと）を知つてゐる！　ところで、私（わ）にせひその言葉を教へてくれな

つそりお婆さんのお部屋（おふくろ）へのぞきに行きました。もしかしたらお婆さんの仲間（なかつ）が集つてゐるかもしれない。うまく行けば魔法の言葉を覚えられ、おいしいお酒（さけ）ものめる。さう思つて、もう舌（した）なめすりしながら、のぞくのでした。けれどもいつ行つてもいつ行つても、お婆さんのお部屋（おふくろ）はからつぽでした。

ところが、ある晩（ばん）のことでした。お爺さんはたうとう五人（ごにん）のお仲間（なかつ）が集つてゐるのを見つけた。みんなはお爺さんがのぞいてゐるとは知らないで、小聲（こゑ）で話したり笑つたりしてをりました。やがてあの曲（まが）り柄（え）の杖（つゑ）にまたがつて、魔法の言葉を口にしました。一人、また一人、見る／＼五人のお婆（はあば）さんたちは、煙（けむり）のやうに空（そら）高（たか）くのぼつて行きました。

お爺さんは暫（しばらく）といふもの、口（くち）をあけたま／＼ぼかんとみんなが消（き）えて行つた方（ほう）を見つめてをりました。が、ふつと考（かんが）へついて、

「有難（ありがた）い。たうとう覺（おぼ）えたぞ！」

さう叫んで、いきなり壁にたてかけてあつた曲り柄の杖にまたがつて、今聞いたばかりの魔法の言葉の口にしました。

するとどうでせう。あがる！ あがる！ お爺さんのからだは、まるで煙のやうに空をのぼつて、どん／＼お婆さんたちの後を追つて行きました。

お婆さんたちは、見る／＼空を飛行して、王様のお城へつきました。そしてさつ／＼酒庫にはいつて行きました。その時、お婆さんたちははじめてお爺さんがついて來たのを見て、びつくりしてしまひました。けれども今となつては、どうすることもできません。いや／＼ながら、一と晩だけお仲間に入れることにしました。

そこでみんなは、あのおいしいお酒の樽をあけて、少しづつ飲みはじめたのであります。お婆さんたちは、決してたくさんのみませんでした。一番鶏が鳴かないうちにお家へ歸らなければならないので、油

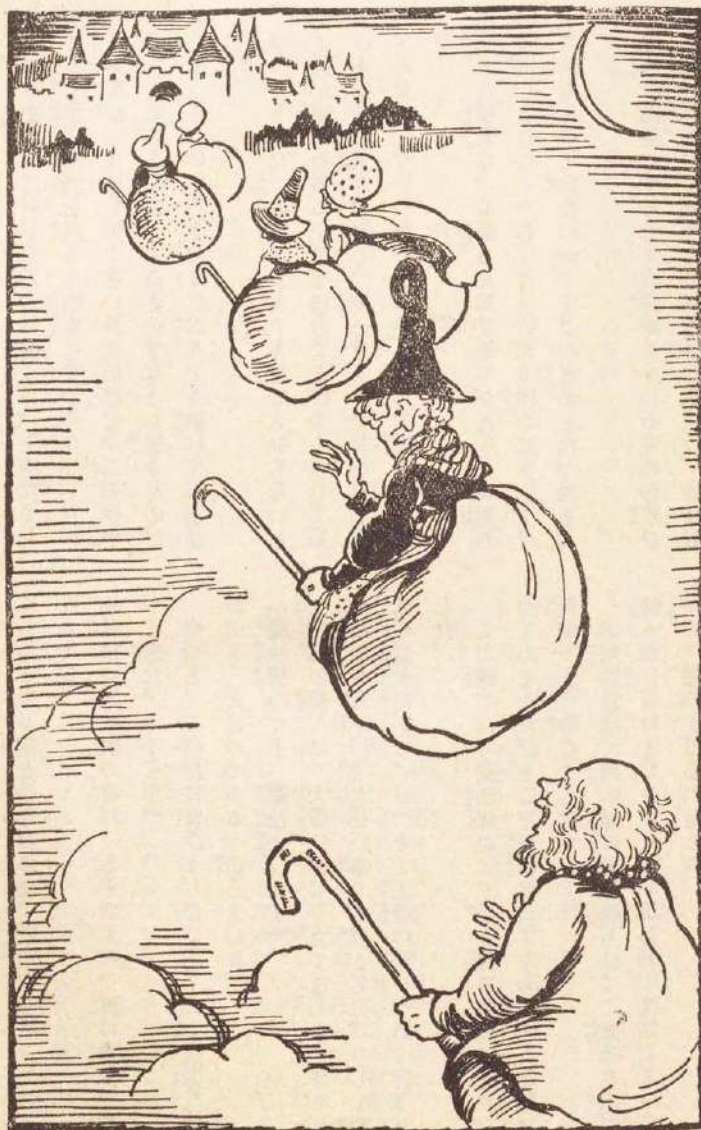
断なく氣をくばつてゐたからでした。

ところがお爺さんは、少しもそんなことは思ひませんでした。あんまりおいしいので、はじめのうちこそチビリチビリなめてゐましたが、しまひには大きな入れもので、ぐん／＼飲みはじめたのであります。ですからお婆さんたちが歸りかけた時には、お爺さんはいゝ氣持になつて、床の上にぐん／＼尿をかいて寝てをりました。

お婆さんは、お爺さんが寝てゐるのをちらつと見ましたが、何を考へたのか、起しもしないで歸つてしまひました。

お爺さんは、そのまゝぐん／＼睡りつゞけてをります。やがて夜があけて、酒庫の窓から朝の光りがさつと流れこみました。それでもお爺さんは何にも知らないで睡つてをりました。

お城では、もうみんなが目をさしました。お臺所では王様の召し上がる、おいしいご馳走をこしら



へはじめました。そして二人の番人は、王様にさし上げる上等のお酒を取りに酒庫にやつて来ました。大きな錠をはづして、重い戸をあけて、二人は中へはいって来ました。するといきなりお爺さんのからだにつまづいて、どたり、二人とも倒れてしまいました。

びつくりした二人は、よく／＼見ると知らないお爺さんが寝てゐるので、なほのことびつくりしてしまひました。大きな錠も、重い戸も、たしかにしまつてゐたのに、いつたいどこから入つて来たのでせう。

二人の番人は、お爺さんの手をつかんで、お庭へ引き出しました。そしてつゝいたり叩いたりして、どこから入つて来たのか、どこの者かとたづねました。

お爺さんも、どうして自分がこゝにゐるのか思ひ出せないで、びつくりしてしまひました。おまけ

三六
にあんまりお酒をのんだので、頭がぐら／＼してゐるのです。

「私は、遠い國の者だ。……ゆふべ、風に乗つてやつて来た。……」

やつと、これだけ言ひました。すると二人の者は、あつ！と言つてふるへ出しました。

「魔法使ひだ！魔法使ひだ！」

二人の番人は、大聲にどなり立てました。するとお城から人々が、大せい集つて来ました。そして番人の話を聞いて、さつそく王様の前につれて行きました。

この國では、魔法使ひは、焼き殺されることになつてゐました。そこで王様は、すぐお爺さんを焼き殺すやうに命じました。

お爺さんは、鐵の鎖で腰を縛られて、大きな木に縛りつけられました。そして足もとにはたくさん薪が、積み上げられました。

びきました。

お爺さんは、やつとお婆さんが魔法使ひだといふことを思ひ出したのであります。そして今鳴いた鳥の聲は、やさしいお婆さんが助けに来てとなへた、魔法の言葉だといふことがわかつたのであります。さう思ふと、お爺さんは急にうれしくなりました。

「あは、ハッ！」

と、思はず大聲に笑つて、飛びあがりました。

すると不思議ではありませんか。お爺さんを縛つてゐた太い綱も太い鐵の鎖も、パツとほどれて、お爺さんの身體はそのまま空へのぼつて行きました。

人々はもうびつくりするどころか、恐くなつてふるへながら見てをりました。

お爺さんのからだは、だん／＼高く／＼のぼつて行つて、たうとう見えなくなつてしまひました。

もちろんお爺さんは、無事にお家に歸つたのであります。そして二どと再び、お婆さんの秘密を知らうなぞとは、考へなくなりました。(をばり)

やがて一人の役人が、薪に火をつけました。

まつ赤な煙は、めら／＼と燃え上がりました。そして見る／＼うちにお爺さんのまはりを、つゝんでしまひました。

お爺さんは、もうおしまひだと思ひました。そしてなせお婆さんの言ふことをきかないで、こんな所へ来たんだらうと、後悔して涙をこぼしました。

と、そのとき、とつせん頭の上でバタ／＼といふはげしい羽音が聞えて、一羽のまつ黒な鳥が飛び下りて来ました。口には赤い小さな帽子をくはへてをります。

見物してゐた人たちは、

「おや！」と思つて見てをりました。と、不思議！

その赤い帽子はひとりで飛んで来て、お爺さんの頭へびよこんとのつかりました。同時に黒い鳥は、鋭い聲で一と聲鳴き立てました。その鳴き聲がお爺さんの耳には、それは／＼美しい氣持のいゝ聲にひ

日蝕の日

田山花袋



十一月の加茂の臨時の酉の祭には、上達部や殿上人が車でぞろ／＼とやつて來たり、舞臺が出来て綺麗に粧つた舞人達はその衣の袖を被いだり何かするので、京中の見物人がそこにも此處にも巴渦を卷いて、その賑やかさと云つたらなかつた。それに午後には勅使がやつて來て、弓や胡録を負うた隨身のあとから騎馬の侍が大勢ついてやつて來たりするので、あたりは一層賑やかになつた。夜は等が空を焦し、鼓や笛の音が葉の落ちた林の中に響いて聞かれた。その時分には、もはや京の北山には雪が白く、露も霜と變つて、社頭をめぐつて流れてゐる加茂の河水も一條の錆色納戸の布でも流したかのやうに、さびしく細く流れてゐるのを誰も眼

にした。岸には枯れた葎やら薄やらがガサコンと夕暮の風に動いてゐた。

「賑やかになつたなう……。臨時の酉の祭でも……」

「ほんになう……。夏の祭にも多く讀らぬやうになつた。」

「それはなう……。夏の祭には及ばぬが、何と云ふても賑はしうなつた。今年は勅使は内の大臣かな……」

「さやうで御座るな。もうさつきにそこにおじやつたで、もはや上加茂の方へ御出ででな御座らう？」

と、孫鳥帽子をつけた、長いこと陪從でもしたことのあるらしい老いた一人は、

「いや、まだそこにおじやる……。今、そこを出たばかりぢや。」

成ほど此方から見ると、その勅使の一行は、その下加茂の社頭で思ひもかけず暇を取つたといふやうに急いで向うに並んで通つて行くのが見えた。そのあとからは網代車や糸毛車がぞろ／＼と續いて、その向うに夕日が明るく野を照してゐるのが見えた。

鼓や笛の音が賑やかに社頭の其處此處に湧くやうにきこえた。

二

年を取つた人達が、大勢そこに集まつてゐたが、その中でもことに老いた、何うしても百歳を遙かに越したと思はれる一人の翁が、長い白鬚を撫でながら、何か言はうとして、しかし少し





四〇
躊躇してゐたその隙を奪つて、その傍にゐた、もう一人の、これもかなりに老いてゐるらしい
孫島帽子の翁が言つた。

『それにしても、おぬしは、この身などよりは餘程上で御座らうな？』

『さやうで御座るな。』

白鬚の翁は笑ひながらかう言つたが、直ぐ問ひ返した。

『おぬしは？』

『この身で御座るか。この身は百歳を十一出てをりまするが……？』

『は、それでは、この身の方がすつと先さちや。』

『さやうで御座らうな。この身も、大抵なところでは、年では、ひけを取らぬのちやが、おぬしには及びさうもない………。それにしても、おぬしはいくつにならるゝ？』

『もう年も忘れたくらゐちや。』 白鬚の翁は笑つて、(1)『寛平の御門の母后の宮の召使で御座るで、もうかなりに年を経申した……。』

『寛平の御門の母后の宮！ お、それでは古い！』

孫島帽子の翁に限らず、そこにゐる老いた人達は、皆なかう言つて驚いたやうに其方を見た。

『では、もはや百五十にも？』

『百五十に五か六つ出てゐることで御座らう。何うも、年老いて、そのけぢめはつきりせぬやうになつた。但し、かういふことは存じ居る。この臨時の祭を神が御門に乞うた時を存じて



居るが、その時七つで御座つた。』
『臨時の祭を神が御門に乞うたと申すと……？』

比較的若い、と

言つても、八十二

三の翁が問うた。

『おぬしは知らぬ

か。ある日の午後

に、寛平の御門が

まだ侍従でゐらせ

られるころ、此處

等あたりを狩りに

出てをられると、

急に日がくらうな

つて、ひよつくり





そこに一人の翁があらはれたといふ話を——」

「存じ申さぬ——」

「さうかな。存じ居らぬかな。名高い話ぢやが——？」

「あ、聞いたことはある。この加茂の臨時の祭の話？」

もう一人の九十ばかりの小づくりの翁が言つた。

「さうぢや、その話ぢや。」百五十七歳になつたといふ翁は、さも得意さうに、「その、ひょくりあらはれた翁が、この加茂の神ちやつたのぢや。そしてそれが御門に申すのには、この身はこのあたりに住む翁ぢやが、何うも冬はさむしうてならん。何うか祭なりと賜はれ！ かう申上げたぢや。ところが寛平の御門は、聰明な親王であらせられたほどに、それとすぐ推し奉つて、でも、それはこの身では叶ひ申さぬ。叶ふ人に申上げられたいと言つた。すると、翁は、いや、叶ふ方だから申上げた。もはやさうなる時も近い。……と申して、掻き消すごとく消え去つたと申すぢや。丁度その日が酉の日で御座つたので、それでこの臨時の酉の日の祭が始まつたのぢや。寛平の御門は位に即かれたそのあくる年に、この祭を始められたので……」

「あ、さういふことも満更さかぬではなかつたが——」

「それを、その日のことを、この身はちゃんと覚えてをる。」

「それはまためづらしい……」

「前にも言ふたが、この身はその時七つちやつた。丁度その頃、この身の親の住んでゐたところ



ろは、そら、皆人も古い人は知つて御座らうが、大炊の御門からは北、町尻からは西、つまり小松の帝が親王でいらせられた時の御所の塀の此方のところに住んでゐたので、あそこいらでよう遊び居つた。この時も何でもそこらで遊び居つたのぢや。さうぢやな。元慶二年ぢやと思ふが、(2) 小松の御門も





まだ帝にはならず、その子の寛中^{かんちゅう}の御門^{みかど}も式部卿^{しきぶけい}の宮^{みや}の侍従^{じじゆう}で御座^{ござ}つたで、身も輕々^{けいけい}しうよう
狩^{かり}に出^いられた。その時ちやつた。この加茂^{かもの}の神^{かみ}が翁^{おきな}になつて出^いて來^きたのは——」

「おぬしはそれを見たか？ その翁^{おきな}を？」

老人^{らうじん}達^{たち}の中に雜^{まじ}つてゐる一人^{ひとり}の若い青侍^{あおざむらい}がだしぬけに訊^きいた。

「見たわけでは御座^{ござ}らぬが、その時であつたといふことを、すぐ後^{あと}で聞^きき申^{まう}した……」

白鬚^{しろすけ}の翁^{おきな}は言^いつた。

「そんなことわかるもんか……。老人^{らうじん}の寢惚^{ねぼけ}れ言^{こと}ちや……」

そこに大勢^{おほぜい}若い人達^{ひとたち}が集^{あつ}まつて來^きて、かう言^いつて打擾^{うちじやう}した。白鬚^{しろすけ}の翁^{おきな}は、さびしさうにした
が、別にそれを主張^{しやうちやう}しやうともしなかつた。そのまゝ、老人^{らうじん}達の群^{ぐん}の中にその身を躲^{かく}して了^{しま}つた。
それは他^{ほか}ではなかつた。後に雲林院^{うりんいん}の菩提講^{ぼだいかう}で歷代^{れきだい}の帝^{みかど}や、后^{きさき}や、大臣^{おおい}の話を大勢^{おほぜい}の人達^{ひとたち}にし
てきかせた。(3)大宅^{おほやけ}の世繼^{よつぎ}の翁^{おきな}であつた。

社頭^{しゃとう}の篝火^{かき}は夜空^{よる}を照^てして、鼓^{つづみ}や笛^{ふえ}の音^{おと}が冴^さえた空氣^{くうき}に反響^{はんきやう}してきこえた。お詣^{まが}りに來^くる人
の足音^{あしおと}が陸續^{りぞく}としてあたりに満^みちた。

三

その七歳^{さい}の時^{とき}の光景^{こうけい}は、今^{いま}でもはつきりと世繼^{よつぎ}の翁^{おきな}の頭^{あたま}の中に描^かかれて殘^{のこ}つてゐた。かれは
小さい童^{わらわ}であるかを見^みた。評判^{へうはん}の頑童^{がんどう}で、母親^{はは}の言^いふこともきかずに、いつもよく河原^{かはら}やそ



の向う^{むかう}の林^{はやし}の中^{なか}などに行^いつて遊^{あそ}んでゐるかを見^みた。その日も二三人^{にさん}しか供^{とも}をつれてゐない侍^じ
従^{じゆう}のあとを追^おつて、そつちの方^{かた}へつて行^いつてゐるかを見^みた。それは晴^はれた好^{この}日^ひだつた。
侍従^{じじゆう}の殿^{だん}についてゐる供^{とも}の者^{もの}が、手^てにした鷹^{たか}を放^{はな}つと、それがすつと飛^とんで行^いつて、巧^{たく}みに鳥^{とり}
を捕^とへるのであつたが、その度^{たび}毎^{まい}に、後^{あと}の方^{かた}にゐて、童同志^{どうどうし}二三人^{にさん}でワツと聲^{こゑ}を擧^あげて囀^{さえず}して
ゐるかを見^みた。それを侍従^{じじゆう}の殿^{だん}の後^{あと}には知^しつて、此方^{こなた}を見^みて笑^{わら}つてゐるので、その身^みもそれ
に笑^{わら}ひをかへしてゐるかを見^みた。比叡^{ひゑい}の上^{うへ}には雲^{くも}が少^{すく}しかゝつてゐるが、鞍馬^{くらま}から愛宕^{あたご}は晴^は
れて、その奥^{おく}の山々^{さんざん}には、雪^{ゆき}がいぶした銀^{ぎん}のやうに光^{ひか}つてゐた。かれ等は侍従^{じじゆう}の一行^{いこう}について、
群青色^{ぐんせいしき}に真直^{まなぢ}に流^{なが}れてゐる加茂川^{かものがは}の土手^{どて}に沿^そつて、蒼^{あさ}や薄^{うす}の冬の日影^{ひかげ}にガサ／＼してゐるあた
りを通^{とお}つて向う^{むかう}の杜^つの方^{かた}まで行^いつた。侍従^{じじゆう}の殿^{だん}の一行^{いこう}の持^もつた弓^{ゆみ}や胡籥^{こよく}が動^{うご}いて行^いくのが、百
五十七歳^{ひゃくしちさい}になつたかれの眼^めにもはつきりと浮^うんで見^みえた——。

と、いつとなしに、まだ未^みの刻^{とき}を少^{すく}し過^すぎたくらんだといふのに、急^{きう}にあたりは暗^{くろ}く暗^{くろ}くな
つて、霧^{きり}でも押^おし寄^よせて來^きたやうに、あたりの山^{やま}も、杜^つも、野^のも、今^{いま}まで眼^めの前^{まへ}にはつきりと
見^みえてゐた村落^{そんらく}も、すつかりぼんやりと見えなくなつて了^{しま}つた。子供^{こども}心^{こころ}にも始^{はじ}めは不思議^{ふしぎ}に思^{おも}
つてゐたが、次第^{しだい}に何か測^{はか}られない異變^{いへん}にでも逢^あつたやうに恐^{おそ}ろしくなつて來^きて、皆^{みな}なして、
慌^{わは}て、草叢^{くさそう}の中^{なか}に入^いつて、顔^{かほ}も擧^あげずに半時^{はんとき}はども打伏^{うつふし}になつてゐたさまがそれに見^みえた。
何^{なん}でもその時^{とき}に、加茂^{かもの}の社^{やしろ}の神^{かみ}が翁^{おきな}になつてあらはれて來^きたといふのであつた。
それは後に父親^{ちちおや}からも母親^{はは}からもきいたことを世繼^{よつぎ}の翁^{おきな}はくり返^{かへ}した。



で、かれ等はそこに、その林の中の草叢の中に半時はどゐた。

不思議なことがあればあるものだ。暫くすると、一度夜になつたと思つた空が、また次第に明るくなつて、その草叢の中からかれ等が身を起した時には、申の刻に近い日の影が斜めに河原に、林に、山にさしわたつてゐるのをかれ等は眼にした。

『あやしの天気ぢや。』

『あやしの……天気……ぢや。』

誰れ言ふとなく、かうした言葉に節をつけて、しかも再び明るくなつた喜悦に満されつゝ、そこらを躍り廻つてかけ歩いたかれらのさまを翁ははつきりと眼の前に浮べた。

(をばり)

(註)

(1) 寛平の御門

宇多天皇

(2) 小松の御門

光孝天皇

(3) 大宅世繼

『大鏡』の中の主人公

神奈川 河邊すみ子



童 謠

野口雨情選

(大人篇)

籠の鳥(賞)

水戸市 はざますな子

泣いても泣いても

籠の鳥

父さんお國は遠いのね
泣いても泣いても

籠の鳥

母さんお家は遠いのね

泣いても泣いても

籠の鳥

籠の中では

逢はれないね

コンコ雪(賞)

東京市

あをやぎしろう

お宮のお庭の

コンコ雪

子鳩のめん目は

あーかいな

赤マント着た子は

かわいくな

子鳩は屋根から

見てたつけ

お宮のお庭の

コンコ雪

親牛仔牛

長野縣 麻績ひさ一

朝ふる雨は

ほそい音

まさに親仔の

牛の顔

親牛よだれは

なーながい

仔牛のよだれも

なーながい

親牛仔牛の

朝の雨

うた

この家から

うたが聞える

誰がうたつて

ゐるのだらう

花屋こ雀

岡山縣 山岡 静子

お花を切らうと

花屋がみてた

どの花切らうと

お花をみてた

可哀さうにと

すすめがみてた

切らなきやいゝにと

ひそひそみてた

赤い花

千葉縣 荒木

清

高い窓の
赤い花

遠い空を
眺めてる

遠いあの空
あのお山

あたまかしげて
ながめてる

こんび

静岡市 賤機多味男

ピンヒヨロピンヒヨロ
笛吹いて

鶯が鶯が
飴うりだ

村から村へ
飴うりに

トロトロまわつて
うつてゐた

風の子

大阪市 名方 和郎

大寒小寒

北風寒い

子供は風の子
表で遊ば

お耳は眞ッ赤
お手々は冷た

子供は風の子
仲よく遊ば

小間物屋さん

泰北市 宮尾

進

小間物屋さん
用心かえ

山々こへて
行く途中

雨に降られたら
こまるので

コーモリ一本
つえにして

小間物屋さん
用心かへ

峠道

山形縣 山口 喜市

見えた隠れた
稲穂がゆれた

あそこ峠道
雀が下りた

四八

呼んだ呼ばれた
雀の親子

峠の畔豆
茨からはしる

ごんぐり

盛岡市 高橋與惣吉

みんな行こゆこ
山に行こ

どんぐりたくさん
とつてこよ

でん／＼小山の
りすさんは

おめ／＼が早いぞ
とられんな

山道

朝 鮮 河野 砥吉

日がとつぷりと

くれました

わたしは一人

うすぐらい

山道急いで歸ります

日の暮

山口縣 松岡 城峰

こほろぎなくよ

日が暮れた

そばの花が落ちて

こほろぎ泣くよ

日が暮れた

お父様迎へに

行かんかよ

鶏屋の鶏は

皆寝たよ

野鳩さ

甲府市 五味くに三

赤い花



野鳩さ宿は
豆家の軒よ
あの子が買った

此の子も買った

野鳩さ宿で

買子を見てる

あの子にもらほ

この子にもらほ

野鳩さ宿を

貰ひに出たよ

ねずみの正月

東京市 立花

清

正月

くるから

ねずみの子

お餅をたくさん

かつてきた

正月

こないに

ねずみの子

お餅をみんな

たべちやつた

一つお星さん

東京市 本多 鐵磨

雲の飛ぶ夜の

山の上

見えてかくれて

また見える

一つお星さん

さびしいな

かたさせすそさせ

つゞれさせ

一つお星さん

一人ぼち

冬の支度は

何とせう

四九



尾なし鼠の話 (理科童話)

大戸喜一郎

五〇

このお話は鼠の生活を書いたものです。鼠が生れてからどんな生活をするものであるか、それを童話にして、皆さんに知らせるのがこのお話の目的です。その積りでお読み下さい。(記者)

『さあ、起きるんですよ。起きるんですよ。』

お母さん鼠は、あはて、飛んで来て、いきなり一郎鼠の首すぢをくはへて、揺りました。びつくりしたのと痛いので、一郎鼠は、すつかり眼がさめてしまつて、小

さな眼をパツチリあけました。もう日が暮れてゐて、暗闇の中に、お母さん鼠の眼が、心配さうに、光つてをります。

『そんなにひどくしなくつたつて、僕もうすぐ大人になるんですからね。生れてから廿日もたつてゐるんですよ。』

一郎鼠は不平さうにかう呟きま

した。

『それどころぢやないんだよ。さあ、いっしょにおいで。』

お母さん鼠は先きにたつて、どん／＼走り出しました。一郎鼠は、何のことやら一向にわかりませんでした。それが、それでもおくれまいとして、一生懸命に駆け出しまし

『ほつ！何といふ大せいなんだ。』

稲叢と稲叢との空地は、仲間の鼠でぎつしりつまつてをりました。中ほかに、大きな王さま鼠が後肢で立ち上がつて、太い髭をビクビク動かしてをります。

『お母さん。どこから、こんなに集つて来たの。』

一郎鼠はすつかり驚いてしまつて、大きな聲でたづねました。けれども、お母さん鼠は、何とも返事をしません。それどころか、すぐ側にゐた、からだの毛が所々落ちかゝつてゐる年寄り鼠は、『キツ。』と叫んで、眼をむき出してにらみつけました。それで、一郎鼠はすつかり恐くなつて、それつきり聲も立てずに小さくなつてをり

ました。

やがて王さまは、あたりが静かになると、話をはじめました。

『昨日、いや今日の夕方です。私はいつものとほり何か食べる物はないかしらと思つて、百姓のお勝手へ這ひこんで、ちよろ／＼捜し歩いてをつたのです。するといきなり人間の足音がして、子供が空つぽの篩をたゝきながら入つて来ました。子供は何やら百姓に言つてゐましたが、やがて二人つれ立つて、急ぎ足に外へ出て行きます。もちろん私は後をついて行つたのです。大せいの命をあづかつてゐる私として、人間のやることには一々注意してゐなければならぬのです。二人はまづすぐに納屋へ

行きました。そして中をのぞきこんで聲高に話してゐます。それで、私はさつそく小窓へ這ひ上がつて、中をのぞきこみますと、皆さん。私が何を見たと思ひます。』

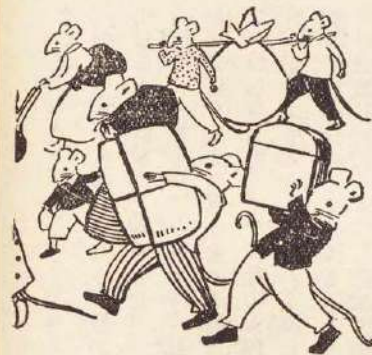
王さま鼠は、かう言つて得意さうに、髭を動かしながら一座を見まはしました。

『納屋の中は、からつぽです。それを見たと私は飛んでかへつて、いろ／＼と考へました。百姓はきつと稲叢のことを話してゐたのに違ひありません。さうです。私らが明日までここにぐづ／＼してゐたら、それこそ大へんです。大せいの命をなくすことができるのです。百姓は、明日はさつそくこの稲叢を取りこはすにきまつてゐる

のです。それで、今からすぐ引つ越しするのです。それに、もう間もなく寒くなります。町へ行くのです。あたゝかい家の中へ。食べ物、心配のないお勝手の近くへ。」王さまはかう言つて、さつそく出發の用意をするやうに言ひました。

一座は、急にさば／＼しはじめました。お母さんたちは、子供を迎へに走つて行きました。お腹のすいてゐるものは、手あたり次第に食べ物をかちり出しました。

かうして稻叢の間は暫くといふもの、上へ下への大騒ぎをしてをりましたが、やがて皆は、稻叢の後ろの田圃へ集りはじめました。一郎鼠もお母さん鼠といつしよ



に、皆の中へ入つて行きました。お、何といふ大せいの仲間でせう。一郎鼠は稻叢の間で見たより、よつぽど大せいの見たのです。自分よりもつと小さな鼠もをりました。それがめい／＼勝手なことを喋つてゐるのです。けれども、まもなく、その話し聲もびつたり止んでしまひました。王さまがお

いになつたのです。

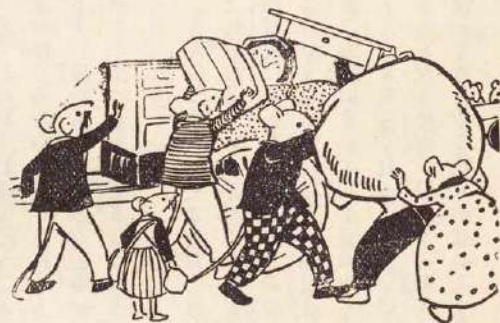
王さまは、ごちや／＼にならんでゐる仲間を見て、何やら側にゐる偉さうな、大きな鼠に話してゐましたが、やがて、皆を十列にきちんと並べました。それから、行列をい／＼見て歩きました。一匹でも仲間のものが、残つてゐるといけないからでした。それが終ると、い／＼出發です。王さまは、一と聲するどく、

『進め！』と號令をかけたので

いく百とも知れない鼠の大軍は、静かに、静かに行軍をはじめました。子鼠でさへ、いつしよに歩いて行ける位の早さでした。前へ、前へ、十列の鼠の大軍は

進んで行きました。いく時間も、いく時間も歩いて行きました。しかも鼠の大軍は少しも列を亂さず歩いて行つたのです。高い塀につきあたれば、ちやうど平地を歩くと同じやうによちのぼつて、飛び下りました。廣い川にあへば、少しも驚かずに泳いでわたりました。丘でも山でも林でも、大きな川でも、鼠の大軍にとつては、少しのさまたげにもならなかつたのです。

さうして、たうとう夜があけて、朝の美しい光りが輝き出しました。眼の前には、廣い廣い田圃がひらけてをります。鼠の大軍は、王さまを先頭に立て、少しも休むことなしに行軍をつづけてをり



ました。日はだん／＼と高くなつて行きます。

と、とつせん先頭の方で、『あつ！』といふ恐ろしい人間の叫び聲がおこりました。續いてバ

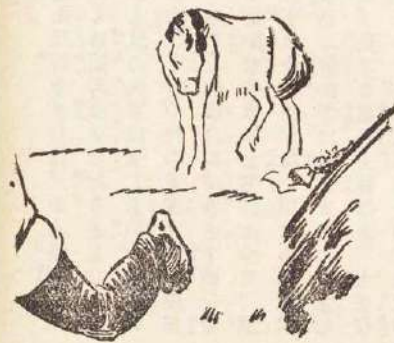
タ／＼といふ足音が響きました。一郎鼠は驚いてその方を眺めると、二人の百姓がびつくりして一目散に逃げ出して居るのでした。あとには一匹の馬が、畑のまん中に置き去りにしてあります。一郎鼠はそれを見ると、をかしくなつて、キキ、と笑ひました。いつもお母さん鼠がいつてゐる、『人間を見たらすぐ逃げる！』といふ言葉が、こゝではまるつきり反對なのです。

『人間で弱いんだね。』

一郎鼠は得意になつて、お母さんに言ひました。するとお母さんは、

『いゝや、猫と同じやうに、するんだよ。こんなに大せいのゐるの

を見たので、遠くへ行つただけです。」
けれどもそのとき、前に歩いてゐた年寄り鼠がとつせん立ち止つたので、一郎鼠はいやつといふほど、つきあたつてしまひました。と同時に後から来た鼠が、一郎鼠のお臀へ、ごちんと頭をぶつつけ



ました。
一ばん前に歩いてゐる王さま鼠が、百姓の置きざりにしたお辨當の入つてゐるお重を見つけて出したのでした。そして大せいが立ち止つて、われ勝ちに手をつゝこんで食へはじめたのです。それとも知らずに後から歩いて来る連中が、次々にぶつかつて重り合つたのでした。

さん／＼食べた王さまたちは、また進みはじめました。けれども道ばたにおいしさうなお魚の臭ひだけがするお重を見た一郎鼠は、急にお腹がすいて何かたべたくて／＼たまらなくなりました。けれどもあたりは廣い田圃で、何一つ食へられるやうなものはありません。

ん。さうなるとなほのことお腹がすいて来たのです。そして昨晩から休みなしに歩いて来た疲れも急に出て来たのでした。

「お母さん。まだなの。」

一郎鼠は不平さうに言ひました。

「あゝまだだよ。王さまが止れといふまではね。」

仕方ありません。一郎鼠は、お腹がグーグー鳴るのをがまんして、疲れたのをがまんして、歩きつづけました。

けれどもやがて皆は森の中へ入りはじめました。すると皆はちよろ／＼と列をぬけ出して、木の根もとへ駆けて行きました。それを見るところお母さん鼠も駆けて行きました。



と流れ出すではありませんか。食べてゐるうちに、からだぢうがスーツとして来て、疲れも消えてしまふのです。それにお腹も、いゝかげんいつばいになつたのです。それで、こんどは大元氣になつて、一郎鼠はどん／＼駆け出して行きました。

それから長い／＼道のりを歩きました。そしてやうやく旅が終つたとき、一郎鼠はどんなに嬉しかつたかれません。

新しいお家は、町はずれの大きなお家の庫の天井でした。壁をつたつて下へおると、四角な鐵をはめた空気があつて、そこから自由に入りが出来るのでした。しかも二間と歩かない所にお勝手

があるのです。

一郎鼠は、旅の疲れなどは忘れて、新しい住家の氣持のいゝのに、またあたたかいのに、すつかりうれしくなつて、飛んではねて歩きまわりました。そして始めのうちこそお母さん鼠が寢床をつくるのを手傳つてをりましたが、やがて、するりと家を抜け出して、ちよろ／＼とお勝手の方へ歩いて行きました。

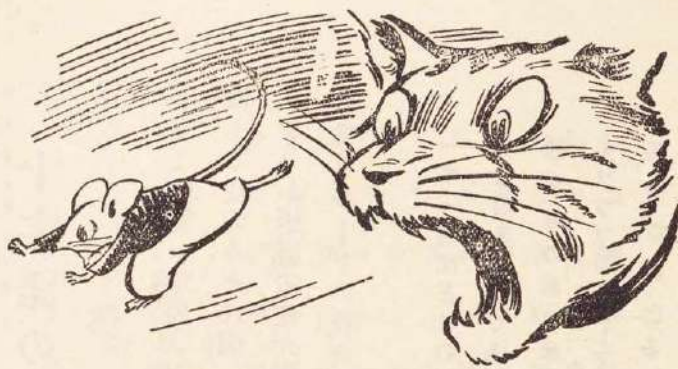
大きな土管をくゞつて、廣い廣いお勝手へ入つたとき、一郎鼠は大へん驚いてしまひました。土間の片隅には、大きなかまどが四つも五つもならんでをりました。そして板のしいてある床には、大きな棚がず／＼とつゝあつて、そ

した。一郎鼠も駆けて行きました。みんなは木の皮をかちつてゐるのです。一郎鼠も真似をして、ガリ／＼かちつて見ました。ところが、何ておいしいのでせう。口の中へ入れると、おいしい汁がタラ／＼

の上にいる／＼なものがならんでをりました。一郎鼠はしばらくつと耳をすまして、眼をくり／＼させて、あたりを見まはしてをりました。誰一人ゐないのを見まはめると、得意さうに短い髭を動かして、床の上に飛び上がりました。どこからともなく、おいしさうなお魚の匂が、ふんとにはつて來した。一郎鼠は匂ひのする方へ、こそこそと這ひ上がつて行きました。

ろ／＼と繩をつたはつて、蛙の方へ下りて行きました。一郎鼠はむちうで食べてゐました。少しからいと思ひましたが、昨晚からろくに食べなかつたので、すから、何にも忘れてしまつて、だん／＼下へ、下へとかじりながら下りて行きました。けれども、そのとき、一郎鼠は恐ろしい鳴き聲を耳にしたのでした。たゞ一聲聞いただけで、からだぢうがぞつとしてしまひました。と、その時、しつかりつかんでゐた手が思はずぶるつ！とふるへたかと思ふと、からだは宙をすべつて、下へ下へ、落ちて行きました。どたり！

と光るのを見ました。「駄目だ！」さう心に叫びました。けれども肢は落ちるといつしよに急に動き出して、一郎鼠はむちうになつて、走り出したのです。猫の唸り聲が聞えて來ました。あた／＼かい息が感じられました。けれども、おゝ、穴があつたのです。土管の穴があつたのです。一郎鼠はいきなり、びよん！とその中へ飛びこんで、むがむちうに穴をぬけて、新しい家へ飛んがかへりました。一郎鼠はお母さんがつくつてくれた新しい寢床にもぐりこんだとき、はじめはつとしました。ところがそのとき、急にしつぽが痛み出したのです。一郎鼠が見ると、



大事な尻尾が、中ほどからなくなつてゐるではありませんか。きつと、土管に飛びこんだとき、猫に食ひさられたのちがひありません。

一郎鼠は急に悲しくなつて、チュチュと聲を立て、鳴き出しました。

可哀さうな一郎鼠！その日からといふもの、一郎鼠は片輪者になつてしまつたのです。そしてどこへ行つても若い鼠たちに、『尾なし鼠、尾なし鼠』といはれて馬鹿にされるやうになつたのです。けれどもこのために、一郎鼠はかへつて、仕合になることができたのでした。

王さま鼠は、尾なし鼠の話をき

いて、大へん氣の毒に思つたのです。

そこである日のこと一郎鼠に合ふと、やさしく言葉をかけてくれました。そして晩になつたら、いつしよに探險に連れて行つてやうと約束なさいました。

これを聞いて、一郎鼠はどんなに喜んだかしれません。

王さま鼠といつしよに探險に行けるのは、よつほど年とつてからでなくては、それも非常に偉くならなければ、できないことなのです。

一郎鼠は大威張りで皆に吹聴して歩きました。そして、晩になるのを今か今かと待つてをりました。

十字語の夜

達 崎

龍

おもては寒い水のよな
震ふる夜のみぞれ雨
ひこりお炬燵の夜が更ける
クロス・ワードの夜が更ける

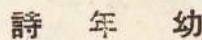
一千一夜はこの國
兎は餅をどこで搗く
龍宮城のお土産は
イソツブ狐は何してた
孫悟空の出る話



人形は好きな物を探す鳥
おナリの好きの月の夜に
したカスのミチルは月
を忘れたクロミチルは月
青い目を忘れたクロミチル
歌を忘れたクロミチル

おもては寒い水のよな
震ふる夜のみぞれ雨
ひこりお炬燵の夜が更ける
クロス・ワードの夜が更ける





若山牧水選

ば
ら
(賞)

熊本縣
荒尾校

海達
公子

ばらの花

小さい浮草の浮いた

池に

ちつてゐる

評、目のさめるやうなあざやかさ。
(牧水)

ぼたんの花はな（賞）

山形縣樺
澤校尋三
山川 房子

ぼたんの花の

にほひがきれいだな

私はこのにほひが

一番すきだな

評、落ちついたそして新鮮な大へんい、
詩です。(牧水)

氷
(賞)

河野正三郎

寒^{さむ}
い
朝^{あさ}

ちようづ 鉢はちの水みづが

こほつてた

はじめてみつけた

うすごほり

これから毎朝

夜の出来事
(推薦)

島田新一

ねずみと時計

町はねむつてゐました。

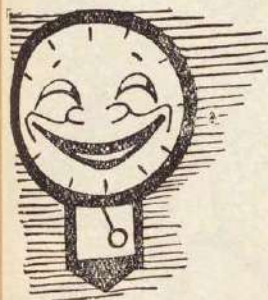
おほ
こうは
大きな工場も、
ちひ
まづ
少さく貧しい
かな
ゆめ
バラツクも、
ねむ

つてゐました。楽しい夢や、悲しい夢を見ながら、

人々は深いねむりにおちてゐました。

その眞夜中に、家の中では、ね
すみか一生懸命に働いてゐまし
た。

一匹のねずみが、先刻から戸棚の
前を行つたり來たり、きよろきよ
ろあたりを見廻したりしてゐる。



六〇

す。

それを見てゐるのは、寝る間も寝ずに、小さいけれど力のこもつた音で、カチカチ、カチカチと時を刻んでゐる時計でした。

ねずみは、鼻をビク／＼動かしながら、何度となく戸棚の前を通りま
した。

戸棚とだなの中なかからは、おいしそうな匂におひがぶんぐと匂におつて來るのです。
ねずみはもう一匹ひきの仲間なかまを呼よんで來て云いひました。

『うまそうな匂ひが、ぶんぐと鼻をついてたまらない。なんとかうま
い工風くふうはあるまいかしら——』

『ふん、まづたくいゝ匂ひだ。併し、何んとかいゝ工風と言つたつて別にこれと言ふやうなまい考へもないし——』

二匹は今、一生懸命に考へはじめたのです。

先刻から、この様子をだまつて見てゐたのは、柱の時計です。その時急に大聲をあげて笑つたのです。

「アツハツハツハアー」

ねずみは驚いたの驚かないのつて、一匹づつしか逃げられない穴へ、二匹が一緒に逃げこんでしまつたのです。

「君、君。そんなに驚かなくてもいふよ。僕だよ。柱にかゝつてゐる時

こはるだらう

評、句持の詩です。短歌のやうなものばかりか、いゝのではありません。子供にはこんなのも欲しい。(牧水)

さんなん

東京本郷九町

中坂石次郎

長い竿で

ぎんなんの實を

つゝいたら

しづくと一緒に

落ちて来た

評、その竿の冷たさが讀む人の心にしみるやうです。(牧水)

池の虫

山形縣樺澤町二

岡崎憲太郎

池の虫が

をとつてゐます

池の水があをい

評、幼いけれど實に鋭い。(牧水)

もず

埼玉縣南谷校高一

高野 政一

もすが

向ふの森は

まだ遠いと

ないて行く

評、これも大へん面白い。(牧水)

今日の空

山形縣樺澤校尋五

石澤 ヒデ

今日の空はくらしい空

いねかつてゐる人が

空を見てゐるよ

評、いゝ寫生です。生きてゐます。(牧水)

朝

山形縣樺澤校尋二

遠藤松次郎

山が見えないよ

計だよ。」さう言ふ聲をきいて、二匹はほつと安心しました。

「あゝ驚いた。誰れかと思つたら、君だつたのかい。吃驚さすなあ。」

「僕はまた、女中さんでも起きて来たのかと思つたよ。あゝよかつた。」

二匹のねずみは、やつと安心しました。

「あゝさうかい。そりや僕がわるかつたね。ごめんよ。しかし君たちは、利巧さうでもやつぱり馬鹿なんだねえ。あの戸棚が開かないなんて。」

と時計はさも偉さうな顔をするのでした。

二匹のねずみは顔を見合せて、眼で何か知らせ合つてゐましたが、そのうち一匹が、

「ねえ、お利巧な時計さん。僕たちには、どうしても開かないんだけど、開け方を知つてゐたら教えて呉れませんか。——さつと御禮はしますから。」と、たのみました。

時計はニコ／＼と笑つて、

「さうかい。それぢや教えてあげやう。——人間なんか、たつた一本の指で開けちまんうんだせ。君たち二人で力を合せれば、わけもなく開くよ。」と、教へました。

「ありがたう。御禮は澤山するよ。」と言つて、二匹が力を合せると、譯もなく開いたのです。

中へ入つて見ると、思つたよりも澤山なごちさうが入つてゐます。肉

の煮たの、焼いたお魚、おいもの煮つころばし、どれもこれも甘いものばかりです。

思ふ存分、腹一杯たべた二匹は、お土産までぶらさげて、のこ／＼と穴の中へ入らうとしました。

先刻から、お禮に来るのは今か／＼と待つてゐた氣の長い時計も、と

う／＼こらへきれなくなつて、

「おい／＼。ねずみ君。僕にお禮を忘れたのかい。」と催促しました。併

し、二匹のねずみは、すましこんで、穴へ入つてしまはうとするので、

「教へた駄賃に、その小さいのを一つでい／＼から呉れたまへ。僕は生れ

てから、まだ一度もそんなものを食べたことないんだから。たつた一つ

でい／＼から。——」と泣きさうな顔をして頼みましたが、ねずみは、

「時計君。君に御禮なんかやるもんかい。それは、君たちの食べる物ぢ

やかないんだよ。さよなら。」と、さつさと穴の中へ入つてしまひました。

「ねえ君、時計なんて利巧さうでも、案外、のろまなんだね。」など、

話しながら、二匹のねずみは家に歸りました。

その翌日の夜も、ねずみは二匹、戸棚の前に来て、一生懸命に戸を開

けようとしたが、いくら力を入れても開きません。

山に朝日がさした

野、整つてゐないけれど、感じはよく出てゐる。(牧水)

朝やけ

福岡縣下
妻校尋四

塚本 久雄

あかいくもが
くらうなつた

朝やけが
しまへた

雨あがり

秋田縣
荒川村

岩谷 ヒデ

水のたまつた
ところに

油が流れて
地圖のやうになつてゐる

汽車

福岡縣下
庄校尋四

下永シヅ子

汽車がとまつた
向ふの村が
見えなくなつた

天気

福岡縣下
妻校尋四

下川 勝敏

山のかげが
山にうつてゐる
お天氣の日

すゝき

山形縣横
澤尋三

龜岡 忠治

すゝきに
犬がかくれてる
その犬を

時計はそれを見て、ニヤリ／＼と笑ひをもらしてゐました。
女中さんが鍵をかけて行つたの知らない二匹のねずみは、夜の明る
まで、力一ぱい戸を開けて見ましたが、とう／＼開きませんでした。

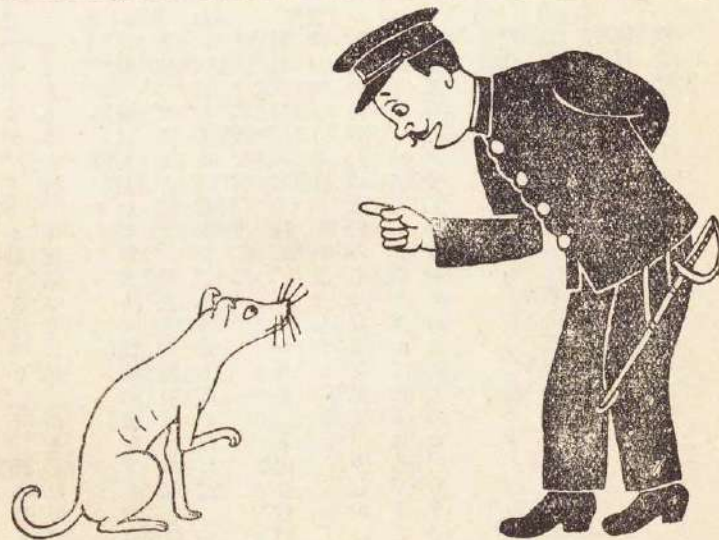
野良犬と或る泥棒

すつかり戸を閉めて眠つた町も、電氣と月の光りに照らされて、かな
り明るかつたのです。それに十五夜に近い夜でしたから――。
一匹の野良犬が、ヒヨロ／＼しながら町の通りを歩いてゐました。今
朝から何に一つ食べない野良犬のお腹は、ベコ／＼に空いてゐました。
人間はみんな眠つてしまつたのに、赤い電燈の灯つた交番の前に、サ
アベルをさげた蒼い顔のおまわりさんが一人、ねむそうに眼をしばだた
きながら、おきてゐました。

野良犬はいつかの事を思ひ出しました。――

迷ひ子になつた可愛らしい男の子に、口髭を生やした、恐い顔のおま
わりさんが、いろ／＼と親切な言葉をかけてやつたり、甘そうなお菓子
をポケットに入れてやつたりしてゐました。

野良犬は、その時の事を思ひ出したのです。



おまわりさん
は、かわいさう
な者を助けてく
れるのに相違な
い。――と野良
犬は思ひまし
た。
野良犬は交番
の前へ来て、丁
寧におちぎを一
つして、
「私は今朝から
何んにも食べら
れないので、お
腹がベコ／＼に
すいてしまつ
て、もう少しも
歩くことが出来

ばかりにしてやらうね
しづをさんと二人で
してやらう

飛行機

山梨縣
増富村

大柴百合子

村の真上を飛行機が
はじめてとほつた
大きな音をたてとほつた

山

京城若
草町

河野 浩

山に雲のかげが
うつつて

どんどん通りすぎた

水ふり

福岡縣下
妻校尋四

吉田 静香

にいさんが

ないのですが、どうか助けて下さい。」と、頼みました。
おまわりさんは、不思議さうに見てゐましたが、急に怒つたやうな顔
をして、

『馬鹿。俺は人間を助けたり、泥棒の番をするために、かうして夜夜中
でも立つてゐるんだぞ。野良犬を助けてやれなんて言附からないぞ。そ
れに犬にやるものなんか、ちつともないんだ。』

と大きな聲で言ひました。

野良犬は、『なるほど、さうかなあ。』と思ひながら、仕方なさうに、
又ビヨロ／＼と歩いて行きました。

おまわりさんはそのみじめな姿を見て、少しかわいそうに思つて、
『おい／＼、そんなにお腹がすいてゐるなら、その横丁の芥箱の中
も探してみる。少しは食べられる物もあるだらう。』と教へてくれまし
た。

野良犬は、親切なおまわりさんだなあーと心の中で思ひながら、教え
られた芥箱へ首を突込んで探して見ると、甘い物がありました。空いて
ゐたお腹も、やつとふくれて來ました。野良犬はよろこびました。

駆けて見ました。駆けられました。

吠えて見ました。大きな聲で吠えられました。

かどに水を
ふつてゐる

ふつてしまつてから

弟に

ふりかけてゐる

べんごう箱

福岡縣下
妻校尋四

高野 榮

新しい

べんとう箱

ごはんが

おいしい

先生

千葉縣平
岡校高二

杉原千可子

曲りかどで振りかへつたら

先生と友ががけの下に見えた

私達は手を上げてあいさつした

野良犬はもう今夜から、食べる物には不自由をしくなりました。
それからいく日かすぎた、ある夜のことでした。

横丁の芥箱で食べ物を探してゐると、ガサガサツと、おかしな音がし
ます。ふりかへつて見ると、手拭で頬かむりをした男が、家の戸をそつ
と開けようとしてゐるのです。

『泥棒だー。』

野良犬は夢中になつて吠えました。

おまわりさんは、あわてゝ駆けて來ました。

泥棒は直ぐに捕はれてしまひました。

おまわりさんは、警察からほうびを貰ひました。野良犬は、おまわり
さんに、肉のほうびを貰ひました。

捕まつた泥棒は、仕事をしたくも仕事がなく、家の子供や親たちを養
ふために、始めて泥棒になつたのでした。

野良犬はその肉を食べようとした時に、あはれな泥棒の家の人たちを
思ふと、食べる氣にはなれませんでした。強い肉の匂ひに、それらの
ことを忘れて食べました。

(をばり)

（児童劇）

母親のうそ

小寺融吉



六八

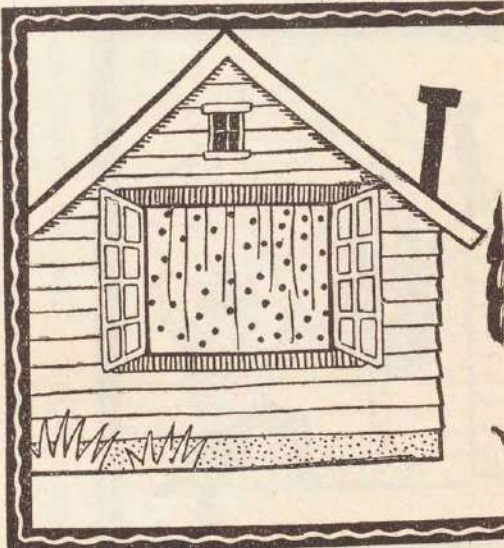
これはイソップの童話の、『狼と人間の母子』を、芝居に直したものです。外國のつもりで洋服をきても、また日本服でやつてもできます。母親は尋常五十六年の女の人、隣りの人と狼は、尋常三四年の男の子でやつ



狼
『一足だぞ歩けい、あゝくたびれ』

てみて下さい。狼はお面をかぶり、赤ん坊は人形で、キウウ／＼鳴るのを使ひます。子守唄は本文どほりではなくつても、どんなのもいゝのですが、洋服をきても、つまり外國の事にしてやる時は、『デンデン太鼓に鐘の笛』なんて云ふとヘンです。此の唄うたふ時は、鹿でピアノか、オルガンなひいてもらひます。舞臺は往來の心で、大きな窓のあるお

うちが一軒、上手か下手（見物から見ても右左）のどつちかに、半分見えてゐます。どつちにおいてもいゝのです。こゝでは下手におきますが、みなさんが、減じなれたら、次ぎには上手において、やり方をかへて、工夫してごらん下さい。むろん、おうちといつたつて、ほんのかりの道具です。



ご馳走が落ちてないかしら。もう一足だつて歩けない。あゝくたびれた。（トがつかり下に寝ころぶ）ウーン、ウーン。（あたり見まはし）兎でもヒヨツコリやつてこないかなア。こんなに腹がへつたのは始めてだ。（力なく起より）きのうから水ばかり呑んでる（ト胸をさする）

（ト、舞臺の裏で、隣りの人が大きな聲で、『ちや行つてくるよ。』といふのが聞える）

狼。（びつくりして）ア、だれかやつてくる。見つかつたらたいへんだ。

（狼はヒヨロ／＼家のうしろに隠れてしまふ。ト下手から隣りの人が出てくる）

隣人。（ヒヨロ／＼下を見まはし）ヘンな足あとがついてる

六九

さて幕があきます。
（上手から狼がヒヨロ／＼出てくる）
あゝあゝ、腹はへつたし、元氣はなし、もうこれ以上、歩く氣にもなれない。どこか、そこらに、

なあ。熊かしら、狼かしら。いや、たしかに狼だ。こんな所へのそのそ出でくるなんて、ウツカリ子供なんぞ、一人で外に出されないぞ。(ト思ひだし) 子供といへば、おとなりのフウちゃんやうな好い子は世界にまたとないだらう。私は大好きだ。一日でも顔を見ないではゐられない。(窓に近づき) フウちゃん、フウちゃん、ねてゐるの？

母親。 (窓から赤ん坊のフウちゃん、(赤ん坊は人形でよし) 抱いた母親の顔が出る) アラ。隣人。これから町に買物にゆくのす。一寸フウちゃんの顔が見たくてね。母親。 まア、(子供に)



そら、フウちゃん。おとなりのおちちやんが、いらしてよ。(ト抱きあげて見せる) 隣人。(喜んで) ヨウ、フウちゃん。にこ／＼笑つてゐるね。町へ行つたら、何かお土産を買つてくるよ。なにがいくだらう。太鼓がいゝかしら、鐵砲がいゝかしら、それともお菓子……？ 母親。 いゝわねえ。フウちゃん。おちちやんに可愛がつて頂いて。

隣人。 それともお人形……あはは(笑つて) なにを云つても、にこ／＼笑つてゐる。(母親に) ですが何か御用がありませんか。お買物なら、序でにします。母親。 ご親切にありがたうございます。またいつか、お願ひいたしませう。今日はなんに

も、べつに……

隣人。 さうですか。この遠慮には及びませんよ。それに風が寒いから、なるべく外にお出にならない方がよござんすよ。あ、一寸ごらん下さい。往來に狼の足あとがついてゐるんです。これがさうです。これが、それ、これも、犬とはちがひませう。(トそこらを指さして見せる)



母親。 ほんとですわ。隣人。 ちや行つてまゐります。フウちゃん、さよなら。母親。(子供におちちやんがさよならつて。(トおじぎさせる) 行つていらつしやい。隣人。 おき歸つてきますよ。お土産を持つてね。(隣りの人は上手に入つてしまふ) 母親。(子供をあやして) いやねえ、狼がくるなんて。こはいのよ、狼は。牙をむいて、ウオーツとなつて、フウちゃんなんか一口にたべてしまふわ。おゝこは、おゝこは。 (母親は子供を抱いたまゝ、奥へ入るので、窓から見えなくなる。すると家のうしろから狼がヒョロ／＼出てくる。)

母親。 まアこはいことですね。隣人。 うつかり外に出られませんよ。窓や戸をちやんとしめておきなさい。かあい、フウちゃんをベロリたべられたら、それこそ取り返しつきませんよ。

狼。 ごはんの残りでもすてゝないかしら。あゝ腹がペコペコのペコペコだ。がつかりしてしまつ

た。弱つたなあ。（子供が家のなかで泣く聲が聞える）な
アんだ。赤ん坊が泣いてるのかい。やかましく泣
くんだなあ。

（母親が泣く子をあやして窓の所に出てくる）

母親。 おうおうおう。なぜ泣くの？ 今お乳も
あげたばかりぢやないの！ もうすぐごはんだから、
おとなしくして待つてゐるのよ。ね。（ト云ひ聞
かせてもまだ泣く）泣い

隣の人

「あ一寸ごらんかい
往來に狼の足あとが
ついてゐるんです」



りや嫌よ。そんなにしつこく泣くのなら、もう
フウちゃんと遊んであげなくてよ。いっえ。それ
よりも此の窓から外に投げて、狼にたべさせて
しまふわよ。

狼。 （これを聞いて、びつくりして喜び） おや……。

母親。 おだまり。だまらなけりや、ほんとに窓から
すてるわよ。狼にたべさせるわよ。

（母親はかう云つて、また奥に入る。
狼の喜びやうといつたらない。
急に元氣がついて）

狼。 しめたものだなあ。なんて旨
い話だらう。おれがこゝに、か
うしてゐると、窓からボンとす
てゝくれるんだ。赤ん坊の人間
一人が天からふつてくるんだ。
（嬉しさのあまり、そこをたとび歩きな
がら）だからさつきから、なんと

なく、どこかそこら
に、ご馳走が落ちて
るやうな氣がしてな
らなかつたんだ。ま
アなんておれは仕合
せなんだらう。（子
供の泣く聲がまた聞える）

泣いてる、泣いてる。
しめた、しめた。ウ
ーイ、もうよだれが
でた。人間の赤ん坊か。さぞ旨いだらうなア。



（母親が窓ぎはで、おひるごはんをそろへはじめ。お皿
の音、ガチャ／＼、狼、窓の下に隠んでしやがむ）

母親。 （そは子供に）さ、これからごはんごしらへを
するから、じつとしてるのよ。おとなしくね。ち
きにお芋が煮えるわ。（ト云ひながらエプロンをかける、
或はタスキがけになる）

狼。 （窓の下で腹をさすつて）たまらな
いなア、旨さうなお芋のにはひ
が。チエツ、まアいゝや。もうちき赤ん坊が食へ
るんだ。人間はうをつかないさうだから大丈夫
だ。

母親。 もう一つ上げませうか。お口をあいて……い
い子、いゝ子。さ、今度はお魚。川で取りたての
新しいお魚よ。まア丁度よく焼けました。
狼。 フーン、お魚をたべるんだな。チエツ。

母親。ア、それは呑んではだめ。水よ、つめたくて
毒よ、これは捨てませう。

(母親は手をさしのべて、窓からコップの水をすてる。狼
の頭にかゝるので、狼はふるへ上り、ハックシヨとい
ふ。但しほんとの水ではない。たゞそのつもりだけ)

母親。さ、お口をあいて、アラ、もつとお行儀をよ
くして……。

狼。いゝにほひだなア
(トよだれをふき) いつ
赤んぼをくれるんだ
らう。さつきから待
つてるんだ。

母親。たくさんご馳走
を頂いて、そして大
きくなつて、利口に
なつて、このお國で
一ばんえらい人にな



るのよ。かあいゝゝフウちゃん。アラおなかゞ
一ぱいになつたので、ねむくなつたの？ 子供は
正直ね、ぢやおやすみ。
(ト抱いて子守唄をうたふ)

あの山こえて
はるばると

笛を吹いたり
歌つたり
めくらの
子供は
ゆきました。
その子の笛を
聞くときは
牛も羊も
ほろほろと
思はず涙に

泣きくれた。

狼。(歌につりこまれて、
自分も寝かゝつたが、とび
起き、少しはなれて窓を窺
ひ、また正面を向いて首を
かして考へ、さて) い



かにやりませう。狼なんかゞ
やつてきたら、おとなりのお
ぢちゃんにお願ひして、ウン
と叩きだしてやりませうね
え。
(母親はかう云つて奥に入る。狼
は面くらつて立上り、怒つて)

つたい、いつおれに
くれるんだらう。い
つ窓からするんだ
らう。忘れたのかしら。そつちはご馳走をたべ
て、おなかゞ一ぱいかもしれないが、こつちはさ
つきから(ト腹をさすり) 腹がへつて、ヒヨロヒヨロ
だ。

(ト云ひ窓の下に横になる)

母親。
(子供の睡顔を見つと見て) もうねんねしてしまつ
た。かあいゝものねえ、子供は。だれが狼なん

たら、叩きだす、バカにしてゐる。ナアンダイ。
ウンつきだなあ。さんさん待たせておいて……人
間ぐらゐウンつきはないや。あゝ腹がへつた。

(狼はヒヨロ／＼上手にゆきかゝる)

(幕)



鬼は内福は外

西川 喜平

「福は内く。」
「鬼は外く。」

節分の夜、町には豆まきの聲も陽気に賑ひました。こゝは江戸のある町の裏長屋で、兵六と呼ぶ獨り者が、うす暗い行燈の灯の下で、膳の上へ徳利と猪口を置いてチビリ、くくと、酒を飲んでゐましたが、

大分酔が廻つたと見えて、ブツ／＼小言を云ひはじめました。

「今夜は年越しだと云ふので慾張つた奴が豆まきをしてゐるな。ナニ福は内、鬼は外だ。皆んな慾に目のない奴等だ。フンあの聲は表の質屋の禿頭だな。あんなインゴウな奴はありやあしない。アハ、ハ、ハ、今度は角の米屋の番頭か。聲からしてシミツタレな奴だ。オヤ裏でも、隣でもはじめたな。ヨシ／＼巴も負けずに怒鳴つてやれ。ダガ待てよ。福は内、鬼は外つてのは極り文句で面白くないな。いつそ鬼は内、福は外つてのはどうだい。どうせ己の家なんぞへ福の神が舞ひ込むもんか。鬼でも何んでも景氣よく飛び込んでくれ。」と、一段聲を張り上げて、

「鬼は内く、福は外く。」と怒鳴りました。すると入口の戸が、ガタ／＼と開いて、飛び込んだ者があるのを、兵六は一目見て、アツト驚いて、後へ引つくり返りました。

それは見るも恐ろしい、繪に書いた通りの赤鬼で、ツカ／＼と膳の前へ胡座をかきました。

赤鬼は「ア、駆け廻つて息が切れた。」と云ひながら、徳利の口から、酒をガブ／＼と一息に飲み干しました。

兵六は、恐ろしく鬼の容子を見ると、食ひつきさうにもないので、安心して、

「貴君はどちらからおいでよ。」と訊きますと、赤鬼は膳の上の肴をムシャ／＼食べながら、

「日暮れから方々で追ひ拂はれて、今表の通りへ來ると、路次の奥で、鬼は内／＼と呼び込まれたので、入つて來たのだ。家は汚いが我慢をする。當分厄介になるから頼むせ。」

兵六は泣き出しさうな顔で、

「當分厄介とは情ない。」

鬼は目を丸くして、

「ナニなさない。」

兵「イエ酒がないと云つたので、チヨイと取つて來ます。」

鬼「ついでに、肴を見つろつてくれ。」

兵「こゝいらには、いゝ物はありません、おにしめぐらゐなもので。」

鬼「イヤに當てつけるな。はやくいつて來い。」

兵六は、鬼の言葉を聞き流して、外へ出ましたが、

「ア、飛んだ奴がやつて來た。今更豆を打ちつけたつても追ひ出せまい。かへつて怒られては大變だ。どうしたもんだらうな……ム、いゝことを思ひつ

いた。當分留守番をさせてやれ。借金取りが來ても、鬼がゐれば逃げ出さだらう。大じにしてをいたら、

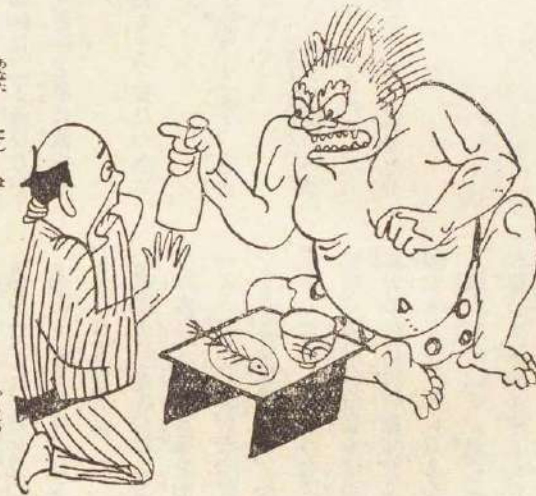
何かもうけの種になるかも知れない。そうなれば鬼も福の神だ。」と、急にニコ／＼顔になつて、酒と肴を買つて歸つて來ました。

欠伸をしてゐた鬼は、

「オイ／＼大分おそいな。腹が空いて來たせ。」

兵「お待ち遠さまで、後で飯を炊きますが、まあ酒をはじめませう。」と、鬼と兵六は、その晩夜通し飲み明かしました。

それから、毎日、鬼の機嫌を取つて、御馳走をしてゐましたが、元々貧乏な兵六は、家財道具をポツポツ賣つて、酒を買ふやうな事になつたので、ある日鬼に相談を仕掛ました。「時に貴方がおいでになつてから、大分の日数になりましたが、毎日稼がすお相手をして飲んでばかりゐたので、今では湯銭にも困つて來ました。そこで物は相談ですが、貴方の腰に巻いてる虎の皮を貸してくれませんか。」



鬼「談話を云ふな。この虎の皮を外づされてたまるものか。そんな見つともないことが出来るか。」

兵「お替りに、猫の皮でも。」

鬼「馬鹿にするな。鬼は鬼でも、看板の畫などにされる鬼とは違ふのだ。」と怒り出したので、兵六は、

「イエ今のは私の云ひ間違ひですから……真つ平御免なさい。御相談と云ふのは、ほかの事ではないので、洒落に役者になつて芝居へ出る氣はありませんか。役者になれば世間からワイ／＼云はれて、毎日いゝ衣物を着て、御馳走づくめの酒びたし

と云ふ、いゝ身分になれるんですよ。」と巧く話しを持ち掛けました。

鬼も兵六から、毎日世間話を聞いてゐたので、人間の交際がして見たくなり、

「それは面白からう。」と承知したので、兵六は思ふ壺と、大喜びで、早速芝居の太夫元へ話しを持ち込みました。

芝居の太夫元は、兵六の話を聴いて、鬼の芝居はきつと大當りだらうと、相談に乗つて、いよ／＼芝居をはじめの事になりました。

そこで狂言は、何んでも鬼の出るものに限ると、いよ／＼考へて、

「桃太郎の鬼ヶ島征伐。」

「羅生門の鬼退治。」

「大江山の酒吞童子。」などがよからうと極めて、稽古も済み、いよ／＼初日を開けることになりました。

そこで町中へビラを出し、鬼芝居の吹聴をしたので、江戸中の大評判になりました。

「今居の鬼の芝居で、これまで繪でばかり見た鬼を、生たものが見られるとは珍らしいことだ。」

「鬼の役者を天笠から何千兩で買つて來たさうですが、乗り込みを見た者のないのは不思議なことですね。」

「なんでも天笠から雲に乗つて來たのださうだ。氣に入らないことがあると、すぐ雲に乗つて歸ると云ふことだから、見外づしては又と見られない。」と、何所の町でも寄るとさはると、鬼芝居の噂で持ち切りしました。

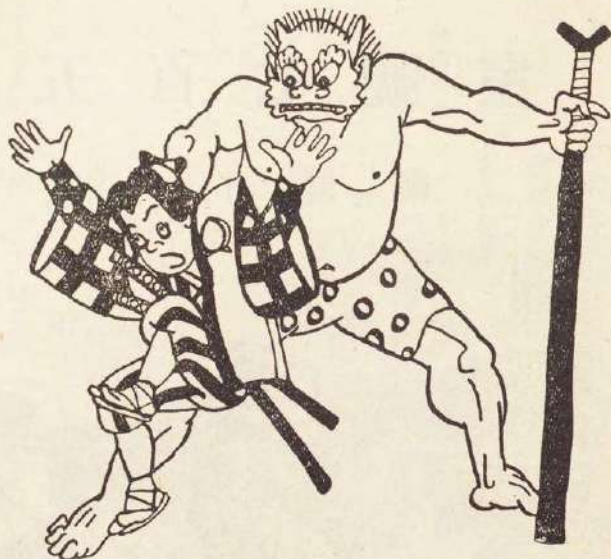
初日になりますと、芝居の木戸口は、黒山のやうな見物で、押し合ひ、へし合ひ、忽ち客止めになりました。

やがて舞臺の幕が開きますと、狂言は鬼ヶ島征伐で、序幕が桃太郎が桃から生れるところ、二幕はお

爺さんお婆さんが、お園子をこしらえ、犬、猿、雉子がお供をする場で、三幕目はいよいよ鬼ヶ島の城門になりますので、見物は手をたき、聲を揚げて、鬼の出で来るのを待つてゐます。

幕がスル／＼と開きますと、そこで、犬、猿、雉子の三人と、大勢の鬼との大立廻りがあつて、鬼が負けて逃げ込むと、桃太郎が出て城門の方へ向ひ、「ヤア／＼日本一の桃太郎、鬼退治に向つたり、城門開いて降参せよ。」と聲を掛けますと、門の中で、「降参などゝは奇ッ怪千萬、イデその舌を引き抜き、くれん。」と、鬼の聲がして、ドロン、チャラン、と鳴り物につれて、門の戸が左右へ開きますと、中から大きな赤鬼が、鐵の棒を持つて、グシン／＼と出て來ました。

見物は鬼を見て、ワァ／＼と聲を揚げて、大騒ぎです。
舞臺では、鬼と桃太郎、犬、猿、雉子の立ち廻り



になり、前に稽古をした通り、鐵の棒と、太刀の打ち合ひから、鬼は鐵の棒を打ち落とされて、尻持ちをつくと、桃太郎は鬼を押へつけて威張つて睨みました。

見物は喜んで、

「ヤア日本一の桃太郎偉いぞ。」

「鬼の弱虫め。」

「赤鬼の馬鹿野郎。」と、散々に聲を掛けられたので、鬼はカット逆上せ、芝居といふことを忘れて、

「こんな人間に負けるものか。」と跳ね起るなり、驚く桃太郎の襟首を持つてボンと投げ出し、犬、猿、雉子を追ひ廻すので、見物は總立ちになり、女や子供は泣き出す大騒ぎに、この一幕はメチャ／＼になつてしまひました。

このしくじりの評判がバツと立つて、かへつて大人氣を呼び、毎日々々瓜も立たぬ大入り、大盛りで鬼も贅澤が出来るのでホク／＼喜び、兵六も大金も

うけをしました。

ところで、この芝居の評判が、日本中へひろまつて、遠い田舎からも、見物に出て来る、京大阪からも、この芝居を買ひに來る景氣に、兵六も、太夫元も、赤鬼をいつまでも引き留めやうと、

「鬼太夫さん。虎の皮も古くなりましたから、朝鮮からいゝのを取り寄せませう。お望みのことは、何んでも聽いて上げますから、どうぞ來年までもめて下さい。」と云ひますと、鬼はナンと思つたか、大きな口を開いて、

「アッハ、、、。」と笑ひ出しました。太夫元と兵六の二人はケンな顔をして、

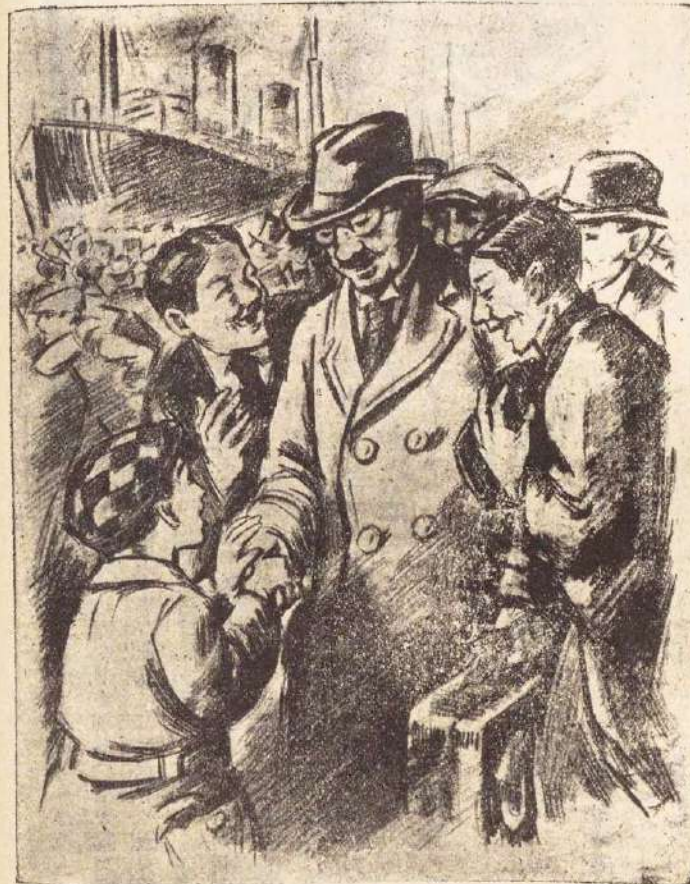
「來年までゐていたゞくのがおかしいのですか。」と云ふ顔を見て、鬼はまた腹を抱へて、

「アッハ、、、アッハ、、、。」と、留め度もなく笑ひました。

(をほり)

五百七十七號室

三井信衛



八二

その一、不可解な

ラヂオの放送

1、二年ぶりの歸朝

佛蘭西エム・エム會社の汽船パ
ルザック號が、白い波をけつて横
濱の港に入ると、數多の人々は先
を爭つて棧橋に出ました。その人
たちは皆、長い間外國へ行つてゐ
た近親の人や知人などを、喜び勇
んで迎へに來たのでした。

「お父さん、お父さん！」
今、一群の人々に圍まれて、大
きくかう叫んだのは滋でした。大
の家は、東京の日本橋通三丁目
にある登里野實石店で、父の登里野
昌平氏は寶石研究のため、恰度今
から三年前に日本を去り、はるば

る佛蘭西へ渡つたのでありまし
た。

二年ぶりで會ふ懐かしいお父さ
ん！ 滋の胸は早やドキ／＼と波
を打つてをりました。生れると直
ぐに、事情があつてお母さんと別
れた滋は、只お父さんばかりが願
ひでした。

「あッ、見えた、見えた。なあん
だ。あんなところだよ。」

その時、一緒に迎へに來てゐた
支配人の松本や、親類の四五人は、
一齊にかう言ひました。

「えゝ？ 何處に？」

滋が振り返ると、汽船とは全つ
きり反對な後の方から、にこ／＼
と笑つて歩いて來るのは、擬ふ方
ないお父さんでした。

「なあんだい、そんな處にゐたの
かい。」

「お父さん！ お父さん！」

「やア、登里野さん。御無事で。」

「店長。お目出たうございます。」

「お目出たう。お壯健で——そん

な聲々が雨のやうに降る中で、父

の登里野氏と滋とは、しつかりと

手を握り合つたのでした。

「おゝ、滋。さぞ待つたらうね。

寂しかつたらう？」

「お父さん……」只それだけを言

つて、滋は嬉しさの餘り涙さへ浮

べました。

「如何です、あちらは？」

「巴里はさぞ賑かですうな？」

「エッフェル塔は高いですか？」

「寶石の景氣は？」

「まあ、まあ、一寸お待ち下さい。さう一時に尋ねられると、これから先に答へていゝかわかりません。兎に角早く家に歸るとしませう。」

「はゝゝゝ、御尤も。さア、早くまゐりませう。」

「お父さん、トランクを持ちませう。」

「あゝ、いゝよ、いゝよ。」

何といふ陽氣な、華やかな集ひでせう！ さうしてまるで小鳥のやうに、びよん／＼と父の前に驅けて行く滋の顔は、又何といふ輝きに溢れてゐたでせう！ だが！ だが！ 既にこの時登里野寶石店の周りには、いゝや滋少年の身には、意外にも恐ろしい魔の手が伸

びてゐたのだとは、果して何人が氣づいてゐたでせうか？

2、思ひがけないお土産

こゝは賑やかな日本橋通りにある登里野寶石店、数多の金銀珠玉は、まるで夢の宮殿のやうに陳列されて、多くの紳士や貴婦人たちが、今日も亦、とつおひつ出入りをしてをりました。

「お歸りなさいまし。」お目出たう存じます。——同じ服装をした男女の店員や、さては又滋と仲好しの少年店員の夏雄や謙一などは、聲を揃へて登里野氏に挨拶をしました。

「私の留守中、諸君は忠實に働いてくれたさうで、何よりも嬉しい。

お禮を言ひます。」賑やかな聲々の中に、やがて父が一室に入ると、滋はその前に坐りました。

「滋。お前はさぞ寂しかったらう。別に變りはなかつたかい？」

「えゝ、御覽の通り丈夫ですよ。だけど、お父さんは少しお瘦せになりましたね。」

「はゝゝゝ、さうかい。……いやまあ、そんなことは何うでもいいとして、滋、お前にお土産を買つて來たよ。もうおつゝけ荷物が届くだらう。」

「えッ、僕にお土産！ 何です。何のお土産です？」

「さア、何だらうな。まあ樂しみにしてゐなさい。今に荷物が來る

から……。」

言ふところへ靜かにドアが開いて、そこへ入つて來たのは支配人の松本でした。

「あの店長、何かお荷物が届いたやうですが……。」

「おゝ、さうか。ぢや荷造りを解いて、此方へ持つて來て貰ひませう。」

言つてゐる下から荷物が着いたので、滋はもう嬉しさでいっぱいでした。と、やがて再びドアが開いて、松本が店員と二人がかりで持つて來たのは、見事な一臺のラデオ聴取器でありました。

「あッ、ラデオ！ ラデオ！」

「どうだ、滋。嬉しいかい？」

「有難う、お父さん。有難う！」

滋は有頂天になつて、父の胸に轟と縫りついたのです。

3、不思議な鐘の音

登里野氏が日本を去つた頃は、まだ何處にも放送局はなく、従つてラデオなどは聴かうにも聴かれなかつたが、今ではもう到處大流行でした。

滋を始めとして、小店の夏雄や謙一は、まるで狂氣ひのやうなラデオファンで、いつも用事がしまふと一室に集つては、部分品で組立てをして聴いてをりました。それがニユトロダイン最新式の精巧な機械を、登里野氏からお土産に貰つたので、もうこの三人の喜びは例へやうもなかつたので

す。

日がとつぷりと暮れて、寶石店の表戸は堅く閉され、薄暗がりの中に数々の寶石類ばかりが、ぎら／＼と鋭く光つてをりました。

こちらは滋。父を始め夏雄や謙一と共に、新しいラデオの前に、ちつと首を傾けてゐたのでした。

今、その大きな擴聲機からハツキリと洩れてゐるのは、朗かに冴え渡るオーケストラの行進曲、トララ！トララ！トララララ！

「いゝなア、いゝなア。」

滋は思はず拍手をしました。と、そのオーケストラが終ると、やがてその次には、『ジェーオービーケー』といふ聲がしました。

「おやッ、お父さん！ 今のは大

「放送局ですね。」

「は、は、は、さうだよ。一寸悪戯をし、みたんだ。」

「これや痛快々々」と、三人は大喜びです。

「い、機械だなア。さすがにやつぱりニュートロダインだ！」

「だが、もうこんな悪戯をしちやいけないな。さア東京の放送を聴かう。」

父がラヂオの波長を調節すると、間もなく東京放送局の放送が聞えました。さうして毎ものやうに、「今夜の放送は終わります。ジーエー、オー、エー、ケー、こちらが東京放送局であります。」といふ聲が聞え、放送は全く終つたのでした。

「な。」

「何でせう？」

「あ、解つた。」と夏雄は言ひました。「あれは店長さん、氣象臺か何かの暗號が、偶然聞えたんぢやないでせうか？」

「ふう、さうかも知れない。」

放送が終つて二時間半も経つたのに、一體何處の放送であらうか？ いや、何の放送であらうか！ 語る折しも、又もや微かにラヂオからは、かんかん！ かんかん！ かんかん！ と二つづ、続けさまに三度の鐘。一同は思はず、ちいつと顔を見合せてました。

4、ダイヤから迸る七色の光

「電報です！ 登里野さん。電報

やがてそれが済むと、少年たちは父の前に集つて、佛蘭西の珍しい數々の話を聴いてゐました。そのうちにどん／＼と時間は経ち、いつしか邊りはいい／＼として、火の番の淋しい拍子木の音だけが、はつきりと耳に傳はつて來ます。……と、その時、かあん！ と微かに／＼鐘の音が聞えたのでした。

「おや、何だらう？」

「變な音だな。」

と、又もや、

「かあん！」

「おや？」

又もう一

つ、今度

は、かん、



かん、かん！と続けさまに三つ。「かあん」といふよりは寧ろ「きいん」といふ、微かながらも鋭い鐘の音——それが確かに／＼、目の前のラヂオから洩れて來たのです！

「お父さん、今のは確かにラヂオですね。」

「あ、確かに鐘が鳴つたやうだ

です！」

明る朝

早く電報

屋に叩き起

されて、滋

がそれを受け

取つて眺める

と、父に宛てた

至急電報。早速そ

れを持つて父の前に

行きました。

「お父さん、電報です。」

「お、さうか……」とそれを開

いた登里野氏は、つと立ち上りま

した。「お、滋。お父さんは直ぐ

に、上海まで行かなくつちやなら

ない。」

「えい？ 上海……。」



「う、どうもかう忙しくつちや困る。折角お前の處へ歸つたかと思ふと、又旅行だ。」

「そして何時頃お歸りになりま

す？」

「さうだなア、用事の都合でハツキリとはわからないが、多分十二三日は滞在しなければならぬだらう。」

「十二三日……お所は？」

「上海佛租界のオテル・ド・シャンハイ宛にしておくれ。」

折角歸つたかと思ふと、又もや船に乗つて上海行。家の中は急に旅行の準備に忙しくなつて、その朝、父は再び家を去つたのでした。時間の都合で神戸から船に乗るといふので、東京驛まで父を送つた。滋が、店に戻つて来たのは恰度お午過ぎ。

「やア、滋くん。御苦勞様でしたね。」さう聲をかけたのはあの謙一少年でした。「御無事にお立ちに

のでした。

……と、それを眺めてゐた滋の目、刻一刻と不可解な色に満されて來ました。

「君、君、謙一君！」

「えゝ？ 何です？」

「可笑しいね、君。あの光線を見給へ。ダイヤから反射した虹を見給へ。」

「おや、こいつは綺麗ですね。」

「ところが、可笑しいことには、この硝子箱の中にたくさんなダイヤがあるのに、半分だけは虹が反射して、残りの半分は變な黄色い色だぜ。」

「えゝッ!?」

さッとい瞬間、謙一の顔色が變りました。思はず滋が陳列箱の蓋

なりましたか。」

「あゝ、無事に立つた。つまんないな。歸つたと思つたら、又旅行だもの。」

「本當にさうですね。しかし、今度は直ぐに戻つてゐらつしやるから、いゝですよ。」

「うん……」

言ひながら滋が何氣なく、目の前の白い壁を見ると、そこには紫、藍、青、緑、黄、橙、赤——鮮やかな七色の光線が、さまざまの形になつて映つてをりました。それは恰度今謙一と滋の立つてゐる直ぐ側の、ダイヤの陳列箱にあるさまざまのダイヤに、欄間から入る日しが當つて、それが偶然にも、見事な分光配列を出してゐた

をあけて、申程から左にあるダイヤ

ヤを手にとつたが、その刹那、彼の顔も亦ハツと蒼ざめてしまひました。

「松本さん、松本さん！」

「はい。」「支配人の松本が時ならぬ滋の聲に、小走りに出て來ました。」

「何です？ どうしたんです？」

「大變です。ごらんない、このダイヤの半分は偽物です。只の硝子です！」

「えゝッ!?」と叫んでそれを手に取つた松本支配人の顔も、急にハツと蒼ざめました。

「うゝ！ 偽物です！ 確かに偽物です！」

偽物だ、偽物だといふ聲に、居

合す店員たちも皆集つて來ました。いつの間に拘り替へられたのか、この碌でもない硝子のダイヤ

！丁度その偽物は、陳列箱にある約半数の十八個ばかり。價にすればざつと二萬圓程です。

「おゝ、電報だ、電報だ。店長へ電報を打たなくっちゃ。」

「松本さん。私が打つて來よう。」

店員の一人は、上海のホテルへ至急電報を打つて、事の概略を知らしておく。滋は直ぐさま警察へ届ける。——登里野寶石店は、俄かに大騒ぎとなつたのでした。

「かん！ かん！ かん！」

直ぐさま探偵が登里野寶石店へ出張して、店員の全てを調べ、尙

又あのダイヤの看守人である謙一少年をも、仔細に涉つて取調べましたが、何の手掛りさへありません。

只、そのダイヤが確かに昨日の夕刻までは、本物であつたといふことだけが、店員の全てによつて證明されただけでした。

すれば、その犯罪は昨日の夕方から、今までの間に行はれたに違ひないのです。が、何者が？ そして何時？

今夜は店員の全に外出を禁じ、登里野寶石店は火の消えたやうに、しんと静まり返つてをりました。

「ね、君、一體君は何う思ふ？」

今、一室で聲低く話してゐるのは、夏雄とそして滋であります。

「滋さん。昨夜は戸閉りもキチンとしておましたし、それに今朝だつて何の異状もないんです。だから……」と一層夏雄は聲を低めて「同じ店員の誰かに違ひないと思ひます。」

「ふうむ……。」
と滋は深く目を閉ぢました。もう随分と夜が更けたものと見え、すつとの遠くで鳴る時計の音も、



数多くハツキリと聞えます。と、その時、かあん！ 圖らずも目の前のラヂオから、微かではあるが、鋭い鐘の音が聞えたのでした。

「おやッ！ 何故ともなく二人はハツと目を見合せました。と、又一つ、かあん！……更にしばらく経つて、かあん！ それなりにバツタリと音は止みました

が、何となく滋の胸には、かうした不気味な犯罪のあつた折柄か、その鐘の音が異様に響いてならなかつたのです。

「滋さん。變ですね」「うむ、どうも變だ

ね。昨夜も放送が終つて二時間半も経つてから、この不思議な音がしたか……。」
「氣象臺か、それとも汽船か何かの信號でせうか？」

「さア、だが何にしても、放送機を具へてゐるところに違ひない。」
といふ滋の話の最中、

「あッ！」と夏雄が叫びました。「え？？ おい、夏雄君。どうした！」

「あッ！ 滋さん。影が、人の影が……。」

「えい！」
と滋の振り返つた時には、もう何事もなかつた。

「どうした？……え？？ どうしたんだ？」

「聲がしましたね、ラヂオから。」
二人はハツと顔を見合せたまま、思はずりりと、ラヂオの側に近づいたのです。

(つづく)



「今、その硝子戸に、確かに確かに、人の影が映つたんです。」

「人の影？ どれ……！」
言ふなり滋は立ち上つて、がら

た一つの聲！ お、それは又思ひがけなくも、あのラヂオの機からです！
「おッ！ 夏雄君！」

「ぢや、僕の氣のせいではうか？」
と、二人がそこにちいつと佇んでゐた時、
「あッ！ あッ、あッ！」
と續げざまに聞え

「この不思議な放送は何處から來るの
でせう？ 又ダイヤの犯人は何者でせ
う？ 賢明な讀者諸君はこの二つに
ついて、色々と推定をなさつたでせう。
が、その諸君のお考へを、根本から
覆してしまふやうな事件が、或は
起らぬとも限りません。今はどんな暗
示をも語ることを控へ、こゝ暫くは諸
君の御推定にお任せしておくと次第で
す。お待ち下さい。次號を！」



童謡

野口雨情選

(子供篇)

石屋さん(賞)

千葉縣 小林 ひで

よいいとなあ
よいいとなあ
石屋さんの
石はこび

重そうだ
汗をながして
よいいとなあ
よいいとなあ

アメ(賞)

東京 ナガオセイジ

アメガボツボツ
フツテクル
キンギヨバチニモ
ハイツテル

あまだれさん(賞)

埼玉縣 小此木巳三雄

ぼつりく
あまだれさん
あなたは

ほんとに
はたらくね
僕はいつでも
よくみてる
ぼつりく
あまだれさん

ぼちのお寢

福岡縣 椿原 龜一

ぼちがすやく
ねむつてる
静かにく
しつくく
ぼちのお夢を
見てみよう
どんな夢だか
しつくく

おるすばん

京都 服部 昌世

時計がなるく
もう十二時だ
かあさまかへりは
いつだらう
お土産うれしい
おるすばん
ぼうやはお腹が
へつちやつた

かがし

熊本縣 海達 公子

すゞめが
かがしを
見ていつた

入道雲

岐阜縣 岩田 繁夫

そら立つた
そら立つた
入道雲の
せのび合ひ

犬

京都 竹内 貞子

ちよこちよこと
やつてくる
ちいさな小犬
かはいくな
ちびはかはい
尾をふつて
ちよこちよこちよこと
かけてくる

サル

京都 丸山 正雄

森ノサルサン

かかし



シアハセ者ヨ
木ノ葉ノ家デ

クリノ實タベテ

クリく目ダマデ

ウタウタウ

白ひき

山口縣 村岡 繁

ゴロゴロゴロ
白をひいた
唄に合はせて
ゴロゴロひいた

雨の日

東京 日向もも子

雨さあふれば
ふといちどくの
木が光る
水たまりみてゐれば
あとから輪ができる



春 浅 い 頃

水 谷 さん

「カニの奴、生意氣だなあ。」

太郎はびかびか光る目廂をつまんで、學校帽をぐつと阿彌陀にかぶりなほしていひました。

「うん。」

五六人の仲間が、うなづきました。

「カニの奴、ひでえ目に合せてやるべ。あいつを海へつれ出して、うめえ工合に海へ落してやるべ。」

「うん。」

やはり、みんなはうなづきました。

學校の歸りがけです。道からちよつとそれた崖のうへに五人ばかりの仲間を集めて、太郎は一つのたくらみをいひ出したのでありました。

太郎といふのは、漁師の網元の子供で、帽子をかぶり、袴をはいてゐました。この小さな漁師町

葉をひるがへします。

「おら、こはかねえよ。」

「よし、しつかりやらなさやだめだぞ。」

太郎はじぶんの言葉が、すぐ通つたので満足らしいはゝゑみを、顔にうかべます。

今、太郎にいひつけられてゐる子供たちは、でんでん太郎に一目おいてゐます。つまり、この子供たちの父親は、太郎の家のおかげで、働いてゐるやうなものでありました。

「おら、だけんど、こはいな。カニは強いから、あとでひでえ目に合ふかも知れねえだ。」
一人の子供が、後で復讐されることをおそれて、逃げ腰になりました。

「馬鹿！ 弱虫！ こはけりや、やめろよ。そのかはり、おめえともう遊ばねえぞ。」

太郎は唯一の武器であるおどかしを、ちよいと用ひます。すると、わけなくその子供は、じぶんの言

太郎がみんなにいひつけて、いたづらをさせようとしてゐるカニといふのは、兼吉といふ子供のあだ名でありました。太郎は兼吉に對して、快よく思つてゐません。それは、今までずつと一年から五年まで、太郎が一番であつたのに、六年になつてから、兼吉が一番になつたからでした。もつとも、六年になつてからは、初めて新らしく來た山田先生に教はつたのでしたが、この山田先生は師範學校を出ると、

じぶんから進んでこんな片田舎の小學校へ来たほどの變り者で、ほかの先生に比べると、親爺と息子くらの年が若かつたのでした。ほかの年とつた先生たちは、太郎を特別扱ひにしてゐましたが、この山田先生ばかりは、太郎とほかの子供たちと、すこしもちがひなく、公平な態度をとりました。従つて、一學期も二學期も、太郎は一番になれなかつたのでした。特別にあまい點を、太郎につけない限り、兼吉が一番になるのは當然であつたのでした。



九六
けれど、太郎としてみれば、兼吉みたいな奴に、一番をとられたことが、癪にさはつてならないのです。じぶんが今まで、特別扱ひにされてゐたことは、棚にあげて、兼吉が山田先生のお氣に入りだなぞといひふらしたりするのでした。そして、兼吉は一番になつてから、偉さうにするとか、生意氣だとか、そんなこともいひふらしました。さうした妬み心が、遂に兼吉を海へ落さうといふたくらみになつたのでありました。それも、手下を使つて、わざとらしくなく、海へつき落さうといふのでありました。

二

その日の夕方、兼吉はまんまと、太郎のたくらみにかゝつてしまひました。わりに暖かい小春日和ではありましたが、海の水は凍えるほど冷たかつたのでした。

兼吉は、太郎のたくらみを氣づくとも、口惜しくてたまりませんでした。岩からつき飛ばされて、やつと這ひあがつた時、兼吉の顔は寒さのために色を失つてをりました。そして、膝から血がにじんでゐました。太郎をはじめ、手下の子供たちは、蜘蛛の子を散らすやうに逃げてしまつて、兼吉を海から引きあげようとしませんでした。



九七
といった太郎の言葉はその際としては、あまりにひどいと思ひました。兼吉は、じつとり濡れたまゝ、痛い足をひきづつて家へ歸りながら、つい口惜し涙をこぼしました。父親にいへば、むろん我慢しろといふにちがひありません。網元の息子であるが故に、しかへしをすることができないといふことは、考へても腹のたつことでした。兼吉は胸がむしやくしやして、なほさら口惜しくなりました。

然も兼吉には、今着てゐる着物のほかに、一枚の綿入れもありません。兼吉は洗ひざらした單衣ものを出して、それをひつかけたまゝ、爐ばたで濡れた着物を、乾かしたのでありました。兼吉が、太郎のことを考へながら、着物を乾かしてゐると、とめどなく涙が溢れて來ました。

けれど、ふと兼吉の目に、山田先生の顔が浮びました。兼吉は涙の霧を通して、その幻にじつと見入りました。すると、幻の山田先生は、兼吉を慰めるやうに、につこりと笑つたのでありました。そして、「いゝよ、なんにも考へるなよ。わたしにはなにかもわかつてゐるんだからな。」

と、やさしくさす言葉を、聞いてゐるやうな氣持がするのです。兼吉はすうつと胸が、軽くなるやうな氣がしました。

着物はなかなか、乾きませんでした。そのうちに、日が暮れてしまひました。

「兼、なにしてるだあ。」

母親は、この漁師町のはづれにある、小さな鐘詰工場に働いてゐるのですが、歸つて來るとさつそくさう聲をかけました。

薄暗いなかで、浴衣を着て、爐ばたにうづくまつてゐる兼吉の姿を見て、いぶかしく思つたのでありました。

「あゝ、おつ母か。お歸り。遊んでてな、岩から落ちたのよ。おれも馬鹿したよ。」

「うそだ。だれかにつき落されたんだべ。」

兼吉は、びつくりして、母親の顔をふり返りました。

「さうちやねえだ。」

兼吉は、ありのまゝを話すことは、母親を悲しませると思つて、さういつたのでありません。

けれど、母親は、日頃から網元の息子に、兼吉が妬まれてゐることを知つてゐました。それに、いく

ら足をはづしたにしても、すつぷり着物が濡れてしまふことは、あり得ないことであります。母親は、兼吉が着物を、すつかり爐のうへにかざして、乾かしてゐるのを見て、すぐにおかしいと思つたのでありました。

「なあ、兼。人間は貧乏ちやつまらねえな。學問をして、うんと錢を儲けるとえゝだあ。」

兼吉は、母親のその言葉で、もう母親が網元の太郎のしたことだと、察してゐるのを知りました。

やつと、涙がでなくなつたところなのに、また涙が目にはじんで來ました。けれど、

「海へ落ちても、乾いた綿入れがないからなあ。貧乏ちやつまらねえな。」

と、太郎のことはやはりいはずに、まるでべつなことをいひました。

兼吉は、六年を卒業する時も、一番になりたと思つて勉強しました。太郎のたぐらみのために、海へ落ちたことなんか、もう忘れてをりました。

ある雨の晩、急に風が出て、嵐になりました。漁師たちは、みんな遠くの海へ行つてゐました。老人や女や子供は、心配しはじめました。もちろん、今夜は歸つて來るはずはないのですが、遠くの海でひどい嵐に、會つてゐなければいゝがと、それを心配したのであります。

ところが、急に村の鐘が鳴りました。難破を知らせる非常の合圖です。みんなは、嵐の暗闇のなかを濱邊へと集りました。そして、濱邊でさつそく焚火をはじめました。雨にも消えずに、火はさかんに燃えしました。人々の心配さうな顔を、その火影が照らし出しました。

鐘はますます烈しく鳴ります。人々は腹の底から聲をしばつて、



「おい、おい。」
と叫びつづけました。救助船を出すこともできません。若い者はそつくり、遠い海の漁場へ出て行つてゐます。ただ、さうやつて、難破しかつてゐる船のために、力をつけてやることしかできないのでした。

兼吉も、濱へ出ました。出てみると、驚いたことには、沖で困つてゐるその船は、網元の家の小船で、都から来た親類の書生さんが二人と、太郎と都合三人で、夕方から夜釣に出かけたら、嵐に會つたといふのでありました。

「若い者がゐなくてしやうがねえな。助け船を出しても、助け船がまた難儀するぞ。」

「困つたこと起つたぢやねえか。なんちゆふことだべな。」

老人や女たちは、じぶんたちの息子、またはじぶんたちの夫が、遠い海の漁場で、やはり難儀してゐる。



やしないかと思ふと、ひとごとへは思はれませんが、演には悲しい騒ぎが、いつまでもつゞくのでありました。

だがその時一艘の小船が、みんなのゐるところから、かなり離れたあたりから海へ出ました。

「だれが出ただあ。あの船見ろや。」

一人が氣づいたのです。みんなは、すぐにその小船の方へ急ぎました。人々がその小船がおりたあたりに来た時には、小船はかなり沖へ出てゐました。

もう仕方がありません。たゞ濱で焚いてゐる焚火を、うんと焚いて沖を照らすやうにするほかはないのです。

だが、小船で出た人は、じぶんの腕が達者でないことを知つて、ちやんと綱を用意してゐました。つまり、海岸の太い松の幹に、かたく綱のはじを結んで、それを頼りに綱をのびしながら、沖へ出たのであります。そして、難破しかつてゐる船の三人を、こちらの小船にのせて、今度は綱をひきながら、岸へ歸つて来ようといふわけでありました。

十分、二十分、三十分……
難破しかつてゐる船から、三人をこちらの小船にのせました。やがて、小船は嵐のなかを、綱を頼



りに岸へ近づかうとしてゐます。その容子を知つて、人々はみんなしてその綱を曳きました。

そして、たうとう、小船は岸に近よりました。焚火の光で見ると、助けに行つたのは、山田先生と兼吉であることがわかりました。網元の家族は、どんなに喜んだでせう。二人の書生と太郎とをいたはると同時に、山田先生と兼吉に向つて、あらんかぎりの感謝を捧げるのでありました。

「兼吉さんは、太郎さんをせひ助けたいといふために、一生懸命でね。はたで見ても涙の出るほど働きましたよ。」

山田先生は、兼吉をほめてゐました。

けれど、兼吉は、山田先生のことをかういひました。

「おら、山田先生が、じぶんの教へてゐる子供が、死にかゝつてゐるのに、かうしちやゐられんといはれたから、せひとも助けべえと思つただあ。」

せんでした。

太郎は、うはべだけは、二人にお禮をいひましたが、いつまでも心は平らではありませんでした。殊に、兼吉に對して、頭があらがない位置になつたことが、考へるにつけて、口惜しかつたのでありました。

「兼吉が死にさうな目に會つたら、おれが助けてやるだ。」

と考へた太郎は、いつか兼吉が、死にさうな目に會ふやうにしたものだ、と、たくらみはじめるのでありました。

春はまだ浅く、今年は梅もおくれるといふうはさでした。太郎が、兼吉に對して、心から、へりくだることのできる日は、いつ来るのでせうか。

でも、そんなことを知らずに、兼吉は勉強してゐました。

(を は り)

三日の後、いゝあんばいに、この漁師たちは、遠い海で嵐にも會はず、無事に歸つて來ました。そのお祝ひの時、山田先生と兼吉とは、みんなから海の勇者としてほめられてりました。網元の家からは二人にりつばな贈りものがありました。

けれど、二人ともがあくまでもその贈りものを拒んで、

「こんなに、喜んでいたら、それで充分ちやありませんか。」

といったことは、更に二人を偉大にしました。

太郎だけは、じぶんが親類の従兄たちと、夜釣に出かけたことを後悔してゐました。それは、つまり山田先生と、兼吉とを偉大にしてやつたやうなものだと考へて、ひどく口惜しがつたためでした。あんなに大騒ぎしなかつたつて、大丈夫、岸へつけたのに、網元の家の人に乗つてゐるといふだけのこと

でみんなが、大騒ぎしたことも、口惜しくてなりま

家鴨の駈け足

野口雨情

家鴨の駈け足

ぐわっ／＼ぐわッ

お家を忘れた

ぐわッ／＼ぐわッ



あつちへ

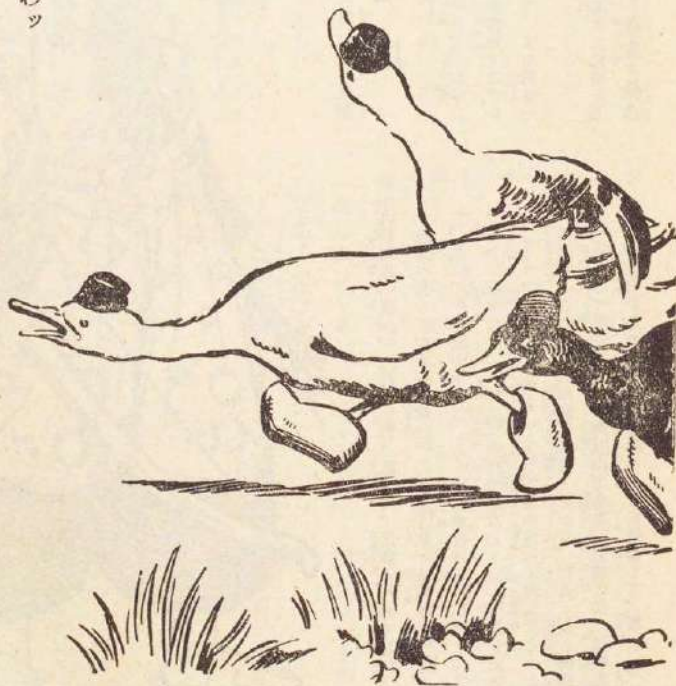
ぐわッ／＼

こつちへ

ぐわッ／＼

家鴨の駈け足

ぐわッ／＼ぐわッ





金札の鶴

(爲朝物語)

三島霜川

爲朝が、伊豆の大島に流されてゐた時、一本の矢で、討手に向つた平家の兵船を射止めた話は、どなたも御存知でございませう。爲朝は、勇ましい英雄でした。そして、また日本一の弓取でした。

少年の頃から、すてきに強くつて、あんまり兄さんたちを、やつつけ過ぎたので、父の六條の判官爲義から勘當されて、

九州の方へ追ひやられました。爲朝は、爲義の八男でした。

九州へ行つてから、爲朝は、いよいよ其の武勇を顯しました。それで、十五の年には、もう豊前豊後の方を征服してしましました。家來にも、八町廻の紀平治など、いふ聲傑がゐりました。そこで、鎮西の八郎といふ名が、都の方へも響渡りました。爲朝は、自分で、九州總追捕使と云つて、だん／＼と肥後の方へ攻入つて行きました。阿蘇山で名高い肥後には、阿蘇忠國といふ名家がゐりました。忠國は直ぐに降参して、頼の白鯉

姫を、爲朝に娶せることに致しました。この白鯉姫も家來だちの女で、づつと以前から、一匹の大猿を飼つて居りました。——この「物語」は、この猿の話から始まります。

御曹子爲朝

「おい、紀平治。お前の祖父さんは、琉球の方から渡つて来た者だと云つたな。」

爲朝は、阿蘇の館の椽先きに近い柱に背なかを凭せながら、ふいと、然う、たづねかけました。

「はい。仰せの通りでございます。」

紀平治は、椽板の上につくばつて、ぶき／＼ちやうな言葉で答へました。

「琉球へは、こゝから何里程あるな。」

「大島、種子島、島から島を傳ふて、七島灘を渡つて参りますと、大方、三百里はどあるとか申しまする。」

「三百里か。順風であつたら、七日八日ほどの船路

であるな。」

「まづ、そんなものでござりましょう。」

「渡つて見たいな。九州と申しても、もう薩摩が涯ぢや。南へ南へ……」と、爲朝は、その遅ましい腕を、づいと伸ばして、南の方を指さしました。「琉球、高砂(今の臺灣のこと)までも行つて見たいな。青海原が渡つて見たいな。」

「海は廣うございます。どこまでも涯がないとか聞いて居りまする。」

と、紀平治も、悦しさうに、膝を前の方へ乗出し

ました。

「さうぢや。海は廣い……。ちやが、島でさへ、

その海を渡るといふではないか。」

さう云つて、爲朝は、その椽さきの下のところに、大きな籠に伏せられてゐる丹頂の鶴を、じつと見つめました。鶴は、ほか／＼と暖い春の日に向つて、さも、のび／＼としてゐるやうに、長い首を伸ばし

てゐましたが、どうした譯か、その片一方の足に、恰ど短冊ほどの金の札が結びつけてありました。「あの鶴でも、籠を出したら、琉球まで飛ばうも知れぬな。」

「それは、飛びまする。」

「それなら、俺どもにも渡れるな。」

「それは、渡れまする。」

恰ど、さう云つてゐる時のことでした。奥の方から、恐ろしい悲鳴が……、つゞいて、けたゝましい、大勢の女の叫聲が、ドタバタと、物凄い物音と入れまじつて、聞えて來ました。

「何事ぢや！」

爲朝は、きつと身の構をして、その方へ振向きました。とたんに、隣の室につめてゐた手取の興次、高間三郎、同四郎、吉田兵衛、打手紀八、越矢源太、松浦二郎、大矢新三郎など、一騎當千の郎黨たちが、騒を聞きつけて、バラ／＼と、それへ現はれる。奥

一〇八
の方の廊下つゞきからは、凡そ十二三の子どもの丈、ほどもあらうかと思はれる大猿が、獵人に追出された兎のやうに、だつと飛出して來ました。見ると、この猿の口のあたりから、ボトリ、ボトリと血が滴れる。顔ちうが血だらけになつてゐる。そして、走つて行くあとには、廊下の板に、ベツとり、血の足あとが、くつついてゐました。——それは、爲朝の奥方、白縫が、年來奥館に飼馴らしてゐた「お五」といふ大猿でした。

お五の活躍

お五が何うしたのかと、爲朝を始め、ちよつと、果氣に取られて居りました。

すると、「その猿、打殺して下され……お五は、若菜を喰ひ殺しました……殺して下され。逃がされな。」

と、叫びながら、また十六の奥方の白縫は、長刀

の鞘をはづして、かいこみ、とつとつと、後を追つて駆けて參りました。大勢の腰元等も、めい／＼獲物を持つて、その後から、どや／＼と續いて來る。

「ナニ、腰元の若菜を喰ひ殺した……」

爲朝は、さすがに驚いて、つツと立ちあがりまし

た。
「氣が狂ふたと見えする……。」

と、白縫は、血相を變えて居りました。

爲朝は、自分に殺しようと思つて、白縫を留めて、「たかゞ猿ぢや。御身が手を下すまでもない。それッ……」

と、郎黨たちに命令して、「この畜生ッ。」と云ふやうに、大きな眼で、きつと、「お五」の方を睨めつけました。「お五」も白い齒を剝出して、爲朝等の方を振返つて見ましたが、見る／＼うちに築山へ駆上がつて、そして、木立の間に逃込むでしました。

紀平治を眞ッ先きに、郎黨たちは、バラ／＼と庭に駆下りて、八方から「お五」を取囲みました。爲朝を始め、誰しも、すぐに若菜の簍が討取れるものと思つてゐました。「大きいと云つても、猿だ！」と、皆が、さう思つて、馬鹿にしてゐました。

ところが、「お五」には、神變不思議な早業がありました。樹に駆上る。枝から枝へと飛びつく。樹から樹へと渡り歩いて、隠れたかと思ふと、顯はれ、顯はれたかと思ふと、隠れて、ちよこ／＼、ちよこ／＼逃廻る、すばしっこさ——それは、まツたく、目にとまらぬほどでした。太刀、薙刀、打物取つての勇士たちも、これには、手のつけようがありません。八町、礫と呼ばれて、石投にかけては、幻術のやうな技のある紀平治さへ、手頃の石を一ツ拾つて持ったまゝ、どうしても、それを投付る機會がありませんでした。それで、皆が大手古摺でした。そして、只、あれ／＼と騒ぐばかりでした。

かうなると、「お五」は、勇士たちを、すツかり、馬鹿にして丁ひました。「人間だなんて、威張ツてゐても、ろくに木登りも出来ないぢやないか。間拔だな。」——多分、さう考へたのでございましょう。時々、木の股やなどへ顔を出しては、きよろツとした眼を、くりツ／＼させながら、すぐにまた、何處へか隠れて了ひました。

さうかと思ふと、高さが十丈ほどあらうと云ふやうな樹のてツべんへ上がツて、片手で、ブラリと、ぶら下がるやうな離業を見せて置いて、それから、恰ど燕が宙がへりするやうに、ヒラリと身を翻して、スル／＼と下の方へ姿を隠して了ふやうなこともありました。

この有様を見て、爲朝は、嚇ツとなりました。「うのれ、畜生め。射てくれよう。こりや、弓を持て。」

と、腰元ともに云ひつけました。腰元どもは、す

いふ、すてきな強弓でした。

爲朝は、苦もなく、ぐいと、それをたわめて、弦を張りました。そして、十五束もあらうといふ膺股の矢を持つて、さツと庭へ飛出しました。身の長が、六尺七八寸、左手が右の手よりも七寸も長かつたといふ快男子——姿は颯爽として、「お五」などは、睨殺されて了ひさうに思はれました。

「お五」は、その時、とある梢の茂りから、ちよいと顔を出して、遙に、それと見ましたが、「さア、大變だ！」と、云ツたやうに、急に慌て、別の枝へ飛移りました。そして、それから間もなく、何處へ行ツて了ツたのか、まツたく行方が解らなくなツて了ひました。

爲朝は、齒噛みをして口惜しがりました。そして「樹を伐り、草を刈りはらつても、あの猿、探出して打殺せ。」

と、叫びました。白縫も、氣の強い腰元どもを引

二一〇
ぐに、三四人ほどして、大きな弓を、かたげるやうにして持つて参りました。それが、凡そ、天秤棒の太さほどもあらうと



きつれ
て、あツ
ちこツちと探
し廻りました。けれども、地にもぐツたのか、天に登ツたのか、「お五」の行方は、かいくれ知れませんでした。いくら皆が血眼になツて、一時探しても二時探しても解りませんでした。

さすがに爲朝も、氣根が盡き、拍子拔がいて、ぼ

かんとして了みました。

『生まれて此來、一度だつて、誰にもやられたことはないのだが、今度はやられた。』

さう思ふと、爲朝は、忌々しくなりませんでした。さうして、機嫌の悪い顔をしながら、籠に伏せてある丹頂の鶴のところへ引返して來ました。

鶴の功名

この丹頂の鶴について、一ツのお話がございます。ある時、爲朝は、阿蘇の山中へ狩に出かけました。すると、この鶴が、金札の紐を樹の枝にからめて、バタ／＼しながら、飛べないで、苦しむで居りました。それを見て、爲朝は、ひどく可哀さうだと思ひました。また、脚に金札がヒラ／＼してゐるのを不思議にも思つて、紐を解いて遣りますと、鶴は大分弱つて、やはり、飛ぶことが出来ません。そこで、ふと、金札を見ますと「康平四年、源義家放之」

て、勘當を免す。その時は、鶴をつれて急いで都に上れ。必ず／＼その鶴を大切に養へよ。』

と、返事をくれました。それで、爲朝は、鶴を大切に、勘當を免される日の來るのを待つてゐました。

鶴は、よほど年を老つて居りました。また、つれて來た當座は、だいたい弱つても居りましたが、爲朝が、餌のことやなど、親切に世話をしましたので、一日々々に、元氣がついて參りました。そして、空の晴れ渡つた朝などは、日の出に向つて、清らかな聲で、高く啼いてゐることもありました。

爲朝は、この鶴を大切にしたばかりではありません。大そう愛しても居りました。で、その傍に立つて、白と黒とに彩られた其の麗しい羽毛の色を見て、いくらか、むしやくしやした心もちを和げられて居りますと、そこへ、郎黨の高間三郎がやつて來まし

と、彫りつけてあるのでございます。

爲朝は、ビックくりしました。その義家は、八幡太郎——爲朝に取つては、曾祖父さんに當るのでございます。昔、義家が、奥州へ、安倍の貞任を征伐に行く時に、戦に勝つようにと祈つて、鎌倉鶴ヶ岡八幡の社頭で、一羽々々に金札を結びつけて何十羽といふ鶴を放つたことがあります。この鶴は、その一羽でした。

『はからず此の鶴を獲たといふのは、何にか芽出度い兆であらう。この鶴には、義家公の靈がやどる。』さう思つて爲朝は、大そう悦んで、鶴を大切にいたはつて、館へつれて歸りました。さうして、勘當は受けては居りましたが、都の父爲義のところへもこの悦を知らせて遣りました。すると、爲義も、非常に悦んで、『それは我が家に取つて、大きな功をした。わしも、何十羽のうちの一羽なりとも、その鶴を獲たいと思ふてゐた。近いうちに、朝廷に願ふ

た。

『殿。お五めは、お館の外へ逃出したやうでございます。』

『さうか。何處々々までも探し出せ。爲朝が、名にかけても、仕止めるのぢやぞ。』

と、きつと言渡しました。

高間三郎は、すぐに引返して、紀平治などにも其れと傳へ、また勢子（雑兵）を驅りあつめました。少らくすると、今度は、手取の與次が、息を切つてやつて來ました。そして、「お五」が、隣りの文珠院といふ古刹へ逃込むことを知らせました。

『ナニ、文珠院へ逃込むだといふか。ム、もう袋の鼠ちや、逃がすなよ。』

と、爲朝は、大悦に悦びました。

『ところが、殿、文珠院は勘願所でございます。殺生禁斷でございますから、手のつけようがありません。』

「ア、さうであつたな。」

と、爲朝は、また、やられて、ガツかりして下りました。勅願所といふのは、天皇の御信仰なさるお寺のことでございます。また、殺生禁断といふのは、そこでは、一切、生きものを殺してはならぬのでございます。で、爲朝は、困つて了ひました。と、そこへまた、八町礫の紀平治が、石を一ツ握りつめたまゝ、口惜しさうな顔つきで、やつて來ました。

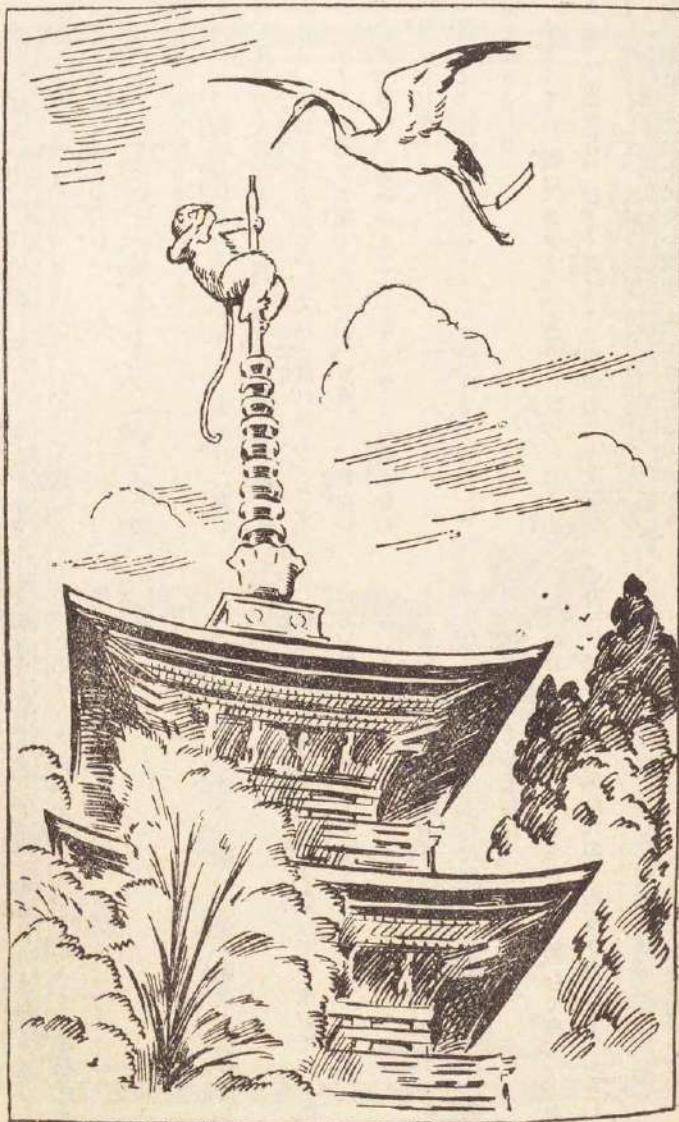
「文珠院の住持は、どうしても、あすこで、お五を殺してはならぬと申します。それで、生捕にしようと致しましたら、お五め……あれ……御覧じあれ。あれ、あの五重の塔の上へ登つて了ひました。」

文珠院の五重の塔は、そこから三町あまりも離れた小山の上に、繪のやうになつて、高く聳えてゐました。その塔の火珠——恰も戟のやうな形をした塔の尖頂へ、「お五」は、今しも、屋根から屋根へと傳

はり登つて、さもなく、安心したやうに、こつちを見下ろしてゐるのが、よく見えました。

爲朝は、足すりして、口惜しがりました。すると、籠の中の丹頂の鶴が、切りに、羽ばたきをして、籠を出たいやうな様子が見えました。爲朝は、じつと、その様子を見てゐて、ふと、心づくことがあつたやうに、うなづいて、いきなり、鶴の籠を除つて遣りました。鶴は、羽ばたきをして、さつと空へ、舞上がりました。

鶴は、南へ南へと飛んで、やがて、その影が見えないやうになつて了ひました。爲朝は、思つたことが外れて、その顔に、失望の苦しみが、だん／＼、ハツキリと浮上つて來ました。紀平治たちは、どうして鶴を放してやつたのかと、それを不思議に思ひました。爲朝に、たづねても、爲朝は、何んとも云ひませんでした。



やゝしばらくすると、鶴は、南の方の空に、小さい影を見せて来ました。さうして、だん／＼塔の方へ近く飛んで参りました。

爲朝は、息をつめて、瞬もせずに、一心に、その影を見つめて居りました。

やがて、鶴の金札が、ヒラ／＼と、春の日に輝いて見えるやうになりました。さうして五重の塔に近づくと、火珠のさきから、一丈ほど離れたところを、クルリ／＼と舞って居りました。「お五」も、仰向いて、近づけば、掴みかゝらうとするやうな様子をして居りました。

爲朝は、何か祈るやうに、うなだれて、じつと、眼を瞑りました。

するうちに、鶴は、さつと、「お五」に近づいたと思ふと、「お五」は、ひどく慌て、眼のあたりを押へました。そして、火珠を蹴下りようとするところを、鶴は、また、あの長い嘴で、「お五」の眼のあたり

を衝きました。と、「お五」の手は、火珠をはなれて、ころ／＼と屋根を滑ったかと思ふと、屋根から落ちて真ッ逆さま！

爲朝は、

「あッ」と、感歎して、皆と一緒に、手を拍って悦びました。

鶴は、そのまゝ南へ南へと飛んで、やがて、その行方が解らなくなつて了ひました。

「お五」は、五重の塔の下に落ちて、ひしやげたやうになつて死んでゐましたが、その眼のうちに、砂が一杯に入つてゐました。

これは、鶴が、どこからか砂を銜むで来て、「お五」に目つぶしを呉れたのであらうといふことでした。

(をはり)

特別二大長篇



三人の片輪が大蛇を退治した話

ホワイト・ハウス物語

宮 眞 資 夫

大 木 雄 三



三人の片輪が

大蛇を退治した話

宮島 資夫

一一八

むかし、若狭の國に、厚代の判官といふ殿様がゐた頃のことです。ある年の春に、この殿様の領分へ、どこからともなく一疋の大蛇が来て住むようになりまして。夜になると大蛇は山を出て、村や里を荒しあるきます。牛でも馬でも、鶏でも人間でも、見當り次第にとつて喰ふので、厚代判官の領地は見ると荒れ果てしまひました。村人や里人は、父を失ひ子を取られて嘆いてゐますし、大

蛇の通つたあとの田圃は毒氣にふれて、稲も麥もすぐに赤く枯れ果てしまつてゐました。厚代判官も大變に心配して、鐵砲の上手な獵師を雇つたり、武勇にたけた勇士を集めたりして大蛇退治をして見ましたが、いつも大蛇の爲にみんな殺されてしまひました。とうとう殿様は、もしあの蛇を退治してくれれば、自分の大切なお姫様もやるし、この國も譲つてしま

ふと云ひ出しました。そこでまた、若狭の國へ色々な人が集つて来て大蛇と戦つて見ましたが、今度もまたどの人もむざむざと大蛇の餌食になつてしまひました。

殿様はすっかり失望してまるで病人のようになつてしまひました。全くこのまゝで行つたならば、若狭一國は一疋の蛇の爲に亡はされてしまふことになるのです。ですからどこへ行つても、人々は蒼い顔をしてうなだれてゐるばかりで、まるで國中一體が死んでしまつたように寂れてしまひました。

丁度その時分、お城の門のそこへ、三人の變な風をした人がやつて來ました。そして、

「大蛇を退治すれば、綺麗なお姫様を下さると云ふのは、この城のことですか。」と門番に訊ねました。門番も矢張り、いつ大蛇に喰ひ殺されるか判らないので、心配さうに首垂れて考へ込んでゐましたが、その聲を聞くと、

「あゝさうです。」と云つて、顔を上げて見ると、なほ一層驚いて、

「あつ。」と腰を抜かしさうな叫びを上げました。見るとそこには、頭の毛も眉毛も睫毛も何も無い、のつぺらぼうな章魚人道のお化けみたいな男が三人、ぼろ／＼の着物をきて、變な荷物を下げて立つてゐます。そればかりではありません。一番先に立つた男は片眼がつぶれて、唇が厚はつたく腫れ上つて、物を云ふたんにその口が、まアるくばく／＼と動くのです。二番目の男は兩方の耳がありませんでした。三番目の男は、鼻がなくなつて、大きな穴が二つ、顔の真中に空を向いてあいてゐました。

「そんなに驚くことはありません。一番先に立つた男は門番の驚いた風を見ると、まあいい口を大きくあけて笑ふような顔を見せて云ひました。

「私達は、一年中大蛇を捕つて歩いてゐるものです。

若狭の國の大蛇を退治れば、お姫様もお城も下さる
と云ふことを聞いたので、もう一月もかゝつてこ
こまでやつて來たのです。心配しないで殿様にさう
申し上げて下さい。」

「は、あ、それは駄目だ。」

と門番はその人達がさう恐くないものだと思ふと
すぐに云ひました。

「いま、でも、このお城へ、大きな鐵砲を持つた
強い人だの、長い刀を下げた人や、立派な弓矢を携
へて來た人がどの位あるか知れない。けれども、みん
な大蛇に喰はれて死んでしまつた。それをお前が、
そんな片輪みたいな恰好をして大蛇を退治するなん
て、は、そんなことを殿様に申し上げただけでも
殺されてしまふかもしれないぞ。」と、さも輕蔑した
ように笑ひました。

「い、え、私達だけは、キツと大丈夫です。もし退
治そこなへば、私達が喰はれてしまふだけではあり

ませんか。」片眼の男は平然と答へました。門番も
成程と思つたらしく、すぐにその事を殿様に申し上
げました。

殿様も、その化物のような片輪で汚いなりをして
ゐる男の話を聞かれたときには、少し失望されたよ
うでありましたが、然し、溺れる者は藁をもつかむ、
と云ふ通り、

「どんな者でも好い。あの恐ろしい蛇さへ退治てく
れ、ば我々は助かるのだ。早くこれへつれて來い。」
と門番に云はれたので、三人の男はすぐに、お城の
中の御殿のお庭に通されました。そして、殿様の前
に立つてお辭儀をしました。

その時の殿様の驚き方はどんなでしたらう。門番
に話を聞いてゐたとは云へ、これほど變な可笑いよ
うな恐いような不思議な恰好をした人間は、今まで
にも御覽になつた事がなかつたのです。

「もしこの男達が本當に蛇を退治して、いよくお



姫様をくれと云つたら、その時はあの
可愛い姫はどんなに嘆くだらう。それ
こそ考へると悲しくもあれば恐ろしく
もある事だ。」

さう思つて、片眼の口の丸い男の顔
や、兩方の耳がない、つるの取れた藥
鐘のような顔だの、鼻の穴が黒く大き
く空を向いて、どれも變に赤黒くのつ
べらぼうの恰好をした三人の男を、悲
しさうにちつと眺めておいでになりま
した。

すると先に立つた片眼の男は、
「私達はいま、でに何年もの間、大蛇
を退治して暮して來た人間です。どん
な大きな蛇でもきつと退治してお目に
かけますが、もし首尾よく退治したらき
つとお姫さまを下さいますか。」と遠

慮なく殿様に訊ねました。

『それはきつと上げるとも。必ずあげるに違ない。』
殿さまも仕方なくお答へになりました。

『では、私達が出発する前に、そのお姫さまに一度逢はせて頂きたいと思ひます。』片眼は平氣な顔で云ひました。

殿様も、それには益々困りましたが、

『では姫を呼んで来てくれ。』と悲しさうな聲で奥方にさゝやきました。

姫は間もなくそのお座敷へ出て來ました。

厚代判官の瑠璃子姫と云へば、若狭一國ばかりでなく、日本國中にも聞えてゐるほど美しい神々しい姿をした方でした。

『この方の爲ならば、私は命を捨てゝもきつと大蛇を退治して御覽に入れます。然し、運よく退治おほせた時には、きつと私の處に來て下さいますか知ら。』
片眼の男は、づか／＼とお姫様に訊ねました。

口を大きく開けて、笑つてから、

『ではすぐに蛇を退治して來ます。』と云つてさつさとお城を出て行きました。

大蛇の住んでゐる山と云ふのは、お城の北の方の五里ばかり奥にありました。三人の男はお城を出ると、急いで歩いて行きました。田圃の作物は赤く枯れて、村里の人々はみんな蒼い顔をして首垂れてゐました。三人は氣の毒さうにそれを眺めて、歩いて行く中に、やがて山道にさしかゝつて來ました。

古い老木が空をしのぐように繁つてゐる、恐ろしい山でした。けれども三人は恐れる色もなく、どんどん進んで行きました。やがて何となく醒い風が吹いて來て、大蛇のゐるのも遠くないと思はれる所へ來ると、片眼の男はそこで立ち止りました。そして四邊の様子をよく調べてから、二人の男に何か云ひつけました。何も彼も、もうすつと以前からさだまつてゐる事のように、耳無しは、荷物の中から、變

殿様も奥方も、傍に並んでゐた家來達も、その時は思はず顔色をさつと變へました。もしお姫様がいやだと云はれたら、いや、きつと厭だと云はれるに違ひない。その時はどうしたら好いか知ら。と皆なが考へたからでありました。然し瑠璃子姫は驚いた風もなく、『はい、きつと參ります。』と素直にお答へになりました。

『それで安心を致しました。それでは、あなたのお心を見せて下さる爲に、その黒い髪の毛を、ほんの一握り切つて下さい。さうすれば大蛇はきつと退治することが出來ますから。』片眼は云ひました。それを聞くと、家來の一人は、この圖々しい男を一太刀で切つて捨てやうかと、顔色を變へたほどですが、お姫様は、いやな顔一つせずに、

『はい。』と云つて、自分の髪の毛を一握りほど切つてお渡しになりました。

『これでもう大丈夫です。』片眼は愉快さうにまアる

な物を取り出すと、それを細長い丸い杵に組み立てて、その中に身體を突つ込むと、顔と足の先だけを出して、そこへごろりと横になりました。それは丁度丸太の中から人間の頭が出てゐるような形でした。鼻無しも同じように杵を作つて潜り込みました。が、その人は兩腕を出してゐて、片手には小さな斧のような物を握つてゐました。

二本の丸太がそこに轉がつてゐるようなのを、ちやんと並べてやつてしまふと、片眼は、二人の口に草の葉のような物を含ませてから、さつきお姫さまに頂いた髪の毛に火をつけて燃しました。さうして自分は、すぐわきの松の枝に登つて、小さな弓と矢を手にながら、息をこらして隠れてゐました。

女の髪の毛をやく匂が、だん／＼にそこいら中に漂ひはじめたと思ふと、やがて、山奥の方から、風のような物凄い響が起つて、それがだん／＼に近づいて來ました。それは全く何と云つて好いか判らな



いほど、氣味の悪い凄じい音でした。木の枝のぼき
 ぼきと折れる音！梢のざはめき、それに交つて大地
 を揺がすようなうなりが近づいて來たと思ふと、暗
 い森から、鏡のように光る眼をした大きな蛇が、炎
 のような毒氣を吐きながら、道の真中に横たはつて
 ある二人を眼がけて飛んで來ました。
 大蛇はそこに人間らしい物の姿を見たとき、最初
 の男の胴中へがぶりと喰らひついて、うんと頭を上
 げようとしましたが、その時、二番目に寝轉んでゐ
 た鼻無しは、手にしてゐた小さな斧で大蛇の鼻面を
 力まかせに切りました。
 すると、不思議なことには、そんな小さな斧なの
 に、大蛇は如何にも痛さうに、耳無しをばたりと落
 すと、怒つて今度は鼻無を一呑みにしようと大きな
 口を開けて、
 『ふうっ。』と毒氣を吐きました。
 それを見ると、今まで松の枝蔭にかくれて、弓に



矢をつがへて狙ひを定めて
 ゐた片眼は、兵とばかり
 に小さい矢を切つて放
 しました。小さな矢
 は蛇の右の眼に矢
 羽もかくれるほ
 ど深くぐさり
 と突つ立つ
 たのです。
 急所の
 痛手

に大蛇は身體をのけぞらして、頭を高く上げました。片眼の放つた第二の矢は、今度は咽喉のあたりに、先よりも深く射込まれたのです。

さすがの大蛇も、苦しうに毒氣を一つ空に向け「ふうつ」と吐くと、大きな地響を立て、どたりと倒れましたが、その響の物凄さは、大地が震動して遠くまで山鳴を起すほどでした。

耳無しも鼻無しも、素早く杵から飛んで出ました。そして、前に立つてゐる片眼の前にお辭儀をして、「お目出度うございました。」と、嬉しうに云ひました。片眼はたゞ簡單に、

「有難う。」とそれに答へると、すぐに腰の劍を抜いて仆れてゐる大蛇の口の裂目の上をえぐりました。すると不思議なことには、そこから、虹のような色をした鱗が一枚ぼろりと落ちました。それから次に反對の方をえぐると、また一枚同じような鱗が取れたのです。

片眼は二枚の鱗を手にとり、嬉しうに押さえて懐ろに入れ、二人の男を従へて、すぐにさつさと山を下つて行きました。

三人の男がお城へついたのはその翌朝のことでした。お城の中では、あの汚いお化けのような男が甘く蛇を退治するだらうか。もし蛇を退治したら、どうしてお姫様をやる約束を破つたら好いか知ら。と二つの心配に包まれて、その晩はみんな額を焼めて相談をしてゐると、夜中に地震のような山鳴の音が響いて來たのを聞いただけで、朝までは何事もありませんでした。

そこへ、片眼が先に立つて、三人は意氣揚々と歸つて來ました。そして、

「殿様私達はお約束通り大蛇を退治して今歸つて參りました。その證據には、千年の甲羅を経た大蛇の耳にある、鱗を二枚取つて參りました。」と云つて、殿様に虹色の鱗をお目につけました。

殿様はその虹色の鱗を見ると、すぐに欲くつて堪らなくなりましたが、じつと我慢をして、それを片眼に返してしまふと、

「それならば誰か使を出して早々大蛇の死體を見届けさせろ。」と、お云ひつけになりました。

勇しい若者が二人、馬に乗つて山へ檢分に行きますと、果して、四斗樽のような頭をした大蛇が殺されて、通道に横たはつてゐました。若者は喜んで、「惡魔の大蛇は退治された。」と村から村へ叫びながら馬を走らせて歸つて來ました。狂氣のように喜んで領民達は、

「私達を救つて下さつた勇士を拜ませて下さい。」と口々に叫びながら、お城の廻りに集つて來ましたが、殿様はこのお化けのような人間を姫のお婿様だと云つて見せるのがいやなので、

「勇士はいま疲れて眠つてゐる。」と云つて、城の門を中々開けさせませんでした。

そのとき片眼の男は、

「私も本當に大蛇の毒氣にあたつて、身體中が燃えるようです。大蛇の死んだのが判つたらどうかお約束通りお姫様を私に下さい。あのお姫様に看病して頂けば、きつと一晩の中にこの苦しみ癒ります。」と云ひました。

殿様はお姫様はやりたくなし、虹色の鱗は欲くつて堪らないものですから、お姫様に、「今夜一晩だけ看病してやつてくれ。」とお頼みになりました。然しお姫様は、

「いゝえ、わたくしはいつまでもあの方の許へ參ります。このお城も、領下の民もみんな救つて下さつたのはあの方です。わたくし一人はそれが爲ならどんなになつても構ひません。」と云つて、片眼の男のところへお出でになりました。すると片眼は、

「あゝ、よく來てくれました。それからもう一つのお願ひは、大きな盥に綺麗な水を一杯と、手拭を澤

山持つて来て私達の身體を冷して下さい。」と云つて、御殿の一室に入つてしまひました。
お姫様はすぐに、大きな盥に水を一杯と、手拭を澤山運はせると、片眼の男は、
「それで好いのです。それからこの部屋へはあなたよりほかには誰も入つてはいけません。」と云つて、



お姫さま一人を残らせて、その部屋をきちんと閉めてしまひました。
さうして片眼の男は、布団の上に横になると、自分の頭のところに、虹色の鱗を立てかけました。さうして一つは固く自分の手に握つてゐました。
お姫さまは、手拭を水に浸しては、三人の男を冷してやりました。けれども蛇の毒にひどく當てられたのか、三人の身體は火のように熱くなつてゐて、水はすぐに湯のようになつてしまふのでした。そればかりではなく、三人の身體から出る熱の匂の臭さは、閉め切つた部屋の中を、まるで室のようにいやな臭い匂と熱とで一杯にしてしまひました。
お姫さまは、息がつまつて、氣絶しさうになるのをこらへながら、一心に手拭をかへてゐましたが、やがて夕方になると片眼の男は、
「お姫さま、これを見てごらん下さい。」
と云つて枕元に立てかけた、虹色の鱗を見せました。



すると、どうでせう。向ふの方ではどうかしてこの三人を殺してしまはうと考へてゐる殿様が、御馳

走をこしらへてゐるものに云ひつけて、食物の中に毒を入れさせてゐるところが、あり／＼とそこにつりました。
「あれはあなたのお父さまが、私達を殺さうとして毒を入れてゐる所です。」片眼の男が云ひますと、お姫様は恥しさうに顔を赤くして首垂れてしまひました。
やがて襖のそとまで、女中達が御馳走を運んで来ますと、
「私達は、そんな毒の入つたものはたべたくない。」と片眼の男が叫びました。それを聞くと女中達は驚いて逃げ出してしまひました。
夜中になると片眼はまた、
「もう一度これを御覽下さい。」と枕元の鱗を示しました。今度は多勢の侍が、槍や刀を持つてこの部屋へ向つて来るのが明かにうつりました。さうしてやがてその部屋のそとまで来て、そうつと中の様子

を覗いてゐる姿を見ると、片眼は、

「明るくなれ。」と怒鳴りました。すると鱗は虹のような光をさら／＼放つて、部屋の中は晝よりも明るくなりました。そとにゐた侍達は一時ははつと驚きました。もうやけくそだと云ふ風に襖を破つて入らうとすると、

「襖を開くな。」と片手に握つた鱗に云ひつけました。すると襖はまるで鐵の扉のように、打つても叩いても、こはれもしなくなつてしまひました。

「あなたのお父さんは、なぜこんな事をなさるのでせう。」片眼はまたお姫さまに訊きました。

するとお姫さまは、恥しくつて堪らなくなつて、「うゝん。」と云ふと、そのまゝ氣絶してそこに仆れてしまつたのです。

「瑠璃子姫。瑠璃子姫。お起きなさい。もう夜が明けました。」と云ふ聲が耳に入つたので、お姫さまは驚いて眼を開けると、自分の頭のところ、立派な

らない草を下さいました。お蔭で私達は百足の毒蛇を退治て、あなたのような心の立派な方を貰ふことが出来るようになったのです。あなたのお父さんも、矢つ張り自分の大切な子が可愛いから、あんな事をなさつたのでせう。さあ、あちらへ行つて改めてお父さんにお目にかゝりませう。」

それを聞くとお姫様は心から喜んで、すぐにお父さまの前に揃つて行きました。殿様が驚いたり、耻かしがつたり、また喜ばれたのは云ふまでもありません。それから改めて大變御馳走をして、領分の民百姓にも、この勇士を引き會せました。

それから三日目に、この若い大將は、お姫様をつれて南の國へ歸ると云ひ出しました。さうして、殿様や人民が海邊まで送つてくると、そこで一枚の鱗を海に投げると、すぐに立派な船になりました。さうして皆んながそれに乗ると、船は勢ひよく走り出しました。

若い殿様のようなお侍が立つてゐて、その後には二人の強さうな家來がちゃんといつてゐました。章魚のお化けのような片眼も、耳無しも鼻無しも、熱っぽい臭い匂もなくなつて、お部屋の中には清々しい香さへ漂つてゐました。

「驚くことはありません。」若い大將らしい侍が優しく云ひました。「私は昨夕までは、片眼だつたあの不具です。この二人が耳無しと鼻無しです。もう三年ほど前に、さうつと南の方の私の國で餘り獵ばかりして、澤山の鳥や獸を殺したものですから、その罰でとう／＼大きな蛇と戦ふ時に毒氣をふきかけられて、あんな章魚のお化けみたいになつてしまつたのです。その時に一人の仙人が、これから東の日本へ行つて、百足の蛇を退治すれば、百足目にはきつと千年の甲羅を経た蛇に出會ふ。その蛇の耳の下にある鱗を取つて身體にひたせば、お前の身體の病氣も癒るし、大變幸ひな事に會ふよ、と云つて毒に當

それから後、一年に一度づつ、厚代判官の生きてゐる間は、瑠璃子姫からのお使がその船に乗つて若狭の國へ必ず來ました。若狭の判官も、領地の民も幸福に暮したことは云ふまでもありません。

いまでも若狭の國へ行くと、三人連れの大蛇捕りが、桶のような杵を持つて山の中を歩いてゐます。その人達も矢張り、大蛇の頭にある鱗を取つて外國人に賣ると、大變澤山なお金になると云ふ事です。不思議な事に、その人達も蛇の毒氣を受ける爲に、頭の毛も眉毛も髭もまつたなくなつてゐる所が、その若いお侍とそっくり似てゐます。

そんな人に、山奥で出逢つたら、どんな氣がするでせう。

若狭の人がこはそうに、こんな話を聞せてくれました。

(をばり)



二三

ホワイト・ハウス物語

(リンコルンの話)

大木雄三

タツタツタツ、タツ……。
喇叭の音が、夕暮れの町に鳴り響きます。暗く、ざりざり騒が

しい町の空には、金色の光りが投げ出された金の糸のやうに輝くのでした。
夜はもう町のどき側まできてゐ

るのです。おき近くにある森の梢では、氣の早い宵の明星が目をはちばち動かしてゐるのです。
ちやうどこの頃、町の中のある

一つの建物の中では、大勢の人たちが、むづかしい顔をして何か評議をこらしてをりました。

廣い廣い部屋です。集つてゐるのは、誰も誰も立派な様子をした、一目見たばかりでも偉い人だとかかるやうな人たちはばかりだつたのです。

千八百六十年、アメリカのイリノイ州のある町で、大統領を選挙するに就て、その候補者を誰にしようかと相談してゐたのでした。

『諸君。』

と、丸々と肥つた赤い顔の紳士が立ち上つて叫びました。

『僕は僕の考へてゐる人を言つてみませう。辨護士アブラハム・リンコルン君です。諸君はリンコル

ン君を思ひ出すのを忘れてゐたのではありませんか。こんな適當な人はありません。』

急に大勢がどよめき立ちました。

『さうだ。こんどの大統領には、せひリンコルン君に候補者に立つて貰はう。』

『賛成!』

五六人が口を揃へてかう言つたのです。

廣いアメリカで一番名譽ある大統領にならうとする人はどんな人でせう。リンコルンが立ち上つたとき、大勢の者は、珍らしさうな

目を走らせましたが、リンコルンの風采を見て、おやおや、とびつくりしてしまひました。

リンコルンの顔は猿のやうでし

た。そして身丈が六尺四寸もあるのです。大きな手を團扇のやうに廣げたところは、何ともいへない可笑しな格構だつたのです。
『まるで野蠻人のやうな男ぢやないか。これが大統領の候補者だなんて……』

腹の中で、冷く嘲笑つた者がありました。

とすん、とすんと荒い足音が近づきました。二人の百姓が這入つて來たのです。百姓は、大きな棒杭を擔いでをりました。

『皆さま。きいておくんない。』呆れてゐる大勢に向つて百姓は言ひました。

『私らは、このリンコルンの友達でさあ。今日は友達が大統領の候

補者になつたちう話ですがみてく
んなさい。この棒杭はね、友達が
私らと一緒に働いてゐた頃、みん
なして河ん中へ打ち込んだもので
がすよ。リンコルンは力持ちだか
ら、いちばん深く打ち込んだで、
抜くの骨が折れましただ。何し
ろ私らの友だちは力持ちだつてこ
と、お知らせにまゐりましただ。」

どつと笑聲が上りました。

『大統領の候補者君。その時の話
をしてくれたまへ。』

『よろしい！』

リンコルンはすこし顔をあかく
して言つたのです。

『三十年——すいぶん前です。こ
こにゐる二人の友達などと一緒に
に、私は日雇稼きをして暮してゐ

ました。土方の真似をしたり、船
を押したりしたのです。この棒杭
もたぶんその頃作つたものだつた
でせう。』

リンコルンはなつかしげに、ご
つごつした棒杭を、大きな手で撫
でながら、遠い遠い三十年前のこ
とを思ひ出さずにはゐられないの
でした。

二

リンコルンは、ケンタッキー州
のノッブといふ曠野ばかりの土地
で生れました。お父さんの名はト
マス、お母さんはナンシーといひ
ました。

貧乏な家でした。叩き大工のお
父さんは、すいぶん働いたのです
が、どうしても貧乏から抜けるこ

とができなかつたのです。リンコ
ルンも、生れるとちきに、貧乏な
ためにいろ／＼な苦勞をしなければ
ならないのでした。七歳のとき、
お父さんは子供たちを連れて、イ
ンデアナ州の方へ移轉することに
なりました。

『こんど行くところはいいところ
だよ。』

お父さんはかう言ひました。

子供たちはどんなに喜んだかし
れませんが。小犬のやうに喜んで、
お父さんについて行くことになつ
たのです。

僅かしかない荷物を積んだ車が、
住み馴れたノッブの村を後にし
て、コトリコトリと進みました。
『お父さん。こんどのお家はまた

なの！』

日が暮れかけたとき、リンコル
ンはきいてみました。うすら寒い
風が、心細い思ひを運んできたの
でした。

『もうぢき。』

と、お父さんは答へました。け
れどもなかなか遠いところだつた
のです。その晩は馬車の側で野宿
をしました。

翌朝になると、馬車はまたコト
コトと曠野の中を進むのです。

子供たちはすつかり疲れきつて、
もう話もしません。短い影法師を
小さい足で踏むで、その後からつ
いて行つたのです。

かうして三日目に、やうやく目
ざした土地へ着くことができました

たが、そこらやつぱり寂しい寂し
い曠野でした。

お父さんは木を伐つて来て、一
生懸命に家を建てはじめました。

リンコルンも負けずに手傳ひをし
て、まもなく一軒の小屋が出来上
りました。それは粗末な小屋で、
寢床さへもなかつたのです。家の
者は、木の間へ渡した板の上へ落
葉を敷いて眠らなければならな
いのでした。

けれどもお父さんは毎日働さま
した。そして木の根を掘り起した
あとへ、立派な畑を作つたのです。
小屋のまはりには、真青な麥の
葉が伸びるやうになりました。馬
鈴薯も植えました。かうしてすこ
しづゝ生活が楽になりはじめたと

きのことです。リンコルンのお母
さんはひどいマラリヤ熱にかゝつ
て、死んでしまつたのです。

三

『お母さん。麥はもう大きくなり
ましたよ。私たちも寒くはありま
せん。けれども私はお母さんに會
へないからつまりません。』

リンコルンはお母さんの墓の前
で、泣きながら獨言を言ひました。
墓には薄紫の馬鈴薯の花がうな
だれて咲いてゐます。

一人の坊さんが、ばつかりばつ
かり靴を鳴らして来て、

『どうしたの。』

と、リンコルンの肩へ手をかけ
て、泣き顔を覗きました。

『わかつた。』

坊さんは言ひました。そしてリンコルの涙を拭いてやつたのです。

『そんなにお母さんが戀しかつたら、お母さんが喜ぶやうに、出世して偉い人にならなければいけない。一ばんの親孝行はそれだよ。』

坊さんは言ひました。

リンコルは合點いて、『偉い人になりたい。私は出世したい。』

と、坊さんの顔を見上げたのでした。

その晩、この坊さんはリンコルの家に泊つて、いろ／＼な話をしました。偉い人になるには勉強しなければいけないとも言ひました。この日から、リンコルの心

は決つたのです。

『勉強しよう。勉強して偉い人にならう。』

固い決心だつたのです。けれどもリンコルの家には、一冊の本さへなかつたのです。

『お父さん。本を買つて下さい。』かう頼むと、お父さんは首を横に振つて、

『いけない。本なんか読むよりは、その時間で働くがよい。』

さう言つて、とりあつて呉れないのです。

『いゝえ、お父さん。あの坊さんは、勉強しなければ駄目だと言ひました。せひ學校へやつて下さい。』

リンコルは何度もお願いした

のです。たうとうお父さんも、熱心な願ひをき入れて、リンコルを學校へやることになりました。學校といつても、寂しい片田舎のことですから、まるで寺小屋のやうなところだつたのです。

しかしリンコルは、大將になつたやうに大喜びで、雨の日も風の日も休まずに學校へ行きました。その道のりが三里もあつたといふことです。

ある日、學校の玄關においてあつた牡鹿の角がこはれてゐました。先生は大へん怒つて、生徒を叱りつけました。しかし誰も、私がこはしました、といつて出る者がありません。

『先生。私がこはしたのです。申

しわけございませ

ん。』

リンコル

ンはいかう

言つて、

先生

の前

へ進

み出

たの

でし

た。

『ほ

んとう

か。お前

は嘘をつい

て、罪のある

者に代らうとし



てゐるのではあるまいね。それは感心な心がけです。けれども私を偽つてまで罪をかばふのはよいことではありません。』

先生は優しく言ひました。リンコルがこはしたのではないと思つたからです。

リンコルはちつと下を向いてゐました。が静かにすゝり泣いてゐたのです。

『先生。御免下さい。』

『よろしい。よろしい。お前の心がけに免じて、あれをこはした人を赦して上げよう。』

先生のお許しがあつたので、それまでびくびくしてゐたほとんどの悪戯者は、ほつと安心しました。

リンコルは學校中で評判者に

なることができました。玉蜀黍餅のお辨當ばかり持つてくるのでからかはれてゐたのに、それからもう悪口を言ふ者もありません。みんな争つて仲善しにならうとするくらゐでした。

四

寒い冬の日です。森を飛び出した風の子供は、ヒーヒー悲鳴をあげながら、廣い曠野の凍りついた土の上を馳けめぐりました。

リンコルの小屋を目がけて走つてきた風は、隙間から勢よく中へ入つて、家の人たちの頬べたを、冷たい爪で撫でるのでした。

『お、冷い。』

思はずリンコルは身體を震はせました。けれども目だけはちや

んと本の上を走つて、わき見もしないのです。

『もうお休み。』

と、お父さんが言ひました。

『え、その前に、もすこし別な本を讀まして下さい。』

リンコルはかう言つて、手を伸ばして棚から一冊の本を下しましたが、さつと顔色が變りました。手が震へました。

ばたん……

本が床へすべり落ちました。

『どうした？ えつ。』

お父さんは驚いて訊ねました。そして落した本を拾ひ上げたのでした。

『ワシントン物語』——と表紙に書いてありました。これは四五日

るのでした。

『私は謝りに行つて來たのです。』

すると、三日働けば許して呉れるといひました。その上、この本も下さるといふのです。』

嬉しさで、寒いのも冷いのも忘れてしまつたやうです。リンコルはすぐに本の頁を開いて讀みはじめたのでありました。

『ワシントンでは偉い方だ。お前もあんなに立派になるのかな。』

お父さんはのんきに笑ひました。

『え、きつとなります。』

リンコルは夜が更けたのも知らず夢中で『ワシントン物語』を讀み耽るのです。

前に、リンコルが人から借りて來たものです、その時、貸してくれた人は、

『これは大切な本だから、だいに讀んで下さい。汚しちや困りますよ。』

と、言つたのです。

『大丈夫。けつして汚しませんから、どうぞ。』

と、貸して貰つたのでした。

朝も晩も晝も、仕事をしてゐる間も、眠さへあればリンコルは、この本を讀んでゐたのです。で今晩も讀まうとして手にとつてみると、どうしたといふのでせう、表紙が濡れて、鼠色のしみがついてゐたのでした。

前の晩雨が降りました。屋根に

風が戸にあたつて、怒つたやうな聲を立てました。

五

リンコルは十八歳の時、近所の商人に雇はれて働いてをりました。

ある日、商人はリンコルを呼んで、

『大切な用があるんだ。お前行つてくれるかね。』

と、言ひました。

『實は、商用でニューヨークレアンスへ行きたいのだが、私はほかに忙しいことがあつて行かれないのだ。お前代つて行つてくれ。道中氣をつけてな。』

『かしこまりました。無事に御用をつとめませう。』

リンコルンは答へました。

その夜のことです。リンコルンと三人の者はミッシュビー何を進む船に乗つてをりました。船は主人の持船で、ニューオルレアスへ行くのには、いつもこの船で行くことになつてゐたのです。

リンコルンは船を河邊へ寄せて、その晩を明かさうとしてゐました。すると夜半にすさまじい大暴風雨が襲つてきました。

岸の木々は、空に向つて吠え狂り、波は狂つて岸に躍りかゝります。船は右に左に大きく揺られま

す。
『ひどいことになつたな。岸へ上がらうか。氣味が悪くてたまらな

い。』
雇人たちはこんな相談をはじめました。雨が横さまに頬を叩いて痛いほどです。

『駄目だ。』

と、リンコルンは言ひました。

『船には大切な品物があるのだぞ。ちやんと番をしてゐるのだ。』
『成程』と、他の者も思ひました。いつ悪い奴がやつて来ないとも限りません。ことに暴風雨の晩などには、よく船へ盗人が入ることが多いのです。

リンコルンたちは、手に手に棒などを持つて用意してをりました。すると思つたとはり、まもなく盗人がやつて來たのです。

『それつ、追捕へ。』
『何をッ。』

盗人と雇人との間に、たちまち争ひがはじまりました。擲つたり擲られたり、しばらく争つてゐましたが、この盗人たちはみんな黒人で、ひどく力が強かつたので、だんだんリンコルンの方が負けさうになつて來ました。

なぐられて倒れた味方を眺めたリンコルンは、かつと怒つてしまつたのです。

『盗人奴ッ。もう許さぬぞ。』

リンコルンは大きな丸太を抱へて、ぶんぶん振廻し出したのです。身丈六尺四寸の大男が力限りに振るのですから、打たれたらとても生きてはゐられません。盗人たちは、さんざんな目に會はされて、どしどし逃げて行つてしまひまし

た。

品物は何にも盗れません。翌日は、暴風雨の静まつた綺麗な波の上で、船は氣持よくすべつて目的のニューオルレアスへ進んだのでありました。

主人の信用は、それから後いつそう厚くなつたのです。主人は大勢の人に自慢さうに言ふのでした。

『うちのリンコルンは強い。まああのくらの強い男はほかにあるまい。』

六

リンコルンは強い。あいつは馬鹿力がある——こんな評判が高く

なりました。すると、
『ちや、グローヴ青年團の連中と

仕合ひをさせてみたら面白いだらう。』

と言ひ出した者があります。

グローヴ青年團といふのがありました。これは土地の亂暴者の寄合ひで、お酒が好きで、酔へば喧嘩が大好き、といふ人たちです。

みんな力が強い者ですから、憎いと思つても避けて通るやうにしてゐなければならぬのでした。そこでリンコルンがほんとに強いのなら、この青年たちに勝つことが出来るだらうといふことになつたのです。

こんなことがあるとも知らないリンコルンは、その日も店で働いてゐたのですが、夕方になつたので店をしまつて、賣上を勘定して

みると十錢多過ぎます。

『へんだなあ。』

小さい十錢銀貨を掌へ載せて、いろいろ考へてゐるうちに、やうやく思ひ出すことができました。
『あゝ、あのパン粉を買つて行つたお上さんだ。釣銭を間違つてしまつたのだつたな。よし届けて來やう。』

そのお上さんの家は一里もあるところでした。リンコルンが十錢の釣銭を届けたので、お上さんは、
『あなたは何て正直なものでせう。ほんとにはほんとに……。』

と、すっかり感心してしまひました。

店へ歸つてみると、大勢の人が待つてゐて、グローヴ青年團の者

と仕合ひをすることをすゝめまし
たけれども、リンコルンは、厭だ。
と断つたのでした。

大勢は、リンコルンは卑怯者だ、
相手が怖いのだ。と言ひました。

『卑怯だつて……何故だ。そんな
に言ふなら誰でも相手にしよう。』

リンコルンはすこし怒つてかう
言ひ放つたのでした。そこで忽ち
グロージ青年團の方からは、一番
強いといはれる團長のジャックが
選ばれてやつて來ました。

ジャックは肉の塊りのやうに隆
隆と肥つた男です。リンコルンは
仁王のやうな大男です。

二人は睨み合つて立ち上りまし
た。

『やつ。』

二つの肉塊が組みついた——と
思ふ間もなく、リンコルンはジャ
ックをぐいと高く差上げてしまつ
たのです。

『さあ、もう勝負はついたらう。

どうだい、ジャック！』

ジャックは齒がみしました。そ
していきなり力いづばい相手の胸
を蹴上げたのです。おとなしいリ
ンコルンも、ジャックの亂暴なや
り方には腹を立てずにゐられなかつたのでした。

『よし、まだ降参しないのか。』

『えつ。』と一聲。

ジャックは地響き立て、投げ出
されてしまひました。大勢の見物
は手を拍つて叫びました。

『えらいぞ、リンコルン。』と。

それから三十年の月日が経ちま
した。その長い間、リンコルンは
いろ／＼な苦勞をしてきたので
す。

七

義勇兵の隊長になつたこともあ
れば、小さな郵便局の局長を勤め
たこともあります。しかしいつも
變らないのは、勉強好きなことで
した。その勉強は役に立つたので
す。辯護士の試験にも及第しまし
た。後にはイリノイ洲の洲會議員
にも選ばれたのです。

そしてたうとう大統領の候補に
立つことになつたのです。この選
舉は激しい競争の末に目出度くリ
ンコルンが當選したのでした。
名譽あるアメリカ合衆國大統

領。大統領の住家ときまつた白亜
宮の主人——。

リンコルンは夢のやうな出世を
したのでした。そしてこの上は、ア
メリカの國の爲に生命を投げ出し
て働かうと、決心したのでありま
した。その頃アメリカでは黒人を
奴隸としてすいぶん苛めたもので
す。黒人はお金で賣買されて、牛
馬のやうに働かされてをりました。

『黒人も人だ。自由にしてやらな
ければならない。』

リンコルンはかう思つたので
す。大勢の者がこの考へに反對し
ました。けれどもリンコルンの心
は石よりも固かつたのです。その
爲に、リンコルンと同じ考へをも



つ者と、反對側の者とは二つに分
れて、激しい戦争をはじめました。
南北戦争といふのがこれです。

この戦争は、なかなか勝負がつ
きませんでした。負けては大へん
です。心配のあまり、リンコルン
は僅かな間に、頭がすっかり白髪、

に變つてしまつたのでした。

ある夕方、リンコルンは卓にもたれて、深く考へに沈んでゐると、劍をガチャつかせて一人の將校が入つて來ました。

「閣下！」と、將校は困つたやうな顔で言ひました。

「何ぢや。」

「はつ。一人の少女が、お目にかかりたいと申して參りました。軍人の妹であります。」

「よろしい。會はう。」

やがて少女が靜かに大統領の前に進んでまゐりました。心が臆したのか、肩のあたりに泣うたせてゐるのです。

「何の用？」

リンコルンは慈愛にいつばいに

なつた言葉で訊いたのでした。

少女はおどおどしながら、でも熱心に、

「大統領様。私の兄のスコットをお助け下さい。スコットは銃殺されるのでございます。あの銃殺されるので……。」

さう言つて、床の上に泣き崩れたのです。

リンコルンは、この少女を氣の毒に思はないではゐられなかつたのでした。

「お待ち。私がよいやうにして上げるから……。」

かう慰めてから、ペンを執つて、紙の上へすらすらと陸軍へやる命令書を書いたのです。

「さあ、これを持つておいで。兄

さんの生命は助かるだらう。」

少女の目は星のやうに輝きました。露がそこらほろつとこぼれました。少女は膝づいてリンコルンの靴に唇をつけたのです。

「有難うございます。大統領様。」
小さい——けれども力の籠つた聲で言ひました。

八

南北戦争は、遂にリンコルンの方の勝利になりました。

「萬歳。萬歳。」

聲は天地に響き渡りました。戰場から歸つてくる兵士たちは、勇しく都へ入つて來たのです。奴隸から解放された黒人は、生れてはじめて自由の身體になることができたので、その喜びといつ

たらありません。暖い太陽の下

に手を取り合つて、リンコルンを訪ねてお禮を言ふ者が、毎日絶えまなかつたのです。威張ることの嫌ひなリンコルンは誰にでも會つて、その喜ぶ顔を見て、自分も心から喜んでゐたのでした。だから白亜宮は毎日客で一杯でした。

ある日、一人の若者が妹らしい少女と二人連れでリンコルンに會ひにまゐりました。

リンコルンは一目見て、その少女を思ひ出すことができました。

「お、よく來た。」
少女はなつかしげに、リンコルンを見て、

「兄のスコットでございます。お助けして頂いたお禮を申上げにま

ゐりました。」と、言ひました。

スコットは進み出て、軍人らしく舉手の禮をしました。

「閣下。私は銃殺されるのを助けて頂きました。そのお禮にはどんなことでもいたします。どうぞ何なりと仰付け下さい。」

リンコルンは朗かに微笑して、

「ちや君に言ひたいことがある。君は私の言葉を守つてくれるだらうね。」と、言つたのでした。

「はい、どんなことでも。」
スコットは答へました。

「私は君を助けて上げた。しかし私の爲に助けて上げたのではない、立派な若者がアメリカから一人でも減るのが惜しかつたからだ、それから……こゝにある妹さ

んの兄思ひの心がいちらしかつたからだ。」

「はい。」スコットは咽喉が詰つた様に固くなつて答へました。

「わかつたね。君は國家のために助かつたのだ。妹さんの力で助けられたのだ。それがわかればよろしい。これからますます國家のために働いてくれたまへ。そしてこの可愛い妹さんを可愛がつて上げたまへ。」

リンコルンはさう言つて、またほがらかに笑つたのでした。

「閣下、必ずお言葉を守ります。」
スコットは棒のやうになつて、ちつとリンコルンの方を見つめました。嬉しさと有難さで心がいっぱいだったのです。

(をほり)

めた。何と可愛いらしい小鳥だらう。

秋の夜(賞)

東京市牛込區赤城校第四

三田 秀男

兄さん「ラデオを見せて」と僕は兄の方へ行つた。「今まだだめだよ。作るのだから」と兄はおひのけるやうに僕を見た。僕は急にかなしくなり「わあつ」と大ごゑ上げてないた。となりの室にゐた母は「又兄さんは弟をいじめるのですか。もういゝかげんにしなさい。」といつて兄を叱つた。兄は「やい秀男、おぼえてろ」といつて外へでて行つた。母はおくわしをくれて、なくののではないよと云つて、又となりの室へはひつていつた。僕はにこにこしながら外へ



綴 方
藤 齋 佐 次郎 選

文鳥(賞)

東京府品川町城南校

神 戸 照 雄

日はどんより曇つて居る。櫻ももう散り切つて、たゞ櫻んぼがたくさんぶらさがつた淋しい庭。花といふ花は、一つとして好いのがない。縁側ではおばあさんが、何か縫ぎものをして居る。縁側の隅には、文鳥が二匹仲好く籠の中の枝にとまり、足をちぎめた儘、うとうと眠つて居る。今日はまだ餌

んに肴町の方へにげて行つた。母は又いそいそとできて「成一、成一」とよく兄の名をよんだ。又僕はかしをもらひ、こんどは家であそんだ。しばらくして兄がかへつてきて、仲よくしようと五錢くれた。父はにこにこ笑つてゐた。

大塚先生(賞)

東京市本郷區元町二ノ五五

中 坂 石 次 郎

『はつ』とした瞬間「大塚先生ぢやないか」と、電光のやうに思つた。僕は洗ふ手をやめて、じつとその人の顔を見詰めたが、次の瞬間「あゝちがつた」と、氣拔がしたやうに急に淋しい氣持になつてジャブリと湯を溶びると、からだを二三度こすつて見た。

『だがよく似てゐる。やせ氣味の

何となく親味のある顔。それから茶色がかつた長くもないちよぼひげ……あゝさう……。なつかしい大塚先生……」と、僕は何時のまにか遠い記憶をたどつてゐた。

『ほんとに、よく似てゐる。まさか御兄弟ぢやあるまい』と、僕はそんな事まで考へて見た。

毛 蟲

千葉縣山武郡東金校第六

長 谷 川 幸

私がお湯に入つたら、やつちやんが裸でぶらんこに乗つた。私が「毛蟲が落ちるよ。」と言つたら、やつちやんはあわてておりようと思つてちよいとはねた。するとさかさまにおつちこちで、ぶらんこの綱へ足をひつかけて「おいてな

風景(賞)

東京深川伊崎崎町

沖 津 清 瑛





石 榴 甲 府 市 五 郎

お父さんはお湯からあがつたばつかりで、かなたらひの中へ頭を入れて洗つてゐたが、ふつとんで行つた。そしてやつちやんを抱いて来て自分の洗つてた金だらひで頭をひやししながら、「早く手拭を持つて来るだよ。」と言つた。母ちやんはあわてゝ私の手ぬぐひを持つていつてしまつた。私が「そんな手拭は私のだかん、目がうるよ。」

付いてやるもんだ。だけん幸はあにしてそんなことゆつた。康祐に「かんにとん言へ。」と言つて私の方へ向いた。母ちやんは「足をはづせばとんでしまひましたね。」と言つた。私はお父さんが店へ行つてしまふまでお湯に入つてゝ、おこられないうちに寝てしまはうと思ひ、お湯の中へむぐつてゐた。するとお父さんは「今度裸でふら

んこに乗るな。」と言つてすぐ頭の後をさばりながら「こゝをつくとすぐ死んちやうぞ。」と言つた。そうしてお湯の所へつれて来た。私が「まだいてがん。」と言ふと「うん」とかぶりを振つた。「がまんすると向いてくるよ。」と、うそをつくと、やつちやんは「一寸はいてさ」と言つたので、そばに居た人は皆笑つてしまつた。

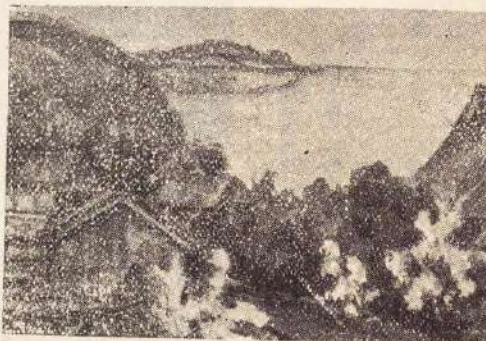
休みと思へば

茨城縣結城郡五箇校高一

古 谷 み い

今日は八月一日。今から三十一日間休むのか。家にゐるのはあきれて仕方がないなあ。「こんなことを考へながら、毎日元氣に暮しても、はや五日程休めば新學期。私はいつも思ふ。」

「どうしてこんなに月日のたつのは早いのだらう。」
休み三十一日間をゆめの間にく



風景

岐阜縣岡谷
岩 田 繁 夫

らすか。
もつとも讀本にも「光陰は矢の如く。」といふことがあつた。が月日のたつのもそれと同じだなあ二學期を楽しく學びませう。

飴賣り婆さん

東京市深川區伊勢崎町三四高崎方

沖 野 清 琉

(十五歳)

トン／＼。アーコリヤ、コリヤ。

いつもの飴賣り婆さんが縁臺の上に腰をおろした。トン／＼。アーコリヤ／＼。まだやつてゐる。「おい婆さんどうだい賣れるかい。」ちがふ方向から来た飴賣り爺さんが突然聲をかけた。
「なあに」婆さんは額に皺をよせた。

「でも、お前壹圓位は……」婆さ

んはさへざる様に「どうして／＼壹圓どころか五拾錢賣れる日は少ないだよ。今日なんざあ、まるで、うれや／＼せんもん」力ぬけた聲で答へた。

「そうかい、俺だつてやつぱりせんなんもんだよ。まあせいせい勉強して賣るさ。」なぐさめるやうに言葉のこして立ち去つた。

トン／＼。婆さんは又古びた太鼓をうちはじめた。

「ア、コリヤ／＼」一生懸命客をよんでゐる。客は一人もこない。時々肩にかけてある飴箱の中をのぞきこんでゐた。其の度に婆さんの顔はさびしく見えた。

小箱には色ざめた旗が二三本やはりさびしく動いてゐた。「アーコリヤ、コリヤ」飴賣り老婆は力なく腰をかけた。



一番こわかった事

熊本縣下金城郡豊野村下郷尋六

吉田 貢

『あぶなあい、僕は木太刀を作らうと、一生懸命、木をけすつて居た。『あぶなあい、僕は、はつと思つて、顔を上げてみると、一頭の牛が僕の目がけてまっしぐらにかけて来る。其の後から、一人

内母の男が、『あぶなあい、』と、さけびながら、走つて来る。牛は早や十間ばかりにせまつて居る。僕は、びつくりして、にげやうとしたが小さな一すち道で、右は見上げるやうな

お庭にて

秋田縣仙北郡紫川村上荒川

岩谷 安代

(十三歳)

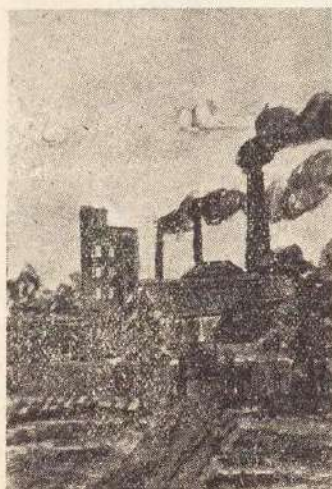
『さあちやんとうつすんでしょ。』母の注意に三人は急に真面目になつた。『秀子さん、なに手を置いてはいけない。こうしるのだよ』父さんは黒い布の中から顔と手を出しておつしやつた。『まだなの父さん』小さい妹は、待ち疲れたのか、小さい欠伸を一ツした。『今しぐだよ。それ、又動いた。いゝか、動かないように、もつと

顔を上げて……今だよ、動いちゃいけない。ソーラ……』カチン……』よしよしもう好い。今度はよく寫つたらしいぞ』父さんは、種板をそつとはずて、暗室へいらつしやつた。後に残つた三人ははつと顔を見合はせた。

雨

久留米市莊島町七曲尋三

椿原 英次



私シハ雨が一番キラヒデス。外ニモ出ラレズ、出テモ衣物ヲ汚シタリ、下駄ノ緒ヲ切ツタリ其他色シナイヤナ事バカリ起リマスカラ。雨が降ルト私ハワザト大キイ聲デ兩手ヲ怒ラシテ『ヤイ、雨ナゼ降ルカ』ト走り廻リタイ様ナ氣ニナリマス。ピツシヨリスレタ衣物ヲ投ゲテ明日ハドウダロウカト暗イ室ノ中デ思フ時ノイヤナコト。私ハモウタマラナクナツタ様ナ氣ガシマス。然シ静カニ内ニ居テ色色ナ本ヲ讀マセルノハ雨デス。心ヲ静カニ落着カセ、外ニ幾分ナリト出サセヌ様ニスルノモ雨デス。學校歸

鱗雲

京都市下京西洞院通

東 政二郎

(十四歳)

『君、今日はどうしたんだらう。少しも釣れないね。そのくせ、鱗雲が出てゐるのに』友は竿を上げて、道具を片附けながら云つた。『鱗雲が出ればよく釣れるなんて事は出鱈目さ』笑ひながら、私は答へた。

『それはさうかも知れないが、まああの綺麗な雲を見給へ』友に云はれて、私はひよいと空を仰いでみた。秋の黄昏の澄んだ空に、銀色に光る小さい雲が、鱗の様に集

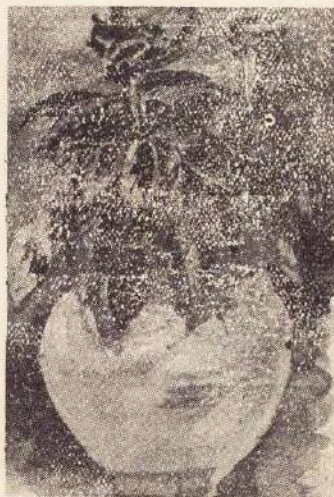
月見

東京府北多摩郡砂川村九ノ六九

田中いと子

(十五歳)

短い秋の日が暮れるか暮れない内に、まんまるな月が東方の空に浮ぶのを私は珍らしい物を見たやうに喜んだ。其れは有り得べからざる所に月の出るのを発見したからである。私はさがし物をしながら、裏の方に、はからずも大きな木の間にわづかばかり現れて居る東方の空に今昇り初めた大きい月を見つけたために、大層珍らしく且嬉しく感じたのであつた。そこで私はさがし物をやめて、大急ぎでお母さまに報告するとお母様は半信半疑で、私の後について来たが、私の指さす方を一寸見るとこゑを上げて讚嘆した。其の聲にさそはれた弟もわらひながら出て来た。



『花のトイケ』 東郷 政二 郎

つて浮んでゐた「ほんとうに綺麗だね」「僕は、さつきからあの雲ばかり見てゐたが、ちつとも動かないやうだぜ」私は、友の言葉には答へず黙つて銀色の雲を見つめてゐた。

ちこく

不明

太田ヨシ

私は、はすかしくて、顔があつくなつて来た。先生の前へ来て一れいして机についた。



金の星社 新年號 出版だより

今月は、年末から新年にかけての舊版物の大増版を行つた爲めに、新刊は左の一種だけしか發行出来ませんでした。偉人傳の方はなほ今後は續々と刊行になります。

ローマの英雄

◆シーザー (近刊)

霜田史光先生著 定價金五錢 送料六錢

「シーザー」は偉人傳の第三編として發行の豫定でありましたが、第二編の豫定になつてゐた「ネルソン」が都合上後退しになつたために、この方が先になりましました。霜田史光先生の苦心の作だけに英雄シーザーの面影が、生ひ立ちから最後まで、手に汗をにぎらせる

程度、せまつて書かれてゐます。御承知の通り、シーザーの時代のローマは實に大したものでした。世界の歴史にローマといふ國が後の世まで残つたのは此の時代のローマが偉い働きをなしたからでした。従つて、澤山の英雄があらはれた。雄壯な事、恐らく此の時代の程の時代はないといへませう。勝つては國の征服者となり、負ければ國民全體が奴隷にされてしまふやうな時代でしたから、いざ職ふとなつて、その必死なことは想像の外です。老人や女までが戦線に立つて戦つたといふ一事で考へても、如何に恐ろしい時代であつたか、知られます。さういふ血なまぐさい中に育つたシーザーの一生は實に變化極まりないものでした。殊に最後にローマの元老院で刺し殺される場面などは、英雄最後としてこれ程劇的なものはありませぬ。全篇約二百頁、皆さんの必讀の書である事い

ふまでもありません。

左の二書は日本圖書館協會から模範書として推薦されました。

◆狼少年 (小島政二先生譯)

毎年「讀書週間」といつて十一月の一日から七日までの一週間が、その日になつてをりまして、その間に讀書に就て全国的にいろいろの催物や計畫があります。その「讀書週間」に先き立つて、日本圖書館協會が少年少女の愛讀書として最もよい本を推薦する事になつてゐます。それは、東京の日本圖書館で少年少女諸君から、過去一ケ年の間に最も多く讀まれた本の中から種々選んで、その百種を協會で嚴選して、最もよい本を從種か推薦する事になるのです。本年は四十種の本が推薦書として挙げられました。本社發行の中でも「狼少年」と「家なき娘」とが挙げられましたが、翻譯書で

本社出版部

の一大計畫

名著大系、偉人傳大系と、續いていふ本を發行して、日本の讀書界に貢獻してゐるわが社は、明年一月よりスバらしい大きな計畫を實行する爲めに目下奔走いたしてゐます。これは本社出版部のながい間の計畫でありましたが、それがいよいよ今度實行されるのです。これが世間に現れたら、實に面白い事になりませう。何れ次號あたりでその計畫の内容を發表することになりませう。



通
信

自由畫選評

山本鼎

△今月は上作が甚だ少い。と振つて出
て下りて毛筆畫やペン畫や木炭畫や
コンデー畫やクレヨン畫や、水彩畫や
いろ／＼な繪がほしい。人物畫や、風景畫
や、器物の繪や、花の繪や、動物、鳥、魚
魚貝等いろ／＼な繪がほしい。線だけで描
いたものや、擦染的に影日向をつけたも
の、漆彩を施したものと、簡單にスケッチ
したものや、よく見てほつちと描いたも
の、やいろ／＼なものがほしい。どんな風な
繪でも僕は好きです。そしてどんな風な繪
でも一と目て良し悪いではないのです
安心して下さい、送つて下さる。△
△神津清琉君の『風景』。首飾、色も幼稚だ
と申すものがないが、さび／＼描いて居る處
をよといふまじです。殊に二本の松の木と家
△丸茂五郎君の『石櫓』。水影に手練れて居

綴方の選後に

齋藤佐次郎

● 今月はい、作の少ない月でした。先づ神戶照雄さんの『文島』なんていい、作の方です。はじめる方はあまり感心出来ませんが、終の方になつて、文島に輝をやるあたりが非常に面白く讀ませます。

● 三田秀男さんの『秋の夜』は無邪氣で面白いです。

● 中坂石次郎さんの『大塚先生』は、大塚先生といふものを少しもあらはさないで、あるところの氣持ちだけを書いて、それで大塚先生の面影がよく出てゐるのは注目されます。

幼年詩選評

若山牧水

▲何よりも自然な素直さが嬉しい。
▲個人組では矢張り海蓬公さんのが一番
光つてゐた。いつも採るのが今度はおづか
つておかうかとも思つたけれど、結局一篇
だけ採つた。ほかのものもみんな面白かつた
が。

▲学校組では山形縣の樺澤校、福岡縣の下
妻校などが面白かつた。だが後者の二校には
や願にはまらなかつた。つまりはしないだ

一五四

かうともしないで、直面上に特^てに上手に書
す。それだけに綴^ずり力^りが充分に出来
てゐるが認められず。東金小學校の作
品は皆なさうです。たゞして甲乙が無い位
に皆な上手です。

○茨城縣の五箇小學校から澤山の作が來ま
した。茨城縣の小供持^もつ有^あるに親んだ純朴
な氣持^{きもち}ちがどの作にもあらはれてゐる。
一つ他の縣の學校の生徒には見られないと
いふので、それだけに如何にも素朴で、作に
あらはれた上では、皆なが自分の心持^{こも}ちを
表し切^{あらわ}てゐるが、フツギ見^みえなす。その代
り書^かける事柄^{ことば}がウツクなもので、その代
り世辭^{よこしま}のない田舎^{いなか}の人の話^{はなし}を聞くやうな面白
味^{おもしろ}みがあります。入選^{いりせん}作に擧^あげた古谷^{ふるや}みづ
の「休^{やす}みになつたと思^{おも}へば」はその一例
です。

童話選評

齋藤佐次郎

○今月はたいして面白い作がありませんで



寺内萬治郎畫伯

した。中で左の賭作が注目されました。
夜の出来事(島田街一)泣くことゝ教つた王
様(長谷川好延)二人のお百姓(山根青徑)坊
ちゃんと風(山根勝治)倒さけ(近藤富士雄)
愛本橋の大龍(中坂夜詩路)

○それで島田さんの「夜の出来事」が風魔りな面白味を持つてゐるのに、これを推薦作に挙げました。どんなような愉快にも氣話味を持つたものであるのが、愉悅にも「柿」の方が面白いと思ひます。

○長谷川好延さんのは「泣くことを教つた王様」の外にもう一つ「玄兵衛爺さんと公孫樹」といふのがあります。面白く讀まずといふ點では前者が勝れてゐますが、藝術的價值からいつたら後者にあります。ただ「電話」などが出て來るは、如何にも此の作の調子をぶち壊すものと思ひました。

○山根青徑さんのお百姓はおとなくしてよくまとまつてゐます。可もなし、不可もなし、といふ温厚な作風です。若い人ばかりと元氣があつたらと思はれます。腹材としては使ひ古なれたものだけに、またあと思はせるのが損です。

編輯室より
(記者)

○新年號に菊池寛先生の作が間に合はなかつたのは残念です。御旅行の爲めに後になりましたが、次號には間合ふが當です。

○『金の星』が常に童話童謡雑誌の第一人者として認められてゐるのは苦心の甲斐も下つて愉快です。二月號の大活躍をお待ち下さい。

○金の星の畫家から帝展に寺内、水島の兩畫伯が出品して共に特選入選の名譽を得られたのは、金の星の誇りでありました。

○文壇の老大家として有名な田山花袋先生が特に本誌の爲めに『日蝕の日』といふ傑作を寄せられたのは、これもまた本誌の名譽の一つです。

○挿畫には有名な埴島勝一先生が驚く可き苦心の名作を寄せられました。新年雑誌界の一大驚愕となつてゐます。

○新年附録の『寶 探險双六』は社員一同の苦心になつたものですから、大に皆さんでやつて見て下さい。そして、皆さんの御批評を聞かせて下さい。

自由書掲載外佳作

西川むめ子(千葉) 篠藤 一平(山口)
飯守武雄(和歌山) 桑田 操(山口)
中根石次郎(東京) 岩谷 貞三(秋田)
猪野クニ(千葉) 千葉 秀子(千葉)
石橋晋太郎(青森) 山崎 俊雄(東京)
中島トキエ(千葉) 小林 ひで(千葉)

幼年詩掲載外佳作

川野 孝(千葉) 山下のメロ(山口)
間鍋 忠次(山口) 水町 鶴松(福岡)
平高 義福(福岡) 中島ときと(千葉)
松澤 エイ(千葉) 川口 國雄(福岡)
皆川 充(東京) 伊東トヨエ(長野)
高吉 長三(千葉) 松澤ミ子(千葉)
鶴岡 きく(千葉) 藤澤 一郎(東京)
廣池 昭(長野) 小井 沼清(埼玉)
會田 清吉(埼玉) 鈴木とし子(千葉)
長田 新一(山形) 遠藤まさみ(山形)
小林ナツエ(山形) 金子 仙助(埼玉)
下永シヅ子(福岡) 河邊すみ子(神奈川)
宮本 榮運(山形) 木村 光義(神奈川)
山本 榮運(山形) 北村 政夫(東京)
山本みゆ子(滋賀) 浅山ツノ(福岡)
龜岡 忠治(山形) 河野 タキ(埼玉)

綴方掲載外佳作

小林 ひで(千葉) 直島彌重子(東京)
西川むめ子(千葉) 伊藤 光子(千葉)

話掲載外佳作

最谷川好延(東京) 山根 青徳(島根)
山崎 勝治(東京) 近藤富士雄(京都)
中根夜路(東京) 茶木七郎(神奈川)
大島まさな(東京) 大澤 武一(東京)
高林 窓月(新潟) 桑田 操(山口)
東政 二郎(京都) 大森 尊郎(東京)
香山 彌夫(神奈川) 伊藤 悟(不明)

子供篇

竹田八千代(東京) 金水マサ子(山口)
三田 秀男(東京) 内田まり子(東京)
加藤 民士(東京) 川西 恒夫(廣島)
河野正三郎(朝鮮) 山本 夏彦(不明)
森次マサ子(山口) 岩谷 泰三(秋田)

童話掲載外佳作

高橋 貞三(秋田) 高橋 良千葉
椿原 英次(久留米) 桑田 操(山口)
野島 虎次(石川) 茶木富美子(横須賀)
三宅幾久郎(東京) 山田 秀男(東京)
高野 修一(横須賀) 山中 梅子(茨城)
茂呂 八七(茨城) 橋本 なか(若狭)
出口 かよ(若狭) 木村 ナツ(若狭)
岩田 繁夫(岐阜) 中島ときと(千葉)
吉田子代乃(東京) 吉田 美雪(宮山)
藤田 房枝(若狭) 寺西 フミ(若狭)
茂呂 キク(茨城) 吉原 勝英(茨城)

講演だより

札幌より

鹽谷羊友

山と海につつまれた函館と小樽から札幌に着いたのは、十二日夕刻、静かな宿に寝た。身震いした。十二日夕刻、静かな宿に寝た。中央にある市街は、道路の両方にアカシヤの樹を植えて、その下を道るとき、自然になにか考へればならぬ様な静な美しい感じがする。十三日午前、市内の東小學校で二千名の生徒さん二組に別けてお話をし、十四日は中央小學校で千五百名に二回、午後大連小學校で千五百名に一回、十四日午前には、三年以下九百名に一回、十時から登水小學校で二千二百名に二回、午後登平小學校で千五百名に一回、お話をしました。で、疲れきつた私は、電車で宿についてすぐ休みました。その晩金の星の愛讀者中野君と塚本君が訪ねて来てくれました。中野君ととも話の研究者で、種々とかたり合ひ、寄宿舍の門限があるので、八時半頃雨君と別れてすぐまた床につきました。十六日の午前には、四回成小學校で午前二千三百名の生徒さんに二回に別けてお話をしました。午後から塚本中野兩君に案内されて、山鼻小學校にて六百名の生徒さんに「十人の大怪」を話しました。そして、

大人篇

宮本 學(熊本) 原勝 利(東京)
宮本 隆超(静岡) 奥田 準一(福岡)
杜 仙之助(岐阜) 若田部喜 郎(滋賀)
若井ひろし(廣島) 名方 和郎(大阪)
坂口 友吉(鳥取) 寂野 哀歩(神奈川)
小島四四歩(東京) 穴戸 切夫(東京)
河邊すみ子(神奈川) 河野 砥吉(朝鮮)
談 一朗(東京) 川島 秀雄(東京)
木村 光義(神奈川) 柳瀬まさし(和歌山)
中島案山子(佐賀) 森 ほたる(愛知)
天野貞三郎(北海道) 横井秀之進(大阪)
桑田 操(山口) 福井 勝秋(東京)
島村 子草(群馬) 岡本 正二(愛知)
植上春之助(和歌山) 古村つ草(大阪)
中川たけ子(大分) 森 いづ子(東京)
濱口 叶長崎 古澤吉雄男(東京)
石川八十太郎(東京) 田中 貞三(富山)
野村 志朗(盛岡) 中村 武男(東京)
岩月 水明(横濱) 木内森三郎(長野)
牧内さのぶ(長野) 高野 修一(横須賀)
野田 吉雄(横須賀) 五味くに三(山梨)
三島 定東(島根) 宮本 範吉(熊本)
和泉幸一郎(青森) 曾根比登志(姫路)
四野 光兒(岩手) 金森 武夫(岐阜)
増田 實(茨城) 日高 紅椿(臺灣)

子供篇

本多 鐵磨(東京) 島田 信一(東京)
高橋英徳吉(盛岡) 小泉 順一(鳥取)
小山 良平(山形) 藤機多味男(静岡)

新誌友名簿

神谷 彰子(東京) 廣澤 幸一(東京)
酒井 亮(茨城) 丸山 昌壽(長野)
石井 佐市(三重) 渡邊 直一(新潟)
清水 長代(長野) (以下次號)

新しく出た本

◆平家物語(長尾豊氏編) ヨーネン社の學級文庫の内として發行になりました。平家物語を少年少女の方々にわかりやすく、面白く書いたものでありますから非常によい本です。源氏と平家が互ひに争つた當時のいふく、の勇しい話やあはれな話、此の本によつて知ることが出来ます。(四六判、四〇頁、定価四角八、松本郷土館、ヨーネン社發行)
◆ベルシア童話集(水橋卓介編) 金蘭社の世界童話叢書の第一編です。お伽の國ベルシアの童話は本書に面白く、お伽の國が、これまで日本に知られておまへせん。本書を讀んだ方は忘れられぬ面白味を感じませう。(四六判、三三〇頁、定価四角五、拾銭市外集、上野達二八金蘭社發行)

懸賞創作募集

【意 注】 童 童 【意 注】 綴 幼 自

自由畫……山 本 鼎先生選
 年詩……若 山 牧 水先生選
 方……編 輯 部 選

課題は何でもかまいません。諸君の目に見えたり感じたり、したことが、諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫になるべく實用紙に、幼年詩や綴方になるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號轉切は十二月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は三月號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地金の星社。

【意 注】 童 童 【意 注】 綴 幼 自
 實話十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓つゝ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓つゝ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。親切發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿は返しません。

定價 壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
 三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
 半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
 一年分十二冊（送料共）四圓八拾錢
 但し新年號は特別號で五十錢です。御注文の分は、この分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五六番

送 御注文は必ず前金で御拂込み下さい
 金 送金は振替が一歩便利で御座います
 の 切手代用は（巻切手）一割増しです
 注 第何巻第何號よりと書いてください
 意 住所姓名はつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十四年十二月一日印刷納本（毎月一回）
 大正十五年一月一日發行（毎月一回）

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
 印刷所 小 端 安 之 助
 印刷所 安 進 堂

發行所 金の星社
 東京市本郷區動坂町三五九番地
 電話小石川五三六八七番

赤い猫

装幀・装畫・岡本歸一畫伯、寺内萬治郎畫伯
 四六判箱入美本・内容一五〇頁・送料十二錢
 日本で出来た最初の童話讀本であつて、又最も立派な童話讀本として大評判の本です。各篇とも面白いこと此の上なく、しかも深い教訓を持つたものばかりなので、沖野先生の一大傑作集ともいはれてゐます。是非一度は讀んで置かなければならない名著です。

沖野岩三郎先生の二大童話讀本

金の釣瓶

装幀・装畫・寺内萬治郎畫伯、水島爾保布畫伯
 四六判箱入美本・内容一五〇頁・送料十二錢
 『赤い猫』と同様大評判を受けてゐる童話讀本です。沖野先生の童話讀本は、本書の發行によつていよいよ有名になつて、各學校の課外讀本として最もよい本であるばかりでなく、少年少女を持つた家庭には是非備へねばならないといふ讃辭を受けました。

東 京 本 郷 區 動 坂 町 三 五 九 番 地
 金 星 社
 振 替 口 座 東 京 五 九 五 六 番
 電 話 小 石 川 五 三 六 八 七 番

大正十五年

あけまして
おめでたらう御座います。

皆さん、
歯を丈夫にしたいなら
歯をきれいにしたいなら
ライオンはみがきを

おつかひなさい。

百科全書をかねた

ライオン常用日記は

面白くつて、ためになり、
いろいろの事が澤山かいてあります。

ライオン歯磨本舗發行

東京本所區外手町六



上製金堂
特製金堂
(金堂十二編)

26 館